
ヤクザでバイト

星見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤクザでバイト

【Nコード】

N0804D

【作者名】

星見

【あらすじ】

家出少年はあるやくざに雇われ、バイトとしてその家で下働きすることになった。そんな彼バイト生活は？個性的なキャラクターが織り成す物語。 2010年1月15日連載を中断していますが作者サイトにて連載する準備をしています。 気長に待って頂けたら幸いです。 サイトは妖恋ページにあるURLから飛べます。

episode / 00 少年の生き方

季節は秋。紅葉も終わり葉は残らず落ちた晩秋の頃。

少年は家出した。

もう冬に片足をつつこんだ季節だ。

時刻は深夜。僅かな荷物のみをもち家出した少年には頼れる親戚もなく、冷たい風のふく夜を公園のベンチに座って過ごしていた。カジュアルジャケットに履き古しのジーンズという出で立ちの少年は寒さに震えている。秋の夜の、冷え込む時間帯にその服装ではそれもしかたがない。

まだ十代半ば、高校生くらいだろうか。何日も風呂に入っていないし、満身に眠ることもできないため、少年はやつれ、薄汚れている。吐く息は白く、体感温度を下げているような錯覚すら覚えてしま

う。

静かな夜だった。だが、そんな静寂は若い言葉で打ち砕かれる。

(今日は収穫ねーな)

(さっきのオヤジつけたな。マジ泣きだったぜ)

(そりゃあ顔面バットで殴られりゃあ泣くだろ)

(でもよー四千エンだぜ?)

(貧乏サラリーマンってやつだ)

笑いを含む会話。

近づく足音。

じゃり、と足音がして少年は闇に目を凝らす。闇に紛れて何人かの男が近づいてきたらしい。

公園に一つだけある頼りない電灯に照らされ、家出少年は声の主たちを見た。

若い少年たちだ。家出少年とさほど変わらない。ただ、服装と御面相は驚く程違う。カラフルな頭髮に崩した派手系な衣服。

ピアスやアクセサリーが光る、一目で不良だとわかる出で立ちだ。此処までわかり易いとかえってすごいと贅辞を送りたくなる。

少年は立ち上がり、唯一の荷物であるリュックを背負った。

「お」

どうやら彼らは闇に紛れていた少年に気付いたらしい。彼らが小声で何か言っているのが少年の耳に届く。

「なあ、キミー。オカネ持ってるー？」

嘲るように男の一人が言った。手にはバットを持ち、いやらしい下品な笑いを浮かべる。

俗にいう　タカリ　リンチ　狩り　といった人様に自慢出来ない行為だ。

……こいつらなら、まあいいかな。

一瞬だけ頭を回し、少年は荷物をベンチに戻す。

「お。いいこでちゅねー、ちゃっちゃと金だせば痛くないよー」

彼らの内の誰かが言っていると笑いが起きた。

「イヤだ」

少年ははつきりと言った。その声には恐れなど少しもない、凜とした響きを持っていて、彼らは笑いを止める。

「ああ？　調子のんなよ。財布だせ。半殺しに済ませてやる」

機嫌を損ねたらしい男が言った。どうやら三人組のようだ。それぞれバットなどで武装している。

「嫌だ」

再度少年は言った。

「あつそ、じゃ死ね」

堂々と一人が近づいてくる。絶対的優位に見せる自信を伴って。ふりおろされるバット。本来の用途を逸脱して、球ではなく少年

を砕こうと迷うことなく風を切る。

だが、少年は速かった。

降りおろされたバットより後に動いたにも関わらず、その動きを見据え、瞬時に左へ半回転して回避。その勢いを生かし、渾身の回し蹴りを男に見舞った。

鈍い音をたてて男は無様に地面に転がる。的確に顎を狙った蹴りは一撃で男の意識を奪った。

「てめえ！」

二人の男がバットを構える。しかし少年は揺るがないし焦らない。冷やかな瞳を二人に向けて、冷やかに言い放つ。

「悪いとは思わない。こつちも大変なんでね」 そう少年は言った。しかし激昂した二人の男は聞く耳を持ち合わせていなかった。

それからは一瞬だった。

振り下ろされるバットを弾き、バタフライナイフを握った腕をひねり上げ、顔面に蹴りをいれ、腹部に右フックを容赦なく叩き込む。激しく咳き込む金髪の男の頭に踵を容赦なく振り下ろすと彼はそのまま地面に伏して微動だにしなくなった。

三人目が沈んだところで少年は一息つく。

それから少年は男たちの服を漁り、財布から札を抜き出した。

「おあいこだよ」

感情は籠もっていない。むしろ隠しているように聞こえる。

心の中で彼らに襲われ金を奪われたサラリーマンに謝罪しつつ少年は札をジーンズに突っ込むと少年は夜の闇に宛もなく去っていった。

朝が来た。暖かい日差しが降り注ぐ秋晴れの日。
昨夜の少年は宛もなく街を歩いてた。

少年が家出をしてから今日で二週間が過ぎていた。
所持品は数枚の着替えと電源を切ったままの携帯、それだけだ。
家出した当初に所持していた金は数日で尽きた。それから少年は
かなりひもじかった。今も正直痛いくらいに腹が悲鳴を上げている。
昨夜の金で買ったパン。節約の為1日一食。ギリギリまで切り詰
めていた。

腹が減りすぎて動けなくなった少年は仕方なく近くの公園に座っ
てこれからのことを考えていた。
昨日も殆ど変わらない。

そして襲われた。

そして気付いた。

目には目を、タカリにはタカリをと。

それから少年は金が無くなると公園やゲーセンで夜を過ごし、タ
カリ狩りをしてた。

もちろん危険だ。だが、少年は強かった。いとも簡単に不良ども
を殴り倒し、戦利品を獲ていた。

「ありがとうございました」

コンビニのレジ打ちの棒読みな声に送られ少年はコンビニを出る。弁当と温かいお茶を買った少年は昨日とは違う公園に向かい、其処で弁当を食べていた。

もそもそとゴマ塩の振られた温い米を咀嚼し固いエビフライを一口で半分ほど噛みきる。

ずずっとお茶をすすりながら少年は一息いれて考えた。自分はどうすればいいのか。

少年は自分を理解していた。

高校も卒業していない、未成年の家出少年を雇ってくれるような場所はどこにもない。

少年はわかっていた。

自分がちっぽけなただの子供だということ。

「見つけたぜ……」

声がした。

前を見る。

そこには先日の方がいた。

「ぶつ殺す」

バットを振るう。数は昨日の倍の六人。

「無理だよ」

少年は笑う。

それは自嘲。

少年は振るう。自身の力を。

ちっぽけな自分が生きるために。

「腹減った…」

乱闘から数日後。少年は空腹で死にかけていた。

あの後から少年の噂が不良たちの間で伝わったらしく、数日はよく喧嘩をふっかけられたが今はさっぱり。

戦利品は使い果たし、3日間デパートやスーパーの試食と水以外は何も食べていない。

「死ぬ……」

ふらふらと少年は街を歩いていた。それが原因でぶつかってしまった。それは大柄な男だった。

「おい。なにしてんだ」

すぐさま怒号が飛ぶ。

ぶつかってしまったのは一目で『やーさん』と解る男だった。

大柄な体躯を黒スーツで包み、内側に派手なガラシシャツを着てい

る。

「すみません…」

少年はとりあえず頭を下げる。

…ああ…腹減りすぎて目が回る…。

「んな謝り方で済むか」

男が吼える。少年のだらしない謝罪が納得いかなかったようだ。

といつても少年は真面目に謝ったつもりだ。

あまりの空腹にふらふらしてはいたが。

行き交う人々は見ない振りを決め込み、少年と男を避けていく。

「おい、それ位にしるよ」

「いえ、若頭。こういうのはちゃんと言わなくては」

なんだ…？ 新手かな？

頭が回らなくなった少年はぼんやり考えていた。焦点はぶれてい

る。最後はやくざに殴られて終わりか…あつけないもんだなあ…

そして

「ちよつ、おい?!」

少年は倒れた

続

episode / 01 バイトの誘い

「ん……………」

少年は寝返りをうち、柔らかいシーツに顔を埋める。
暖かく、柔らかい。

ずいぶん柔らかいなあ……。ベンチってこんなだったっけ…？

「!?!」

とつさに飛び上がる。ぎしりとスプリングが抗議するが少年の耳には入らない。

どこだよここ！

焦燥感に近い感覚に襲われ少年は周りに目を走らせる。

シンプルな家具で統一された部屋。趣味のいい柔らかい木の家具と薄い黄色のカーテンから差し込む光が心地良い。

個人の部屋というより、万人受けする客室のようだ。

暖房が丁度良い温度でかかり、羽毛布団は質がいいらしくとても肌触りがいい。

「どこだ…」

ぎしっとベッドから降りる。

「服違うし…」

心地良い布団の中から抜け出した少年は自分が着ている服が変わっているのに気付いた。

大きめのスウェットだ。

ギシギシと固まっていた筋肉はこわばっていたが軽く伸ばすと直ぐにほぐれた。怪我也特にしていない。

なにがなんだか…

とにかくここは少年が知っている場所ではないらしい。疑問符は浮かぶが害はなかったらしく、そこには安心した。

少年は訝しく思いながら真鍮のドアノブに手をかける。

鍵は架かっていない。あっさりと口を開けてドアは少年を通した。

「お、起きたか？」

広い廊下に出ると階段を登って若い男が姿を見せた。

長身の整ったスタイルの男だ。細身でもなく、大柄でもない。程よく筋肉が着いているのが判る。その体躯を着崩したスーツで包んでいた。

「体は大丈夫か？」

労りの言葉をかける男の手には食欲のそそる匂いのする盆がある。男の顔も均整がとれている。顔のパーツも見事に確実な場所にある。端正と表現しても過言ではないだろう。

「あの…」

……………ぐう。

腹が鳴った。見事なタイミングだ。

起きた直後で忘れていた空腹は腹の虫が抗議をあげたと同時に一気に襲ってくる。

「くくく、食べるだろ？」

先ほどの部屋で男の持ってきた食事を僅か二分で食べ終えた少年に男は話しかけた。

「落ち着いたか？」

「はい……あの……ありがとうございます」

ぺこつと頭を下げた少年に男は笑う。

「いいよ、飯くらい」

男はにっこり笑顔を作る。

「いい喰いつぶりだ。余程腹減ってたんだな」

ふと、男は真剣な表情になる。その眼は研ぎ澄まされた刃のような光をもっていた。

「それで、なんで腹減って倒れたんだ？」

真剣で鋭いその眼の前に嘘は無意味だろう。少年は直感的に判断していた。

見抜かれる嘘をついた所で意味はない。

一つため息のような深呼吸をして少年はポツポツ呟き始める。

「……家出……です……」

「家出か…歳は？」

「十六です」

「まだ高校生か…」

「はい……」

少年が素直に答えると男は困ったような表情を見せる。分かっただけはいたが、という風にも見えるが。やれやれと言った感じだ。

「どの位だ？」

「……二週間ちよつとです」

「結構長いな」

そう言つて男は頭をかいた。

「ここは…？」

「ここは俺の家。流石に驚いたんだぞ？ お前がいきなりぶつ倒れるからな。八木に運ばせたんだが…」

「八木…？」

「お前がぶつかった奴だよ」

俺がぶつかった…？ てことは…。

空腹で倒れる直線の記憶を手繰る。

ぼんやりする視界。肩に走つた衝撃。怒声。冷たいアスファルト。

「此処つて…やくざさん…」

たどり着いたのは自身がぶつかったのは『ヤクザのような』大柄の男だったということだ。

そうじゃないか、と頭の片隅で考える自分を抑えて恐る恐る少年は聞く。

まさかな…いくらなんでも…。

「そつだよ。霜敵会つていうやくざ」

あつさりと言つた男は心なしか面白そうに笑みを浮かべている。

「……………」

おいおいおい…確かに不良と喧嘩したりしてたけどやくざとは…。

少年の思考回路にヤクザについての『知識』が駆け巡る。

「あの……………」

「ん？ どした？」

「…………俺生きて帰れますか？」

少年は真面目だ。

だがそう訊くと男は腹を抱えて大笑いし始めた。

「あつはつはつは……くくくつ……腹いて……」

ひとしきり笑って男は答えた。

笑われている少年は無言だ。もちろん内心では腹立ちと恐怖がせめぎあっているのだが。

「大丈夫。何もしないよ……。くく」

まだ可笑しいのか、男は眼に涙を浮かべていた。

男には敵意はないらしい。ぶらぶら手を降っておどけてみせる。

少年は無意識のため息が零れるのを止められなかった。

「じゃあ……御世話になりました」

少年は頭を深く下げる。

ベッドで寝かせてもらい食事まで貰ったのだ。これ以上迷惑をかけられない。

少年が立ち上がり部屋を出ようとすると男が声をかけた。

「家に帰るのか？」

「……いいえ」

「行く宛は？」

「……無いです」

「金は？」

「……ありません」

情けない解答だと自嘲が少年の顔に浮かぶ。

少しの沈黙の後、ため息混じりで男が言った。

口調は変わらないがどうやら呆れているようだ。

「野垂れ死ぬのか？」

「……」

確かにその通りだ。住む場所も働く場所もない子供が生きていけるほど、世の中は優しくない。事実一度少年は行き倒れている。

「でも……俺は帰れないんです……」

少年には“ワケ”があった。

たとえ空腹で倒れたり喧嘩をふっかけられたりしても、帰れないワケが…。

「…だったら…いいバイトがあるぞ」

ほんの少しの沈黙の後、くくつと笑いながら男は言った。

バイト？

「…バイト？」

「ああ。しかも住み込みで飯つき。給料もいい。悪くないだろ？」
確かに悪くない。というか好待遇過ぎる。

「…なんですか？」

この先の言葉がなんとなく想像出来るためか、少年は暫し考え恐る恐るきいた。

「ヤクザ」

単語のみを言い放つ。

「…殺しとかはムリで」

「んなことさせるかよ。ってかお前のやくざのイメージ極端だな」

「じゃあ…？」

じゃあ、なんだ？

「お前家事できるか？ 炊事洗濯掃除」

「…人並みには」

少年は強面のヤクザたちがキッチンに立って料理する様を想像してしまふ。実に微妙だ。

「住み込みの下働き、してみないか？」

「俺がですか？」

「ああ。大飯喰らいが多くてな。ちよつと人不足なんだよ」

「…」

はつきり言っただけ怖い。不良相手の乱闘は慣れているがやくざは…

「…しかも一宿一飯の恩。返して貰わないとな？」

にやっと笑った男の顔からは確かにやくざっぽさが少し滲み出ていた。

「……………わかりました」　くるっと振り返った少年の表情は不良たちと乱闘していたときと同じく凜としていた。

「よろしくお願いします」

そう言っって深く礼をした少年を見て、男は満足げに笑っていた

そしてこれから始まる少年のやくざ屋でのアルバイト生活。

はたしてどうなるのか

続

episode / 02 下働きの先輩(前書き)

やっとコメディーが少しかけます。

3Lのワイシャツやガラシャツの皺を伸ばし、丁寧かつ迅速に日の当たるベランダに干していく。

洗濯、というものは極めて単純、しかし奥が深くさらに過酷だ。

一般の感覚なら購入すら躊躇うような派手なガラシャツが過高に入った洗濯かごは当初は持ち上げることすら困難を極める。

秋だというのに多量の汗をかき、少年は袖で額を拭った。因みに少年が着ているのは青のロングティーマウスのシャツにジーンズ。いずれも少々少年には大きかったものの袖はある程度捲ればじゃまにはならない。

数十分の格闘の結果後一枚という所になり少年は安堵のため息を吐く。

「ひずみー洗濯終わったかー」

最後のガラシャツを干していると背後から先輩の声がして少年は振り返った。

ひずみ、というのはこの少年の名だ。自己紹介で名乗った表記では火が澄むと書いて火澄と読む、とひずみは言っていた。

「もう少しです」

少し大きな声で言い返す。振り向いたが誰も居らず、階段の下で言っていたのがわかる。

「終わったら台所に来てくれー、昼飯作るぞー」

「了解」

そうして火澄は空になった大きな洗濯かごを抱え、やけにデカい廊下を渡り洗濯場にかごを置くとやや疲労した腕を労るように伸ばしながら台所へ向かった。

「お、来たな？」

台所に顔を出すと先輩の男が料理を始めていた。

まな板を叩く包丁の音は続けたままに、彼は顔を火澄に向ける（この行為は大変危険です。包丁の扱いは慎重に！）。

彼の名前は佐島喜一。年齢は二十歳、身長は火澄より少し高めの180（火澄は178センチ）の若い男で耳には幾つかピアスを付けている。柔和な顔立ちの青年だ。と今朝の自己紹介で自ら述べていた。

気さくな性格らしく、極道の家という事に戸惑って内心平穏ではなかった火澄に笑顔で話しかけてきた。そのため火澄も一応は平気だ。

彼はどうみてもヤクザには見えない。

「火澄は料理出きるのか？」

ザクザクと茄子を切りながら喜一は訊く。

台所は広く、機能的であった。冷蔵庫、レンジ、シンク、キッチンテーブル、食器洗い機などは清掃が行き届いているのか新品のようにも見える。

「一応できるつもりです」

火澄は答えて料理台に置かれている食材を見る。ちなみにいま着ているシャツとズボンは喜一から借りたものだ。

ここに運ばれたときの服は彼が着替えさせてくれたらしい。火澄は後でそのことを知った。

「じゃあ炒飯作ってもらうか。六人前」

「了解」

炒飯。カタカナではチャーハン。中華料理の中では最も家庭に浸透している米を使った料理。

しかし種類は豊富。味は料理人の腕によりいくらでも変わってしまふ、ある意味究極の難易度を誇るメニューの一つだ。

さっそく火澄は料理を始める。

出されていたチャーシューやらチャーシューやらチャーシューやらを適当な大きさに切り、中華鍋に油をしき火にかける。

数分後、台所に香ばしく食欲をそそる香りがたちこめた。

「おお、うまそうだな」 中華鍋を覗いた喜一が言った。黄金色の炒飯は以外なことにパラパラと炒めあがっていていかにも食欲をそそられる。

「具はチャーシューだけですけどね」

卵、米と一緒にあつた紐で縛られたままの丸ごとチャーシューを思い出し火澄は苦笑する。

なぜヤクザの家の台所にチャーシューが丸ごとあるのか、非常に疑問だった。

歡心と苦笑いの混ざった笑みを浮かべる喜一は炒飯を味見して美味いと言った。

「チャーシューは神楽のやつが買ってきたんだよ。いきなりミソラーメンが食べたいつつつて……。結局作らなかつたみたいだがな。でも、助かるよ、料理が出来て。あいつは料理が壊滅的にへただからな。以前なんか焼きそばを爆発物に作り替えたり……。アレは本気でやばかつたな。異臭騒ぎになって警察まで動いたし」

遠い目をした喜一は苦々しく言う。余程の事態になつたらしい。その目からは哀愁が感じられ、それ以上の追求は躊躇われた。

そして、こういう話をすればお約束通りというヤツがある。日本のことわざで言うところ『噂をすれば影』というものだ。

“影”は音もなく、音速の早さで背後に現れた。僅かに放たれる怒りを伴って。

「ゴメンナサイね。料理が警察沙汰になるレベルに危険で」

現れたのはエプロンドレスにカチューシャを装備したメイド姿の女性。

彼女の名は菱沼神楽。

「むしろ核兵器クラスに格上げだろ。つうかいつ俺の背後に?!」「げっ…じゃないわよ。失礼極まりないわねこの童貞。そんなんだから前の彼女に　　が　　だっっていわれて」

「ストップ!なんかもういきなり俺のキャラを崩すな頼むから」あわてふためいて彼女を止める喜一の顔には奮発して休日に家族で割と高めな回転寿司にいつて子供が高い皿ばかりとるのをはらはしながら見ている小遣いの少ない父親のようだ。

「なにがキャラよ。むしろヘタレを全面に押し出した方が一部のマニアには受けるんじゃない?」

「黙れ人間核兵器。というか人災」

「あらかつこいいわね。地震、雷、火事、メイド。ゴロもいいし」

「いやいやいや。全国の親父の威厳が…」

「なら地震、雷、火事、冥土、とか」

「死?!」

「とりあえず運びましょうよ…」

物凄い展開の代わりぶりについて行けなくなっていた火澄が言った。

「ああ……、そうだな」

この話題から離れられる事を心底喜びながら喜一が応える。そして俊敏な動きで炒飯の皿を盆に乗せ、素早く運んでいった。

「ところで神楽さん。一つ訊いていいっすか?」

「なあに?」

「なんでメイド服なんですか?」

改めて火澄は神楽を見る。

この家にはまるであっていない、例えるなら赤いランドセルを装

備したコブ。口の身長が高い方のように、違和感及び諸々の不安が付きまとう。

「簡単よ。野郎を操りやすくするため（半分は趣味だけど）」

さらりと神楽は言った。それは悪意ではなく、むしろ真剣だ。そしてスイッチが入ったかのように彼女は続ける。

「メイドを含めスッチーに看護婦女医から和服に喪服（洋）に喪服（和）にセーラー服マニアックな奴らは体操着やスクミズ（爆）などなど男つてのはアホみたいなものに弱いからね」

息継ぎ無しの流れるようにセリフをどこか黒い笑顔で言った彼女はがしつと火澄の肩を掴む。

逃がさない。その瞳がそう脅迫しているかのように恐ろしい。

「火澄くんはなにが好き？ 猫耳？ バニー？ ブレザーに雨に濡れた髪に部屋とワイシャツと私？」

言えば言うほどマニアックになる神楽の言葉に火澄は全力で引いていた。ツツコミは出てこない。

（うわなんかヤバイぞこの人！とりあえず何でもいいから助けてくれ！！）

そんな悲痛な心の叫びを聞いたのか、または偶然か、というかいつまでたつてもこない二人を呼びにきた喜一によって火澄は救出された。

チャーシュー炒飯と麻婆茄子の昼食。そこに烏龍茶を注いだグラスを用意して準備は終わる。

ヤクザも以外に昼食は普通だ、と火澄はどこか關心していた。じやあどんな昼食を想像していたんだ、と訊かれると詰まってしまうが。

「旨そうだな」

不意に男の声がしてリビングのドアを開く。

「若頭」

火澄が今朝方にあつた、整った顔立ちの男だ。

「炒飯か。……なんでチャーシューばつかなんだ？」

とりあえず席について彼は食事を始める。炒飯はチャーシューの量はともかく味はよかった。

昼食も終わり、洗い物も掃除も取りあえず完了したため、火澄はリビングのバカでかい所々凹んだソファアに座ってぼーっとしていた。疲労と安心感とその他もろもろで動く気力はあまりない。むしろこのまま眠ってしまいたいくらいだ。

「よお、どうだ家出少年、一日目は？」

リビングに入ってきたのは火澄をこの家でアルバイトするよう誘った男であり霜敵会の若頭だ。

「なんとかやってます。若頭はどうしたんですか？」

「様子見だ。雇った手前な。それと若頭って呼ぶなよ」

「なんでですか？」

「お前はやくざじゃないだろ。それにその呼び方って以外に淋しいもんだぞ」

「……そうなんですか？」

「ああ……ここじゃ、俺より年上もみんな敬語だし、はっきりいうと息詰まるんだ。喜一は無理だっというし、神楽に到っては条件がハードだからな」

「……条件？」

「訊きたいか？若干変態入ってR指定だが」

「……遠慮しときます」

「だよな」

くくと笑ってみせる若頭はどうにもヤクザらしくない。

「かみなしひさし神無陽差だ。ちなみに22歳、大学生。陽差でいいぞ」

陽差はからからと笑う。

「じゃあ……陽差さん。これからお世話になります。宜しく願います」

「おう、ありがとな」

やくざも大変なんだな……。

ヤクザの認識が色々と変わっていく中、火澄は気だるい体を叱りつけ仕事を再開する。

この屋敷は広く、まずは内部構造を頭に叩き込まなければならぬ。
い。

ふつ、と思わずもれる疲労のため息に首をもたげ、少年はソファから立ち上がった。

続

episode / 03 乱闘の方程式(前書き)

少々痛いです。タイトル通り殴り合いですよ。ちょっと。

極道の屋敷。そこは以外にも最先端の家電や機器がある。その屋敷の一角に和室があつた。

日本刀。和の魂を感じさせてやまないそのフォルム。未だにフィクションには欠かせない存在感と機能性。そんなまず一般の家庭には存在しない（修学旅行で調子のもつて買ってきたはいいが結局錆びさせてしまうのがオチな学生がいる家庭は例外）ものが堂々と掛けである。

流石は極道。和室を掃除していた火澄はえらく感動していた。

そんな感動は胸にしまい込み、適当に借りてきた箒で畳を掃くころに、自称冥土の菱沼神楽が顔を出した。

「火澄くん、買い出しお願いできる？」

先ほどと変わらぬエプロンドレスを纏う彼女はなぜか左手にバットを持っている。ただのバットではない。撲殺丸と物騒極まりない荒々しい筆記体を宿し、細い体にひしゃげた釘を無数にあしらった、俗に言う 釘バット と呼ばれるだった。

「…なんすか……それ」

「撲殺丸」

「それはわかりますよ。そんだけ堂々と書いてあつたら……」

「気にしない気にしない」

そう言つて可愛らしく微笑むメイドからは無言の圧力が感じられて火澄は追求しないことにした。 深追いは危険だ。

「大丈夫ですよ。何買えばいいんすか？」

「ん」と、卵に挽き肉にタマネギに人参に……」

そうしたいきさつで火澄は神楽に頼まれ、喜一に借りたジャケツトを着て買い出しに向かった（ちなみに火澄の服はまだ洗濯中）。

玄関を出ると無駄に広い庭と門とガレージがあり、そこで八木が洗車していた。八木というのは火澄がぶつかった見るからにヤクザな感じの男だ。火澄はまだ会話すらしていないが先輩の喜一曰わく、礼儀に厳しいがいい人らしい。

「車洗ってるんですか？」

火澄が話しかけると八木はチラツと火澄を見て『見りゃわかんたろ』という視線をみせてから車に目を戻す。

シャツを捲りスポンジで高そうな外車を擦るその姿はかなり威圧感がある。彼の御面相もそれを手伝っていた。

「…あ、あーっと……、すみません。ぶつかって」

会話が妙に繋がらなくて火澄は肝を冷やす。が、それでも話しかけるあたりは彼の根っここの逞しさを表しているようだ。

それを聞いているのかいないのか、男は無言で洗車を続ける。「あ…言ってくればオレが洗いますよ」

「……………」

また無言の威圧。どうしようかと悩む火澄を無視し彼は黙々と洗車を続ける。かと思いきや、長い間のあと八木はため息をはいて低く呟いた。

「洗車は趣味だ。おまえにやらせたら意味ないだろうが」

「そうなんすか？」

「悪いかよ」

「んなこと言っていないすよ。寧ろいいと思います」

会話が成立した事が嬉しかったのか、火澄は若者らしく笑ってみせる。

「馬鹿野郎がつ！ なにが野垂れ死にだお前年は！？」

「え？……十六です……」

「まだ十六しか生きてねえガキが簡単に死ぬとか言ってるじゃねえ！！」

男の怒りは少年の意表をついた。この泣く子はもつと泣くような御面相のヤクザはこの少年の言葉に怒りを露わにさせていたのだ。

「ふざけるな。んなに死にたいか」

ばきばきと物騒に拳を鳴らして八木は唸る。

「……すみません」

少年は初めてだった。殴られたのは“幾度も”ある。だが、本気でしかられたのは十六年生きてきて初めてだった。だから、驚いた。……親は心配してんだろ？ 連絡ぐらい入れてやれ」

男は『帰れ』とは言わなかった。少年はそれにホツとし、同時に少し悲しくなった。

「……心配してくれる親だったら……家出なんかしないですよ……」

顔を上げた少年をみて八木は驚いた。その顔には諦めや哀愁といった、とても十六歳の少年のものではなかったからだ。

むしろそんな程度ではない。ずっと暗くもつと深い感情が見え隠れしていて、それがなんなのかは八木には判別できないがこの男が言葉を失うには充分で、男は沈黙した。

この少年の過去を八木はしらない。知るはずがない。

まだ逢ってほんの1日。言葉を交わしたのは今が初めてだ。

しかし、故に思ってしまった。少年の過去を、“想像”してしまっ

った。
「……あ、買い出しに行くんですけど。じゃ、キャビン買ってきますね」

そう言った少年の表情は先程とは打って変わり、人懐っこい十六歳の少年の表情だ。

少年の後ろ姿を見送った八木は、自分が一瞬想像してしまった事

を口には出さなかった。

想像し、考える事に罪はない。だが、それを言葉にすることは責任が伴う。

男は少年を何も知らない。だから何も言わないのだ。勝手に『詮索し、自分の意見を押し付ける』のは人として恥じる行為だと、このヤクザは考えている。

「あいつ…何者なんだ……」

少年の去った門を眺め、男はぼつりと独り言を零す。
空は見事な秋晴れだった。

「ふう」

買った物袋を両手に火澄はスーパーを出る。今日のメニューはハンバーグのようだ。

ヤクザもハンバーグ食べるんだ、と一瞬考えてしまったが火澄はすぐさまそれを打ち消した。

ヤクザとて人なのだから、なにを食べてもいい。

しかし、強面の男たちがハンバーグを囲んでいるのを想像すると少し笑いがこみ上げてきて、火澄は声を殺して笑う。

「何にやけてんだよ」

人気の少ない道に入った所で火澄は不機嫌な声をきいた。

「あんたは……」

眼前に立っていたのはつい昨日までの宿無し生活中にやり合ったチンピラ。背後にはざっと数えて七人。各自武器になりえる物を携えている。

「やっと見つけたぜえ？」

「にやつきながら男が言う。」

「前回もやられたのに懲りないやつらだな」

男達を見据えながら火澄は不適に笑う。そこにはどちらかというとうんざりとした感情が浮かんでいる。

「余裕じゃねえか。だがよお、こんどはどうかなあ？」

男がそう言うのと火澄の背後に隠れていたらしい5人ほどの男達が現れ、道を塞いだ。

「……………」

「さて、これなら逃げられないよなあ？ 袋だ」 金属バットを振るい、男が合図するとそれぞれ武器を持った男たちがじりじり間合いを詰めてくる。

「……………やるしかない……か……」

諦めたように呟き、火澄は買い物袋を道の隅に置き、汚さないように喜一から借りたジャケットをぬぐ。

相手は十人弱。…ヤバいかもな…。

まあいいや、と火澄は自分を嘲笑った。

少年は死を望んではいけないが死を畏れてもいない。生きるも死ぬも、少年には興味が無い事だ。

「来いよ、チンピラ」

それが 開戦 の合図だった。

風を切る早さで振り下ろされたバットを避けてチンピラの顔面に拳を見舞う。

人間の弱点は基本的には顔面だ。顔を殴られたれば容易く気絶す

るし、気絶しなくても確実に動きや判断力は殺される。

故に火澄は最小限の動作で弱点を突く。もつとも効率が良く、こちらの被害も少ない。

「邪魔だ」

渾身の力で振り下ろされたバールを後方に跳んで何とか回避し、背後の男に振り向きもせず裏拳を穿つ。

火澄の闘いはシンプルなものだ。相手の攻撃後の隙、または行動する前に急所に攻撃し、一撃で意識を奪う。

火澄は『経験上』どれだけで殴れば意識が飛ぶか知っているし、例え意識を奪えなくても行動を牽制することはきる。

だが、今回は違った。敵の数が多いため隙が出来ても攻めづらく、背後にも警戒しなければならなかったため自分から攻め込むこともできない。

しかも相手は武器持ちだ。一撃でも貰えば致命傷に成りかねない。足元に転がるバットやら角材やらを拾い上げようものなら、後頭部に一撃喰らっておしまいだ。

「ッ……」

背後から振るわれた木刀を痛みを承知で左手で掴む。

ぎちりと一瞬、木刀を掴んだままもつれ合う。その隙が失敗だった。

威勢のいい雄叫びに気づいた時、避け損ねた横風のバットが左肩に命中し、激痛が走っていた。

「ぐ、うああぐ」

「そろそろ疲れてきたんじゃないの？」

リーダー格のあの男がゲラゲラ笑う。あの顔面を蹴り飛ばしてやりたい衝動に駆られるがどうやら無理そうだ。殴られた左肩が痛みで動かず疲労と痛みで体が重い。

「この……!!」

鉄パイプで殴ろうとかかかってきた男の襟首をつかみ、鼻面に頭突

きを食らわせ昏倒させる。

「はあ、熱い息をはく。息が切れ、腕が疼いた。疲労と痛みは確実に火澄を蝕んでいく。抗えない。」

「そろそろいいだろ」

リーダー格の指示で男達は火澄から距離を取った。

「……………」

「なにが何だか解らないって面してんなあ？教えてやるよ」

にやりと下品な笑いを洩らしながら男はバットを握り、それを火澄に向かって思い切り投げつけた。

音をたて回転するバットに、火澄はとっさに右手を盾にした。

ゴ ガン……

「……………」

悲鳴に鳴らない悲鳴。右腕に走った激痛に火澄は顔を歪ませる。

「これを全員にやられたら……どうなるかな？」

圧倒的優位に立った男は顔を歪ませ笑う。自分の勝利を信じて疑わぬ者の言葉。

「……………」

ああ、終わりだな、こりゃあ。

諦めが胸に迫る。だが決して少年は悲観しない。

「死ねよ」

男の言葉に少年はヤレヤレと言ったように肩をすくめ目を瞑る。

何度言われた言葉だろう。ぼんやり、火澄は考えていた。

走馬灯つてないのかな……。まあ、あつたとしてもろくな思

い出ないけどな……

終わりを受け入れた少年は空を見た。

青い空だ。火澄の気持ちとは対極な。どこまで青く澄んだ空。

空は、嘲笑う。

悪いなあ紗憐、伊織。せめてメールくらいしとけばよかったな。

風が切れる音がした。

続

episode / 04 暇と偶然の援軍

「暇だ……」

霜敵会若頭である男、神無陽差は非常に退屈していた。本日は大
学も無く、レポートも仕上げ、組の仕事もそつなく終わらせていた。
この男は仕事が速い。何故ならば暇だったからだ。そしていまは
完璧なる暇人。

「暇だあ」

自室のなかなか高そうな黒い革張りのソファーに寛ぎ愛煙をふか
すがとにかく暇だ。

ならば女とでも遊びにいこうか。ヤクザならば別段おかしくない
考えも沸いた。

しかし生憎陽差には彼女がない。以前の彼女と別れてから数ヶ
月が経とうとしている。

「そつだ、あいつで遊ぶか」

陽差のいう“あいつ”というのは今日からバイトに入った少年の
ことだ。

ちようど通りかかった若衆に火澄の場所を訊く。答えたのは赤い
髪が目つきの悪い若衆で、霜敵会目つき悪い番付トップスリーに入
る剛の者だ。

「ああ、あのガキなら買い出しいきましたよ」

「……そつか」

というわけで結局彼は暇だった。

映画でも借りるか

結論として某有名レンタルショップに行き、DVDを借りることにした陽差はジャケットを羽織り外に出る。

えらく広い庭とガレージには洗車を終えたのか、車に背をもたれてプカプカと煙草を吸っている八木銀一郎の姿があった。

陽差の姿に気付いた八木は、吸いかけの煙草をシンプルな携帯灰皿に押し込み姿勢を正した。

陽差はそれがあまり好きではない。対等に扱ってくれてかまわない。まだ陽差は若い。次期十代目とはいえ彼は22歳だ。

「八木、ちよつと車貸してくれ」

「どこかいくんですか？」

「ああ、ちよつとDVD借りにな」

「なら自分が運転します。いつもの店でいいんですよ？」

「え？ ああ。別に車貸してくれればいいんだが……」

「いえ、最近何かと物騒ですし」

「……（物騒のかたまりじゃねえのか？ やくざつて）」

陽差はそう苦笑しながらも八木の車に乗り込んだ。

レンタルショップにて、興味のあった映画のDVDを何本か借り、ついでコンビニに寄ってビールやつまみを選んでいるとコンビニの窓から妙な奴らが見えた。

「ん？」

なんだあいつら……あんな大人数で武器もって、どっかで喧嘩でもすんのか……？

見るからに危なそうな少年たちのグループだ。物騒な得物を手に凶悪な笑みを浮かべる若者たちは悪戯に付近の住民を怯えさせている。

あいつらのがヤクザ向いてそうだよなあ…

そう思いつつも地元の不良の喧嘩などどうでもいいし、車で待たせている八木にも悪いのでさっさと選んでコンビニを出た。

「悪い、待たせた」

「いえ…若頭、見ましたか？あいつら…」

「ああ…まあ気にする必要ねえだろ」

「……」

陽差がそう言つと八木は怖い御面相をさらに険しくさせなにやら考え事を思索を始めた。

「……どうした？」

「若頭、聞きませんでしたか？ここ最近そこらの不良どもがたかろうとして逆にぶん殴られて金盗られたつつう話」

「ああ、聞いたな、その話。誰がやったかは知らないが、不良どもは暫く大人しくなつたんだろ？」

「はい」

「てことは…今からそいつに借りを返しにいくつてとこだな」

「そんなところでしょうね…」 妙にキレの悪い八木に陽差は眉をひそめた。

この八木というヤクザは物事をはつきりと言う性格を持っている。

それは陽差も充分判っていた。だから妙に思ったのだ。

「……なんだ？ どうかしたのかよ？」

「いえ……」

再び歯切れ悪いところで八木は言葉を切り、車を発進させた。

車を走らせていると八木の目の端にある光景が映った。
「あれは……」

人通りの少ない路地、屋敷に戻る時に近道として多様するこの路に不良のグループがいた。

「あいつら……さっきの……」

八木の視線の先に気づいた陽差がつぶやく。

「こんな所で喧嘩か？」

「……若頭。なんつうか……」

車を止め、険のある顔で八木は言った。

「……気になるのか？」

「まあ……なんというか……カンです」

「……往くぞ八木。取り敢えず見るだけだ」 それだけいうと陽差は素早く車から降り、喧騒の中心に向かって歩いていく。

死んだな……こりゃあ……

心の中でそう思い、火澄は眼を閉じていた。

少年はまだ16年しか生きていない。だが、少年には十分な時だった。少年はこれで死んでもあまら悔いはないと思っている。それは少年が今までの人生に諦めを見いだしていたからだ。

つまらない人生だったな……

少年は思った。ただソレだけを。

「なんだてめえ、あゝ ああ?! あああああああああ!……!」

不意に響いた悲鳴に火澄は眼を開ける。何時までも痛みは襲ってこない。

「……陽差さん…八木さん…」
目の前には二人の男がいた。

1人は長身の青年。もう1人は大柄な体躯の険のある顔つきの男だ。

「よう火澄、無事か？」

ギリギリと二人の男の首を掴みながら陽差が言った。男たちは抜け出そうともがいていたがどう足掻いても陽差の腕は外れず、酸欠でやがて大人しくなった。

「一応…生きてます…」

「そうか…よつと！」

意識を失った男たちをぞんざいにコンクリートに転がし陽差は火澄に駆け寄った。

「なんでいるんスか…？」

駆け寄って来た陽差と武器持ちの不良たちを軽々殴り飛ばしている八木に眼をやりながら火澄が聞いた。

陽差の表情は心なしか楽しげに見える。

「偶然の産物だな。まあ、取り敢えず手当てが必要だな。怪我は？」

「…左腕だけです。後は軽いですから平気です」

「そうか。八木、車回せ、帰るぞ」

陽差は背後にいる八木に振り向かずと言った。

八木は既に不良達を全員倒し終えていたらしく、鼻血を流す気絶した彼らをぞんざいに跨いで車へと向かっていく。

「火澄。この袋と服はお前のか？」

ふと、路の端に置いてある買い物袋とジャケットを拾い上げて八木が振り向く。袋とジャケットはあの騒ぎで何度も踏まれたらしくボロボロに汚れていた。

「はい。あー…卵ぐちゃぐちゃだ…ジャケットも汚しちまったし…」
渡された袋とジャケットを受け取った火澄がうんざりした様子で

ぼやいていた。

空は、黄昏へと変わっていった。

続

episode / 05 傷の痛みと心の痛み&戦争(前書き)

前半シリアス後半コメディです。

「どうしたんだ!? んなボロボロで」

霜敵会の屋敷に陽差と八木の手によって戻った火澄を見て喜一が驚いた声を上げる。

理由は明白。痣をこしらえた顔に汚れた服、くしゃくしゃな買い物袋。

「あははは… ちょっと喧嘩して… 買い物袋とか踏まれちまって卵は割れちまったけど肉や野菜はつかえると思います。…あと、ジャケツト汚して…ごめんなさい…」

火澄は深く頭を下げる。それを慌てて止めた喜一。彼の表情は心配していた。

「んな事いいんだ。とにかく手当てしないと」

慌てて救急箱を探し、棚をあさる喜一に苦笑をもらしながら、火澄は八木にやや強引にソファに座らされた。

「すいません、八木さん…」

火澄が礼を言う。苦笑混じりの礼であった。

だが、八木にはこの苦笑は嘲笑のように見えて仕方がなかった。自分自身に向けた、愚かな自身への嘲笑に。

八木はにこりともせず堅い表情を見せたが、そのまま踵を返し、なにも言わずに部屋から出ていった。

…怒ってるのかな？

八木の消えたドアを暫し眺めていた火澄は肩からくる鈍い痛みに顔をしかめる。

「怪我したんだって? あたしが手当てるわよ」

テンションの高い声でした。かと思うと片手に救急箱を持ったメイドが眼を嬉々として輝かせ、向かってきた。

菱沼神楽その人だ。彼女はメイド服という、極道にはそぐわない

出で立ちである。

「ほらほら服脱いで〜（ふふふふ…少年のからだ）」

「いや…あの…」

もの凄く楽しそうな神楽は笑顔全開だったが、その神楽から救急箱を取り上げて喜一が言った。

「俺がやるよ、ついでに着替えさせるし。火澄、俺の部屋にいくぞ」

「えー」

「えーじゃない」

不満げな神楽に有無をいわせぬ口調で強く言い、喜一は火澄を促した。喜一が神楽に何か強くいうことは稀であった。その場にいた若衆の何人かは目を丸くする。

「へ？ ああ、はい」

怪我をしていない右腕を引かれ、火澄は半ば無理やり部屋を連れ出される。

そのほんの一瞬、陽差と喜一が視線を合わせた事に火澄は気付いた。

喜一の部屋は火澄が一度寝かせてもらった部屋より一回り小さめの部屋で、家具は殆ど木。床は畳だった。

適当に座れといわれ、火澄は畳に胡座をかいた。

「あの…喜一さん？」

態度が暗い喜一に火澄は恐る恐る声をかけると、喜一はため息をついた。

「体…見られたくないんだろ？」

ぼつりと言った喜一の言葉。だがそれは火澄にとっては大きな事。うなだれて、火澄も眩くように返す。

「知ってたんスカ……」

「ああ……昨日、八木さんに連れてこられたお前を着替えさせた時にな。知ってるのは俺と若頭だけだ」

「……………」

その言葉を受けながら、火澄は無言で立ち上がりシャツを脱ぐ。

「ッ」

晒された火澄の体を見て喜一は思わず目を背ける。なぜならその体は酷く傷だらけだったからだ。

先ほどの喧嘩の傷もあるだろうが、あきらかにソレ以上前の傷が幾つもあった。

煙草を押し付けたような赤き爛れなかば黒ずみはじめた斑の傷。

鈍い打撲の青く内出血した跡。切れ味の悪い刃物で斬られた時のような、歪で切り口の定まらない切り傷の瘡蓋。細い、幾重にも連なる蚯蚓腫れ。

「その傷……………」

「……………」

暫し流れる重苦しい沈黙。

火澄は黙したままだ。視線は畳の床を泳いでいる。

喜一も、黙り込む。黙るしかないのだ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

最初に口を開いたのは喜一だった。

「言いたくないならいいよ。さ、傷の手当てするぜ」

「……………」

「あー、うん。気にするよな普通。でも、俺も若頭も絶対口外しな

い」

重い空気を撃つように、やや上擦りながらも明るく喜一は言う。当然、彼は無理していた。あれほどの跡を見てしまえば、何があつたか想像してしまう。それは責められない、想像できる力をもつ人間なら当たり前に行為。

「……………ありがとうございます」

しどろもどろの喜一に、ややあつて火澄は頷いていた。

これは、感謝だ。

「あ、手当てすんだの？」

火澄の手当てを終えた喜一がキッチンに顔を出すと神楽が袋から使えそうなものを分けていた。

「卵は全滅ね。肉と野菜は使えそう」

「そうか」

「……………火澄くんは？」

「寝かせた。肩の傷が結構悪くてさ、まあ、暫くすれば治るくらいなモノだが…」

「そう。バイト初日から大変だよね」

心配そいにそれだけ言う神楽。先ほどはふざけていたが、彼女も心配していた。

霜敵会は極道であるため、ごく稀にはあるが争いが起き怪我人がでることもある。だが、それは場慣れした逞しい男たちだからあまり心配はいらない。しかし今怪我をしたのは一般的な少年だ。背は高いが、体格は普通。ヤクザとは比べものにできない。

神楽はため息とともに包丁を握りしめ、玉ねぎを前にしていた。

「ちよつと待て…何してんだ？」

「何って料理」

「まてまてまてまて！！ ヤバいやババ、核戦争が勃発する！！」

「失礼ね…（青酸カリしこんでやる）」

手当を終えた火澄は喜一の服に着替え、椅子に座ってボーっとしていた。

バイト初日から怪我するし、買い物も出来ず借りた服も汚しちゃまったし… ホント… 役立たねえなあ…

はあ、とため息をつき、火澄は自身の左肩を見る。

バットで思い切り殴打された箇所は青あざになって黒ずみ痛みも激しい。

だが喜一によるとそう遠くない内に治るそうだ。彼は怪我の手当にとても詳しい。何でも、霜敵会で誰かが怪我をしたときの治療はできる範囲なら喜一がやっているらしい。

暫くは動かさじづらいが仕方がない。

「マヌケだな…」

一人自嘲をこぼし、火澄は壁に架かっていたカレンダーに目を移す。

家出してから三週間ちかく（または二週間ちよつと）経つ。

きつと両親は心配しているだろう。『世間体を気にして』

「…よし！」

嫌な思い出を払拭するように威勢良く立ち上がる。痛みで顔をし

かめてから火澄は喜一たちが居るであろう台所へ向かった。

「……………一応訊きますけど…何してるんスか？」

台所は戦場と化していた。

黒こげのフライパンが渦高く詰まれたシンク（詰まるところ失敗作）。

床に突き刺さっている剣…もとい包丁。

何に使用したか判別できない、茶色い流動性の物質が溢れかえるボールや黒く変色し、かつての輝きを失った泡立て器が散乱した荒涼とした戦場に佇む独りの男。

明日への切望と現在への絶望を感じさせる表情で彼は虚空を見つめ、呟く。

「終わりだ…なにもかも……………」

その遙か彼方には戦場で舞う戦乙女という名のメイド。あるいは（冥土）が料理という名の魔物と激しく戦っていた。獲物たる菜箸を片手に、得体の知れない暗黒物質ダークマターをフライパンという名の鉄塊で炒めていく。

あはははと喜一の渴いた笑いが不気味に響く。そんな彼の様子を知ってか知らずか、死神は鼻歌混じりで楽しそうに兵器を作り続けていた。

「……………ああ、喧嘩で死ななかつたけど、こりゃあ死んだな。死因は食中毒だね（笑）。あははは」

全てを悟り、諦めたように火澄は死神の演舞、いや演武を見る。棚に並べられた調味料の数々。

砂糖

塩

酢

青酸カリ

味噌

……ちよつと待て！？　なんか料理の『さしすせそ』になんか絶対人が摂取出来ないものが…

そんな火澄の心のツツコミを嘲笑うかの如く、サツと『せ』の調味料を暗黒物質に迷うことなく容器ごと投入した。

ぼすん、と特殊な容器は暗黒物質に触れた瞬間、消えるように溶け出し、かき混ぜられた。

かき混ぜている木へら（菜箸はついさっき折れた）と鍋は何ともないのに、なぜ青酸カリの容器が溶けたのか疑問に思うが、それについて深く考えている余裕はない。

死ぬときって苦しいのかな…それとも…あ、やっぱり苦しいんだろうな…

そんなことを考えてると背後から肩を叩かれ火澄は振り返った。

「陽差さん」

そこに居たのは陽差だった。鼻をつまみ、端正な顔を渋くしている。

「……もの凄い悪臭がしてな…やっぱり神楽か…」

“ああ、ヤツパリか”的な視線をメイドの背に送り、火澄の頭に軽く手をおいて呟く。

「仕方がない。奥の手だな」

「奥の手？」

こんな危機的状況を打開する方法なんか地球上のどんなに優秀なスパコンでも弾き出せないだろう。

しかし、陽差はたった一言で事態を収集した。

「神楽、喜一。今日は飯こごじやなくて“誇月”で食うぞ」

「へ、マジですか若頭！（助かった）」

「私鯖味噌食べたい」

陽差の言葉に二人は食いついた。

誇月？

訊いたことのない単語に火澄は首を傾げる。その様子を見て、陽差は笑って答えた。

「俺がよくいく飯屋だ。お前の歓迎会も兼ねてな」

にんまり笑った陽差は火澄の頭をグシャグシャとかき回し、上機嫌で台所を後にする。二人もあとを追う。

残された火澄は、台所をどうするかで頭を抱える羽目になる。

続

episode / 06 酒と男(前書き)

全体的に若干シリアスかも？

酒は呑んでも呑まれるな

そんな言葉が脳裏に掠め、火澄は苦笑をもらしていた。

小料理屋『誇月』。

和風の様相に作務衣姿の店員たちが慌ただしく行き来している。

テーブル席と座敷席のどちらにも背広姿のサラリーマンたちや大学生と思しき若いグループなど、様々な客層が楽しげに料理や酒を賞味していた。

霜蔵会御一行もまた、騒いでいた。

座敷席を二つ繋いだ特席で、雑談や喧騒、稀に聞くに堪えない猥談まで。酔いの席からは当たり障りのない嘸が零れて消える。

べつとりと甘ったるい炭酸飲料の気泡が口内ではじけ喉を灼く。

恐い御面相の男たちに混ざり炭酸をちびりちびりと啜る火澄の姿は奇異なものなのだろう。店内の客たちの視線が集まっては散っていく。隣りで生ビールのジョッキを傾ける八木の一般人を威圧する雰囲気そうさせているようだ。

ため息を炭酸で押し流し、火澄はチラリと向かいを窺う。

その視線の先には佐島喜一がいた。正確には喜一だったもの、だが。彼はビールジョッキを握ったまま気絶していた。なにがあったのかはわからないが、仰向けで畳に倒れるその姿は心なしか幸せそうだった。

「もうつぶれたのか」

隣りの八木が喜一の醜態(?)に気づき低く呟く。彼は先ほどのジョッキを飲み干し、日本酒のグラスに持ち換えていた。

「八木さんは強いんですね」

「ん？ まあな」

応えながら八木は酒を煽る。

「のむか、おまえも」

「いえ…俺は……」

酒、死ぬほど嫌いなんですよ……

ちらりと浮かんだ本心を苦笑で隠し、『未成年ですから』と断つた。

火澄はアルコールの類が嫌いだった。どれほど軽くとも、アルコールと判るほどのにおいがあれば身体が受け付けない。

再び、ちびりとコーラをすすりながら極道たちを眺めた。

「あつはつはつはーっつ。たあつく弱いなおまえらああー」
左手側の席からえらく盛大な笑いが飛んできた。

金メツシユの髪に派手なガラシヤツの男だ。八木と比べるとまだ若い。二十代後半程度だろうか。

「若頭あ、しよーぶしましよしょうぶ！」

赤い顔で男は若頭こと神無陽差のジョッキになみなみと黒生を注ぐ。困惑というよりは迷惑といった感じの陽差が諫める。

「麻橋、おまえ飲み過ぎだ。だいたい、そんな酒強くないだろ？」

「なああにいつてんすかあ、オレあまだまだいけますよ〜」

麻橋という男はしたたかに酔っていた。その男がふと振り返ると、その様子を見ていた火澄と偶然に目が合う。

にやり、男は笑った。

笑ったまま、ジョッキを掴んで覚束ない足取りで向かってきた。

「くおらぼーず、おまえの歓迎会だったのになにコーラなんて甘ったるいもんのでやがんだあ？」

「麻橋さん……酔いすぎ」

「酔ってねえ！ まだまだいけんぞをお……」

ヒック、としゃくりあげて麻橋はジョッキを火澄のテーブルに叩きおく。反動でいくらか零れたが麻橋はまったく気にしていない。

「のめー！」

麻橋の目は据わっていた。ヤクザだけあってこの男もなかなか
“おそろしい”顔をしている。

火澄は内心でため息をもらした。

「……俺未成年です」

「ほーりつとけーさつがこわくてヤクザやってられっか」

「いや俺ヤクザじゃないし」

「ぶつくさいうな、のめってんだろうがああ」

「ダメですって……ちよつまった!!」

麻橋の動きは俊敏だった。

火澄の首に腕を回し、ジョッキを掴んで強引に火澄の口へ押し付けた。

「ぶつつ、あ……」

苦い、ビールの味が唇に触れる。啞内を蹂躞するソレはある記憶を呼び起こす。

あなたはただの暇つぶしよ

「……!!」

反射的に火澄は麻橋を押しつけていた。かなりの力を込めた一撃だ。腕の痛みも忘れるほどに。

強い圧迫感が胸に込み上げる。

心臓の鼓動がやけに早く高鳴った。

「うおを？」

突然の反撃に麻橋は体勢を崩した。ばしゃり、と黒生が空を舞い、

畳と麻橋に降り注いだ。

「うあ、つめて……」

「す、すいません……」

無意識だったとはいえ、盛大にぶちまけたビールでずぶ濡れになった麻橋に悪いことをしてしまった。そんな殊勝な思いの火澄とは裏腹に麻橋は豪胆に笑っていた。

「くくくはははは！！」

「あ、麻橋さん?!」

どこか打ったのかと本気で心配した火澄に麻橋は“その道の人間らしい”笑みを浮かべていた。

「いい度胸だ……」

「いやちよ、あだだだだだだだだだだだだだだだだだだだ」

プロレス技のような締め技がかかる。見た目で通りに麻橋は力が強く、さらに火澄とはかなりの体格差があつた。

腕を極められ（意識してなのかしてないのか、麻橋は火澄の怪我をしていないほうに技をかけていた）て、みっともなく火澄は床を足で叩く。ギブアップだ。

「なんだ終わりかあ？」

物足りなそうに麻橋は力を抜いた。技がとかれ、火澄はなんとか起き上がる。

「……ん？」

ふと、火澄は体の調子に気づく。痛みがない。締められた腕はまったく痺れていなかった。しかも、心なしか全身の筋肉が解れているような感覚がした。

「麻橋さん……?」

戸惑いを隠せずに火澄は振り返る。

ぐおおおお……

「つて」

寝ていた。体を大にして、大きないびきをかきながら、気持ちよさそうに眠りこんでいた。

「ああ、麻橋は絡み酒なんだ。しかも酒は好きだが弱くてな、すぐに潰れちまう」

いびきを聞きつけたらしい陽差が様子を見に来た。

「……火澄、酒嫌いなのか？」

どうやら先ほどのやり取りを見ていたらしい。やや怪訝そうに眉間をしかめ火澄の顔を覗き込む。

「嫌いというか……イヤな事を思い出してしまつんで」

「イヤな事？」

「……」

疑問の問いに火澄は答えない。しばしの沈黙、実際には酒の席での喧噪があるのだが、不思議と二人は静かに感じていた。

「……陽差さんは……“暇つぶしの玩具”になったこと……ありますか？」

ぼつり、火澄は呟いた。かすかなものだった。どこか憂える響きは喧噪にゆつくりとかき消された。しかし、陽差はしかと聞き取っていた。

「……玩具？」

「……いま思えば、俺は玩具以下だったかもしれませんけどね……」

紛れもなく自嘲の色をした苦笑を火澄は見せた。“16歳”のものとは思えない、諦めにも似た思いを感じ取れる。

「……俺は……ヒトじゃなかったんですよ」

続

『……………俺は……………ヒトじゃなかったんですよ』

どういう意味だ……………？

レポート用紙を走るシャープペンシルの手を休めて神無陽差は考える。

あの数日前の歓迎会の時に呟いた火澄の言葉。その後、火澄は何事もなく酒宴にとけ込んでいった。どういう意味を持った言葉なのか、陽差にはまだ解らない。目下思案中だ。

「うわ、なにこれ」

ふと、影が落ちて声が降ってきた。

見上げるとそこには“誇月”の制服である作務衣姿にカラフルなバンドナを頭に巻いた男が陽差のレポートを覗きこんでいた。

「論文」

陽差は簡潔に返す。

「ヤクザも論文かく時代なんだな、俺絶対無理」

「だろうな」

「ひでー」

からからと男は笑う。つられて陽差も笑っていた。

平日の昼下がり。ランチタイムを過ぎた誇月は空いていた。

バンドナ頭の名前は霧島鋼斗。陽差とは十年来の付き合いだ。

「お前サボっていいのか？ 陸弥が怒るぞ」

「へーきへーき、客もないし」

「そっぴやお前、ちゃんと幼稚園で働いてんだろ？」

「んー？ …まあなあ、今秋休みなんだよ」

一瞬、鋼斗と表情は曇つたのを陽差は見た。隠し事をしている時、彼は間延びした声で話を濁す癖がある。それは長い付き合いなので簡単に分かった。『秋休みってなんだよ？』という疑問を飲み込むように、陽差は窓に視線を逃がす。

ヒトには聞かれたくないことの一つや二つある。極道に生まれた時から身を置く陽差はその事を理解している。

「……ん？」

逃がした視線の先、窓から駐車場が見える。そこに大型二輪が乗り込んできた。

運転手はヘルメットをしていなかった。赤く逆立つた髪が目立つ青年だ。

「あれ、静流じゃん」

陽差の視線を追った鋼斗が身を乗り出す。

「しーずるー、ひさしぶりー」

窓が開き、鋼斗が手を振る。静流と呼ばれた青年は鋼斗に気づき、露骨に表情をしかめていた。

「……霧島さん、名前で呼ばないでください……」

「いいじゃん」

「……………」

「鋼斗、あんま弄んな。マジ切れしたら怖いぞ」

「へーい」

「で、どうしたんだ？」

「通りかかっただけすけど……若頭、あのガキ何者ですか？」

赤髪の青年はバイクに跨ったまま、険しく顔をしかめた。

「ガキって……火澄か？」

「あいつ…麻橋さんらとポーカーしてましたぜ」

「ポーカー？ 別にいいんじゃないのか？」

「……………」

「？」

「実際見ればわかります、アイツは狐だ」

静流の言葉が気になり、いそぎ屋敷に帰った陽差を待ち受けていたのは異質な光景だった。

「あ、陽差さんお帰りなさい」

「ああ……………これは…」

「身ぐるみ剥がしただけです」
「にやりと火澄は笑っていた」

散らばるトランプの床に力無く座り込む裸のヤクザたち。それをほほえみながら見ている火澄。

「ブツブツブツブツブツブツブツブツブツ」

「ロイヤルストレートフラッシュ
ロイヤルストレートフラッシュ
ロイヤルストレートフラッシュ」

「タスケテクレエえええ」

ヤクザたちの絶望が木霊する。

「オレをカモにしようとしたんでしょうけど、生憎この手のゲームは強いんですよ。陽差さんもどうですか？」

「わずかに挑戦的な火澄の誘い。負けるつもりはないらしい。」

「俺（若頭）に挑戦のつもりか？」

「くく、喉を鳴らす笑い。霜敵会若頭たる男のプライドが触発される。」

「いいぜ……やってやる」

男は、容赦なく少年を叩き潰すつもりだった。

「2ペアだ」

「同じく。ただし役は俺のが強いですね」

「…ストレートだ」

「フルハウスです」

「……4カード」

「5カードです」

「これなら………ストレートフラッシュ」

「ロイヤルストレートフラッシュです」

「……………ブタだ」

「3カードです」

一騎打ちは一方的だった。あまりにも一方的過ぎて、見守る組員たちも思わず目を逸らしていた。

「陽差さん、まだやりますか？」

27回目の勝負を終えて火澄はトランプを置いた。 ストレートフラッシュだった。

対する陽差は呻き声をあげてトランプを投げ出した。 フラッシュだった。

「勘弁してくれ…」

27回勝負して、陽差は一度も勝てなかった。回ってくるカードはどれもなかなかイイものだったが、火澄はそれを上回るものを連続で揃えてくる。

ドゥルルルンッ

唐突に、エンジン音が響き渡った。キョロキョロと音の出どころを捜すと脇で勝負を見物していた麻橋がスラックスのポケットからケータイを引き取りだした。

「俺のケータイだ」

「着信がエンジン音っすか」

「因みにバイクだ」

「……そういや火澄、おまえケータイは？」

麻橋の携帯電話を見て陽差は言った。

「持ってますけど……」

「持って来いよ、アドレス交換しようぜ」

「いやでもそのあの」

「なんかあるのか？」

「いや……あるようなないようなやっぱりあるような……」

「なんだハッキリしないな。とにかく持って来いよ」

「………はい」

『メール着信：78件』

『電話着信：58件』

数週間ぶりに電源を入れられた携帯電話の液晶は無情な数字を表

示していた。

「うわすげえ数。親からか？」

「違いますよ……これは」

未読メールで埋め尽くされたボックスを開く。

月岡紗憐

月岡紗憐

月岡紗憐

九条伊織

月岡紗憐

月岡紗憐

月岡紗憐

月岡紗憐

月岡紗憐

九条伊織

月岡紗憐

月岡紗憐

月岡紗憐

月岡紗憐

月岡紗憐

月岡紗憐

月岡紗憐

月岡結華

月岡紗憐

月岡紗憐

「うわ、なんか呪いみてえ」

「火澄、おまあこの紗憐つてのに何した」

「彼女か?!」

脇から覗き見るヤクザたちが口々に感想を述べる。対する火澄

の顔色は曇り。

「オレの友人っすよ……………」

「んだよ、ダチにくらい連絡してやれ。心配してんだろ？ おまえのことをよ」

麻橋の言葉を少年は苦笑で濁す。

「わかってるんすけど……………なかなか難しくくて」

「……………」

「さて、と。一息つきますか？ オレコンビニ行ってきますけど、なにかいるものありませんか？」

思わず守つてあげたくなる、チャームポイントは細い足首の、座右の銘は『メイドとは萌えではなく燃えである』である、最強の女がここに至るまで、長く険しい道のりがあった。

彼女、菱沼神楽は従者を伴いタイムセールと呼ばれる主婦たちの戦場へと赴いていた。無論、メイド服で。

凜としたその瞳が見いだすのはバックヤードへ続く業務員用の扉だ。いまかいまかと待ちわびる、殺気を漂わせる女戦士たちも扉を見つめていた。

「いい、喜ー？ 戦いが始まったら私をサポートするのよ！ー」

「はいはい」

「ハイは一回！ 戦場では些細な油断が命取りなのよ、気を引き締めなさい！ー」

「……了解（なんでこいつタイムセールでこんなにテンションあがってんだ？）」

呆れ顔の従者はブラウンの頭を搔いた。

『タイムセール始めまー！ーす！ー！』

突如、スーパー内に拡声器で増幅された声が響き渡る。瞬間、私たちの目つきが一気に変わる！

さあ、戦いが始まった。

『いたいいたいいたいいたい』 『あいた』 『ちよつはなして』 『にくー！ーっ』 『私の肉』 『離してくださいこれないと私妻に怒られるんです』 『あ…あ…あ…あ』 『にくわたしのにくわにくわにく』 『肉肉肉肉肉肉肉肉』 『リストラされたんですだから肉を私に』 『イヤアアああにくがあああ』 『…死に…たくない』 『あたまとれるぎにやあ』 『妻に…』 『うふふふ』 『にー！ー！くうー！ー！っっ』

木霊する戦いの悲鳴と壮絶な争い。その間をぬってメイドは目標に接近していく。従者は最初の一撃で郊外に吹き飛ばされていた。

「肉は私が貰うわよっ！」

メイドの勇ましい声が響き、白と黒の疾風が戦場を走り抜ける。

目標まであと6メートル！

『肉』

獲物に群がる熟練の戦士たち。

目標まであと2メートル！

そして

コンビニで頼まれたモノを買った火澄は直ぐには戻らず、気ままに街を歩いていた。なんとなく、直ぐに戻りたくなかったからだ。

秋の街は枯れ葉色。行き交う人々も急ぎ足だ。

「紗憐……怒ってるかな……」

見かけた鯛焼き屋台のベンチに腰掛け、粒餡のみっちり詰まった鯛焼きにかぶりつく。甘い。

「はあ……絶対キレてるよなあ伊織の奴。どうしたもんか……」

「とりあえず謝ってください」

「だよなあ。ただ、謝るっても会いにいくのはなあ。絶対殴られるし」

「殴りますね、伊織くんなら」

「そうだよな……って」

勢いよく立ち上がり振り返る。

ブレザー姿の少女がいた。艶やかな黒髪に冷たい空気に染まる頬、潤んだ瞳。

「紗憐……」

月岡紗憐そのヒトが立っていた。驚きを隠さず紗憐を見つめる火澄。

紗憐の瞳から涙が零れる。

「泣くなよ……紗憐……」

「ふうー。結果は上々。これで今日は肉肉肉の肉三昧のすき焼き
よ」

エコバックを抱える従者を従え、メイドは額に浮かんだ汗を爽やかに拭った。あの戦乱を戦い抜いたというのに、彼女は息すら乱していない。浮かんだ汗もあの熱気によるものだった。

「重いいいい」

「だらしないわね」

「一般人とお前の体力を比較するな」

「はいはい。……ん？」

「どうした？」

「あそこ。火澄さんと女の子が話してる」

「なにつ、まさか彼女?!」

「さあ? ……っ!」

「抱きついた?!」

「しかもあの娘泣いてない?」

「くそ、俺より先に彼女作りやがって…」

「僻みじゃん」

「うるさい」

「……おまえらなにしてんだ?」

「あ、黒やぎさん」

「誰がやぎだ。俺は八木だ」

「ちよっ、そんなとこいたら見つかるっ…」

「うおっ、ため、なにしゃがる」

「いいからっ!」

「神楽つゝ、あいつら移動するぞ」

「追っわよ」

「もちろん」

「……おまえら暇だな」

続

episode / 8 あのスタをもう一度(前書き)

火澄と喜一がぶっ壊れます

episode / 8 あのベタをもう一度

前回のあらすじ。

陽差に頼まれコンビニに行った帰り道で親友の少女、紗憐に出会った火澄。その現場に偶然居合わせ覗き見る事にした変態メイドとその部下。その2人に捕まり強制的に参加することになった強面のやくざ。彼らの尾行と享楽と真剣なお話。

尾行されてるとは知らず、火澄は泣いている紗憐をなだめ近くの喫茶店に入った。その後を追って“変な奴ら”も喫茶店に侵入し、ウェイトレスに変な目で見られていた。

コーヒーを2つ頼み、紗憐が落ち着いたところを見計らって火澄が切り出した。

「なんでお前がここにいるんだ？車は？」

「…今日はちよつと用事があつて…一人で来たんです。それで偶然火澄くんを見つけて…」

「そうか…偶然ってすごいな？結構あつちから遠いのに……」

「本当です。用事がなかったらもう会えなかったかもしれなかったんですよ。火澄くんのことだから犯罪はしないと申ってましたけど……」

「まさか？犯罪なんてしないよ……（たかり狩りって犯罪かな……）」

「……無事でよかったです……」

「……じめん」

「なんかしんみりしてるわね……何話してるのかしら？」

火澄たちから左斜め後ろの席でコソコソ隠れているメイドが言った。

「ひそひそ……別れ話とか……」

「ひそひそ……何！？修羅場！？」

「お前ら、ひそひそ言ってるが声の大きさ抑えなきゃ意味ねえぞ」

「ひそひそ……気分の問題ツスよ」

「ひそひそ……どうする？近づく？」

「……………（何で俺ここにいるんだ……）」

八木の憂鬱はまだまだ続く…

「ひそひそ…よし、移動するわよ」

「火澄くんは今までどうしてたんですか？」

コーヒーに角砂糖をいれながら紗憐が訊く。

「住み込みのバイトだよ。なんとかやってる」

コーヒーをすすりながら火澄が答える。やくざのことは触れない方針で。

「紗憐はなんの用事で来たんだ？」

「えっ！？その……」

突然挙動不審になった紗憐に火澄は眉をひそめる。

「…どした？」

実は“探偵を雇って火澄くんを捜してもらおうとしていた”とは言えないですね……

「いえ……（話をそらさないよ……） それより！火澄くん、なんで連絡してくれなかったんですか！？し、心配したんですよ！」

「（……話をそらしたな）それは悪かったと思ってる……けど巻き込みたくなかったし……あの携帯だって紗憐から貰ったやつだから使いつらくて」

火澄の持っている携帯は去年紗憐に無理矢理持たされたものであり、無論料金は紗憐が払っているため、火澄は少しかいづらかったのだ。

「それに……もし俺の“親”が来たら……お前誤魔化しきれないだろう？お前顔に出るし……」

「それは……あたってます……」

面白くなさそうに顔を膨らます紗憐にくくつと軽く笑いを漏らした後、火澄は不意に真剣な表情になった。

「俺の親……お前らの所に行ったろ？」

「………はい………それと、伊織くんの所へも……」

「………悪いな………」

「………なんで火澄くんが謝るんですか……」

悲しそうな顔をしている火澄に、紗憐も酷く悲しい思いになる。なぜ彼ばかりこんなに辛い表情をするのだろうか……

「……………悪い……………」

それは苦笑なのか…自嘲なのか…

「…なんかシリアスな雰囲気だな……………」

先刻より近くの席に移動した三人組の普通の人こと喜一が言った。

「“親”がどうとか言ってるわね……………」

聞き耳をたてているメイドが言う。

「親！？……………おいおい……………まさか…結婚とか！？」

「結婚！？てことは駆け落ち！？」

馬鹿くせえと1人冷静に、というかあまり興味なさそうに煙草を吸っている八木が冷静に突っ込む。

「あんま騒ぐとバレルぞ……………」

だが、その冷静なツッコミは完全に無視され、むしろ2人の想像は過激でデカくなっていく。

「だからバレル……………ぞ……………」

ふと、八木たちの席に人影がたつ。それはいつもの人懐っこい表情とは対極の、絶対零度の怒りを必死に抑えた火澄だった

「なにしてるんですか？できれば簡潔で正直に“ ” していた” みたいに答えてください」

口調はいやに丁寧だが三人を射抜く視線は冗談抜きで『ぶつ殺すぞこの野郎齒あ食いしばって成仏しやがれ』と語っている。

「落ち着け火澄！！頼む！」

「あはは…火澄さん。俺は落ち着いてますよ。ところで“ 全裸に剥いて女子校にぶち込む” のと“ 私はゲイですと書かれたプラカードを持たせて危ない場所を歩かせる” のと、どっちが再起不能になりますかね？」

「どっちも無理だー！！！！」

「じゃあ“ 全身の毛という毛をピンセットで引き抜く” とか？」

「ぎゃあー！！火澄がマジギレだー！！！！」

「あははは…喜一さん。とりあえず齒あ食いしばってください。鉄パイプでいきます」

「なんで俺ばっか……」

「火澄くん。とりあえず落ち着いて？」

状況を飲み込めないでいる紗憐がこのまま放置しておくといけないと

思い、喜一に助け舟をだした。

「……はあ……わかったよ、紗憐。火澄さん、神楽さん、八木さん。ちゃんと訊かせてもらいますよ？」

ギロツと睨みつけた火澄の眼は普段からヤクザを見慣れている彼らにも戦慄を走らせる程冷たく恐ろしいものだった

「とりあえず紹介します。彼女は月岡紗憐。俺の学校の親友です」

コーヒーを運び一つの席についてから火澄は紹介した。

「えーっと、喜一です」

「菱沼神楽。神楽って呼んでね？」

「八木銀一郎だ」

火澄の“自己紹介しろよ”的な視線に次々と自己紹介する三人に紗憐はひとつひとつ丁寧に頭を下げる。

「月岡紗憐です。……（なんだろこの人たち……）」

メイドとやくざっぽい人と普通の人の統一感零な感じに紗憐は困惑するものの、言葉にはださなない（ただし顔にでてる）。

顔にでてるのがバレバレの紗憐に、喜一は一番の疑問をぶつける。

「その…紗憐ちゃんって…火澄の彼女？」

その瞬間、火澄はすすっていたコーヒーをベタにブツ！と吹き出したが誰も気にしなかった。

「違います。婚約者です」

「なんだ…婚約者か…って、ウソー！！！！」

一昔前の連ドラか映画かラブコメ以外有り得ないベタな言葉を言った彼女の表情は真剣そのものだった。

「紗憐！なに言ってるんだ！」

「事実です。私火澄くんのこと好きですし」

赤面して慌てて否定する火澄にサラリと紗憐が言う。

次の瞬間、火澄はテーブル越しに座っていた喜一に肩をガシッと掴まれた。

「ちくしょーなんだこの展開は〜！？ベタに羨ましいぞこの野郎俺にその幸せ四分の一分ける〜」

「お、落ち着いて喜一さん！その四分の一って妙にリアルだから喜一にがくがくと肩を揺さぶられながら火澄が言った。

「それに婚約者つつつたてガキのころの口約束だし…」

「私は覚えてます。あれは確か私たちが小学生になったばかりのこ

る

『ひずみくん。この“じゃんぼすぺしゃるいちじょーとけーき”
あげるからけっこんしよっ。』

『いゝよ』

って」

懐かそうに昔を思いだす紗憐の言葉に更に激しく火澄を揺さぶる喜
一。

「食い物に釣られたのかこの甘党ー!!」

「だって小学生だったし……」

「それでも羨ましいぞ女の子から告られるなんて……!!」

「ぎゃー!!…中身でる〜」

「喜一。それくらいにしる」

いい加減吐きそうになった火澄を見かねて八木が制止した。

「死ぬかとおもった…」

まだグラグラしている三半規管を落ち着けながら火澄が言った。

「……ねえ……」

ふと、珍しく無言でなにか考えていた神楽が言った。

「もしかしてあなた…月岡製薬の…?」

「はい。確かに私は月岡グループの会長の娘ですが」

「ウソオー!!!」

ガシッ!!

「月岡ってあのバカでかい製薬会社でしょー!?逆玉じゃない!!」

「か、神楽さん揺すらないで…」

「いきなり美味しい展開過ぎるじゃない!?この後多分なんか大事件が起きるわよ!昔から良いことがあった後は悪いことも起きるっていうし!!」

「と、とりあえず吐きますって!」

「ちくしょー。製薬会社の美人令嬢が婚約者だとー?なんだこの恋愛小説によくある主人公の彼女役みたいに現実じゃまず有り得ないサクセスストーリーみたいなのは!??」

神楽の隣では訳の分からないことをまくし立てている喜一が苦悩の表情をしている。さらにその隣では話は訊いているが我関せずを維持している八木がタバコを吸ってポーッと流れをみていた。

「……………飽きねえな……………お前ら……………」

ポツリと呟いた八木の言葉は再び虚しく響いただけでなんの効果もなかったようだった

episode / 9 焼き芋（前書き）

ちよっと一息ついてみたような話です。ちよっとじゃなくなってちよっと。違いがわかるひといますか？

昨日の騒動の翌日

「昨日は大変だったらしいな？」

洗濯物を干している火澄ににやけ面で陽差が言った。

「ホントに大変でした……」

あの後火澄はトイレに駆け込むハメになり、喜一からは敵意？の眼で見られ神楽からは好奇の眼で見られてしまった。

その後、帰り際に紗憐からは携帯の電源は必ず点けておくように釘をさされ、伊織に連絡するとも言っていた。

「残念だ。俺もその場に居合わせたかった」

「……………」 「冗談半分冷やかし半分の陽差を軽く睨みつけた後、火澄はベランダを出た。

「お茶でいいツスか？」

火澄がそう訊くと陽差は『ん』と応えた。

『先日、バラバラになって発見された男子高校生の司法解剖の結果、鋭利な刃物で』

火澄がお茶を淹れてリビングに行くと言差が昼前のニュースを視ていた。

「バラバラ死体？」

「この辺りで見つかったらしいな。しかも犯人は特定されてないらしいし、変質者かもしれないな」

のんびりお茶をすすりながら陽差が興味なさげに言った。

「…最近思ってたんですけど、陽差さんっていつも暇なんですか？」

「うお！？グサアと突き刺さる言葉だな」

「でも俺、陽差さんが大学行くか部屋でレポート書いているとき位しか忙しそうにしているところ見たことないんすけど…」

「まあ、実際暇だな。今は…だが」

「今は？」

「ああ。もう直ぐ親父が帰ってくるし、嫌でも忙しくなるぞ」

「陽差さんの親父ってことは…」

「霜敵会9代目」

「どんな人ですか？」

「そうだなあ。頑固でワガママで子供好き子供っぽい所のある50代には見えない無駄に若く見える体した実際結構若作りしているおっさん、てところだな」

「……とりあえず凄いなスね……」

「ああ。とりあえず凄い」

「今どこに行ってるんですか？」

「ん〜…たしか香港じゃなかったかな。向こうに仲のいいマフィアの友達がいるらしいんだが」

日本のやくざが香港マフィアと友達か…なんかすげえ世界だな…

「というわけで俺は今ある暇な時間をめっちゃ有意義にのんびり過ごしてる訳だよ」

「じゃ、頑張つてのんびりしてください。俺は忙しく働くんで」

「……嫌みか？」

「そんなことないです。此処で働くことが出来るのは陽差さんのおかげですし、実際居心地いいツスから」

「そっか……なあ？」

「はい？」

「そろそろ教えてくれねえか？お前の家出の理由」

「……………」

ギン、と不意に鋭くなった陽差の視線に思わず火澄は言葉に詰まる。

「……………はあ。じゃあ1つだけ教える。お前の体の傷と家出は関係があるのか？」

「……………」

無言。それは肯定を意味していた。

「……………そうか……………」

「火澄くん。霜敵会で一番暇人な若ー。居ますかー」

突如響いた神楽の声。その二秒後、勢いよくドアを開けて神楽がリビングへ入ってきた。

「誰が暇人だ。そういうことは例え本当でもストレートに言ってもんじゃねえぞ」

「はいはい…んなどうでもいい話はともかく」

じゃん、と抱えていた紙袋を見せて神楽が言った。

「焼き芋やりましょう」

「焼き芋？」

「私がよく行く八百屋さんにサービスで貰ったんです。既に落ち葉は喜一と麻橋さんが準備してますから」

「なるほど、なら行くか」

「これより、第1回焼き芋焼くその会 芋でも苺でもイクラでも人間でも焼いてしまえば皆同じ を開始します」

「とりあえずツツコムがサブタイトルが有り得ないんですけど」

「はい無視ー」

「……………」

さっそく繰り広げられたシユールなボケ（神楽）とツツコミ（喜一）の闘いをボケが無視によって勝利するとさっそく焼き芋は始まった。

赤々と燃える焚き火に濡れた新聞紙とアルミホイルでまいた焼き芋を投入する。やくざの屋敷の庭で焚き火かよ！という野暮なツツコミは却下。

ちなみにこの焼き芋には火澄ら下働き三人の他、陽差、麻橋、八木と数名若い衆が参加している。

「昨日は散々だったな」

寒いので焚き火に手をかざして暖をとっている火澄に煙草をくわえた八木が言った。

「陽差さんにも言われましたよ」

「…お前、あの子に惚れてんのか？」

「な！？いきなりなんスか？」

「あの娘は本気でお前に惚れてるぜ。お前も漢なら決断しろよ？」

「……決断？」

「あの娘に惚れてるならそう伝える。惚れてないならハッキリ言ってやれ。残酷だがそれが正しい。叶わない恋をずるずる引きずるよりな……」

そう言った八木の横顔は悲しげで寂しげな雰囲気を持ち、焚き火などでは温まらない冷たさを秘めていた。

「……意外です」

「ああ？」

「八木さんが恋愛事を言うのがです。八木さん硬派だし」

「俺にもいるからな……本気で惚れた女”がな……もっとも、昔だ
な……」

「……今でも好きなんですか？」

「……」

「麻橋さんから訊いたことあるんです。八木さんは女遊びを絶対し
ないって」

「ふん……ロクな女がないだけだ」

訊かれたくない事だったんだと火澄は思い、少し無神経だったと後
悔した。

「……あ、焼き芋そろそろツスね」

ガサガサと枝で煤けたアルミに包まれた芋を掻きだす。

「あちちち……」

アルミホイルを剥いて新聞紙を破りとりとホクホクとした焼き芋が
顔を覗かせた。

「うまそうだ」

焼き加減は上々、甘さも抜群のいい具合だ。全員に行き渡ったところを見計らってかぶりつくとサツマイモの絶妙な甘さが口に広がる。

「そうそう、これを貰った帰り道で初めて聞き込み調査つてのをさ
れたの」

焼き芋にかぶりつきながら神楽が言った。

「聞き込み？」

「最近あったバラバラの死体。犯人見つかってないの。それでいろんな事訊かれたんだけどその刑事がかっこよかったの！なんかこう、色気のある男前でね。左頬から首筋までちよつと長い切り傷があつてなんかそれが色気を引き立てるの」

ブツ！！

神楽の言葉に火澄は口に頬張った焼き芋を盛大に吹き出してしまった。

「な！？きたねえな…」

「すみません…麻橋さん…」

左頬から首筋までちよつと長い切り傷…？おいおいまさか…
神楽の話をきいてある人物を火澄は思い出す。

「神楽さん。その刑事名前言つてましたか？」

「名前？えつと…崩嶋って名乗ったけど」崩嶋！？間違いない…

「…火澄。どうかしたのか？」

「へ？いや、何でもないツスよ、陽差さん」

「……………？」

疑わしげな陽差の視線に曖昧な苦笑で返し火澄は再び焼き芋にかぶりついた

「どっすっかな…」

焚き火の後片付けをしながら火澄は考えていた。おそらく、というか間違いなく神楽の言っていた崩嶋とは火澄今会いたくない人間である。

「聞き込みなら暫く外出れないじゃん…」

はあ、とため息を零し、今は燃えカスになっている落ち葉の山をかき集めることに専念した

「はあ…」

つまらない意地などという浅はかで今時の理由で始まったわけでは
ない、火澄という存在をかけた“命がけ”の家出。もし捕まれば、
おそらく火澄は……この家出はどこまで続き、どこで終わるのか…
それは火澄には絶対わからない…だが、始まりがあれば終わりもあ
る。彼の家出はどんなにあらがっても確実に終わりに近づいていっ
た

それはなんの前触れもなく届いた

突然火澄のめつたに使わない携帯にメールが着信したのだ。そしてこの携帯のアドレスを知っているのは霜蔵会の面々と親友2人だけ。つまりこの携帯にメールをするのは非常に限られてくる。

現在火澄は広いリビングで強面の面々にお茶をいれている。彼らに携帯をいじっている気配はない。つまり、2人の親友のどちらからということだ。

どっちだ！？どう転んでもイヤな予感がするが…

『着信 九条伊織』

その差出人を見た瞬間、火澄は一瞬思考が停止し体が硬直した。

そっちか…やっぱりきたなあ……紗憐連絡するって言ってたしなあ

……

ため息と恐怖を零しつつも見ないわけにはいかず、恐る恐るメールを開いた。

> 紗憐から訊いた。明日そっちに行く。紗憐もだ。待ち合わせは紗

憐と話した喫茶店。時間がとれたら連絡しろ。バックレたらわかっているな？

やっぱり…怒ってるよ…やだなあ、殴られんの…

一瞬バックレようという考えが頭をよぎったが火澄の脳はその2秒後その考えを抹消した。

そんなことしたら命とか尊厳とかそんなもんでもよくなるほどキツイ罰を喰らってしまう。それは嫌だ。

「……はあ……」

仕方ないと思いつつもやるせない気持ちを抑えられず、火澄は肩を落とし先輩である喜一に振り返った。

「喜一さん。明日…少し抜けていいですか？」

「明日？別に大丈夫だ。9代目が帰ってくるまで結構暇だしな。昼の2時くらいからなら二時間くらい平気だぞ」

「ありがとうございます」

喜一に礼を言って火澄は携帯を取り出し返信した。

> 2時からなら平気。

これでよし…

正直言うと嘘ついて逃げようと思ったがやはりそれは辞めた。自分を心配してくれている親友を騙すまねはしたくない。それに連絡をとらなかったのは自分の方なのだ

「……俺…バカだよなあ……」

それは何度目の自嘲だろうか

少年は自身を責める。

「……」

ほんの少しの間携帯電話の液晶に映る自分をぼんやりと眺めた後、火澄は無言で携帯を閉じ、仕事に戻った

明くる翌日。午前中の仕事（主に洗濯）と昼食の後片付けを終えりと火澄は屋敷を出た。

時刻は13：37分。此処からなら徒歩で15分弱である喫茶店につく。

寒さの厳しくなってきた冬の道をジャケットのポケットに両手を突っ込みながら歩いていくと直ぐに目的地が見えてきた。

いや、目的地だけではなく、見慣れた2人の人物も一緒に視界に入った。

1人は月岡紗憐。傍目から見れば容姿淡麗の美少女と違って差し支えない彼女だ。道を往く男たちの視線が彼女に集まっている。ただ、道を往く男たちの視線は直ぐに散ってしまう。なぜなら隣りにその原因といえる男がいるからだ。

紗憐と隣に立つ男。名は九条伊織。火澄の親友の1人だ。

染めた金髪をワックスを使って逆立たせた特徴的なヘアースタイルに両耳を幾つも飾るピアスたち。身長は火澄と比べると若干低い、苛々しているような表情が目つきの悪さを手伝って非常に柄が悪い。

「怒ってる……」

なるべくコツソリと2人に近づきながら火澄は呟く。いつも苛ついているような伊織だが、今は本当に苛ついているようだ。

射程距離ギリギリまで近づいた火澄は諦めという悟りの境地に達し、意を決して二人に視覚から声をかける。

「い、伊織……ひさしぶり……」

「あ……？」

火澄の声をきき振り返った親友はドスの利いた声と共に振り返る。

「……………」

「……………」

一瞬、2人は押し黙ったが、次の瞬間には伊織が動き出していた。

「くおの」

伊織の怒鳴りが聞こえた後、火澄の視界に入ったのは固そうな靴底
×2。

「バカ野郎がああああ!!!!」

めりいいいいい…

「いっふっ!!!!」

ごしゃああああん!!!

上記の解説。

めりいいいいいと火澄に食い込んだのは伊織の放った強烈なドロップキック。余りの速さと気迫に回避することができずまともに人体急所のひとつ、水月に蹴りを叩き込まれた火澄を吹き飛ばした。以上、解説終わり。

「いきなり痛いなあ…」

喫茶店に入った三人の1人、火澄が言った。

「お前が悪い。連絡すらしないでよ」

苛々したように言ったのは伊織だ。

「そうですね」

伊織の意見に賛同したのは紗憐。

現在の火澄は完全に四面楚歌の状態だ。

「……………すまん」

頭を伏せて謝る火澄にむけられる親友2人の視線はまだ少し厳しかったが温かさも含まれていた。

「…俺のいなかった間、…両親、2人のところ行ったんだってな…」

躊躇いがちに瞳を伏せたまま、抑揚のない声で訊く。

「……………ああ」

伊織が言った。頭を掻きながら躊躇いと遠慮のこもった声で。

「悪いな…俺の勝手な家出のせいで」

『巻き込んでしまつて』と、火澄は続けた。自嘲まじりの作り笑顔。親友2人から見ると痛々しくなるほどの完璧な作り笑顔。

なぜこの少年はすべてを自分だけに背負い込ませるのだろう…

「ねえ、火澄くん。御両親の事は私たちでは…力になれないかもしれません……。でも…」

口をひらいた紗憐のか細い声。無力さを感じている優しすぎる少女の言葉。

「力になれなくても……私は……」

紗憐の言葉の先になにがあつたかは火澄にはわからなかった。不意に伊織がダンツとテーブルを叩き会話を中断させたからだ。

「まで紗憐。俺は納得してねえぞ」

ただでさえ険のある彼の顔に怒りが浮かぶ。そこらの不良グループも一睨みでビビらせ逃げ出しそうだ。

「俺は納得できねえ。俺らはお前の親友のつもりだ。だが、てめえはどうだ？なんの連絡も無しに1ヶ月近く行方不明になりやがって！ざけんな！紗憐がどれだけ心配したと思っただやがる！！」

「ッ」

伊織の抑えることのない怒声が店内に木霊し、店中の人の視線を集める。だが、伊織の言葉は止まらない。

「クラスのヤツらもおめえを心配してんだ。それが『すまん』だど！?」

激しい怒りを叫ぶ伊織のその言葉はただの“暴言”や“罵声”とは全く異なる、強い感情。

目の前の少年を心配していたからこそその優しさを含んだ怒りだ。

「…………伊織」

「…………ああ！もういい！……」

最後に盛大な舌打ちを一つして伊織は荒々しく立ち上がり、これまで荒々しく扉を開けて外に出ていった。

残された火澄はただ伊織がいた席に眼を向けて沈黙するしかできなかった。

「…………伊織くん。何度も火澄くんを捜しに走り回ったんですよ」

ポツリ、紗憐が呟く。眼を伏せ、カップの取っ手に手をかけたまま、小さく言ったのだ。

「学校で噂をきいて……その後火澄くんの御両親から家出について訊かれたんです。伊織くん、とても心配してて」

「……そっか……俺……親友失格だな……」

紗憐の顔を見ずに眼を伏せたまま火澄は寂しそうに言った、が、次の瞬間紗憐の右手ピンタが火澄の頬を捉えた。パァンと小気味よい音がした。

「なんでそんな事言うんですか！？いつ失格になったんです？」

可愛らしい整った顔を怒りで蒸気させ、紗憐は怒っている。それは、大切な人に向ける“優しい怒り”だった。潤んだ瞳は眼前の火澄をジッと見つめている。

殴られた火澄は赤く成りつつある頬を押さえることもせず、眼を伏せ黙っていた。

「私たちは…あなたの親友のつもりです。何年も一緒でした。

これからも…私は一緒でありたいです

「

激しく叫ぶわけでも、盛大な嗚咽を漏らすわけでもなく、彼女は静かに涙をこぼしていた。頬を伝いゆく熱い雫は2人の少年を思い、溢れ出す。

「……………ごめんな……………」

この謝罪の言葉を何度口にしたのか…それでも火澄には謝ることしかできなかつた。

「……………ごめん……………」

episode / 10 11めん… (後書き)

やっと伊織くんが登場しました。作者いち押し of 性格男前な少年です。

episode / 11 子供の理想（前書き）

今回はちょっと長いです。

その後、2人は伊織を追って喫茶店を出た。

伊織は店を出てすぐ近く、寒々とした冬の空気の満ちたベンチに近くの自販機で買った缶コーヒーで両手を温めながら座っていた。

火澄が歩み寄ると伊織はちらつと火澄に眼をやったが直ぐに視線を正面の車の行き交う道路に戻した。

「伊織……」

気難しい表情を続ける伊織はコーヒーを一口飲み、火澄を見ないようになっている。だが、火澄は構わず続けた。

「……心配かけて悪かった……ありがとう」

「……………」

火澄の言葉を聞くと伊織は無言で立ち上がった。そして右手に持っていたコーヒーの缶をベンチに置き、ポケットからもう1つ空けていない缶コーヒーを取り出した。刹那、伊織が腕をふりかぶる。そして

ゴズン

「……いってええええ！」

ほぼゼロ距離から全力投球された缶コーヒ―は火澄の頭に命中。火澄は頭を押さえあまりの痛みに絶叫した。

「それで許してやる。感謝しろ」

ふん、と一瞥してから伊織はにやっと笑った。火澄は見る。久しぶりに笑った伊織を。

「そりゃどうも…」

頭を押さえながら火澄も笑う。

ゴス

「いだ」

「なに笑ってやがる」

どうやらまだ苛ついているらしい伊織がこぶになりそうな火澄の頭をど突く。

「いや、そついう流れで…」

「あー、おまえの顔見たらまたイライラしてきた。俺は帰る」

それだけ言うと伊織はきびすを返し、歩き出した。その後ろ姿を苦笑しながら眺めていると後ろから来た隣りに紗憐が立った。

「私も帰りますね。伊織くんは優しいですから、きつと許してますよ。」

「ああ、あいつは優しいからな。顔は怖いけど」

「でも、私はまだ許してませんからね。暫く反省してください」

イタズラっぽく笑うと紗憐も伊織を追ってかけていった。そんな2人の親友の姿を目で追って誰に向けるわけでもなく呟く。

「優しいな…ありがとう…」

そして火澄も振り返り、彼らと逆の道を歩き始めた。自分の仕事場へ向かうために。

「あれ？」

やけにでかい立派な門。霜蔵会の本家であり、火澄の仕事場でもある。その門の前に女性が佇んでいた。

年齢は二十代半ばくらいだろうか。真っ白なコート越しからでもわかる豊満な体。スラリと長い脚をしたスタイルの良い女性だ。軽くウェーブのかかった黒髪を背まで伸ばし、殆ど化粧はしていないだろうと思えるがその顔は目鼻立ちの整った大人っぽい美人だ。

「誰だ？」

初めて見る女性に火澄は首を捻る。女性は火澄には気付いていない様子でジッと門を見つめていた。

「あの…用事ですか？」

このままでは仕方ないので火澄は女性に声をかけた。

女性は火澄に気づくと焦ったように目に見えてあたふたし始めた。

「えっ…あの…キミ…この人？」

「はい、ここでバイトしてます。用事なら中へ…」

「いえ！……大丈夫…」

火澄が中へ進めると女性は焦ったようにぶんぶん顔を横にふる。

「……………」

なんだか、すごいギャップだな。見た目は大人っぽくて美人なのに…

「私…か、帰るわね！邪魔してゴメンナサイ…」

「え？あ、ちょっと…」

火澄が引き止める間もなく女性は駆け出して行ったが、直ぐに止まる。そして壁に手をつけてしゃがみこみ、嘔吐しだした。

「ちよつ！大丈夫ですか？」

突然すぎる事態に火澄は驚きながらも女性の所に駆け寄り背中をさすってやる。

「……………ありがとう」

ひとしきり吐いたのか、少し具合が悪そうだったが女性は微笑み火澄に礼をいった。

「いえ…具合悪いですか？少し休んだほうが…」

「いいの！…大丈夫だから…」

頑なに拒む女性に火澄はあることに気付く。

「…霜敵会が嫌なんですか？」

普通ならば当然だ。やくざの家で休みたいとは誰も思わない。だが、火澄の質問のニュアンスは少し違った。

女性は霜敵会を知っていて、なにかの理由で入るのを拒んでいるのではないか？

そう火澄は考えた。

「……………」

「…だったら少し遠いですが、いいところがあります。よかったら案内しますか？」

「……………」

「あなたがどんな人かはわかりませんが、霜蔵会の関係者の知り合いなんじゃないんですか？じゃなかったらヤクザの家の前になんか居ませんし…」

「…ええ、そうよ…少し知り合いがいて…いろいろあって…その…」
躊躇いがちに言葉を紡ぐ女性に火澄は続ける。

「誰にも言いませんよ。それより寒いですし、行きましょう。歩けますか？」

「ええ…」

「具合悪くなったら言って下さい」

そうして2人は歩き始めた。名前も知らない赤の他人同士だということ

「…で、連れてきたのか」

火澄が女性を案内したのは陽差の行き着けの店、誇月。時間が時間なだけに人も少なく、今は火澄たちだけだ。

「はい……」

火澄は状況をこの店の料理人、陸弥に伝える。彼は陽差の親友であり、以前この店に連れてこられた時から何度かこの店に訪れてきた火澄は彼と親しくなった。

ヤクザ顔負けの目つきの悪さ（それを除けばかなり美形の部類に入る）を誇る寡黙な陸弥だが、本当に親切で面倒見が良い青年であることを火澄は知っている。

「……とりあえず座つとけ。温かいモノ出してやる」

そう言うと陸弥は銀灰色の短髪にタオルを巻く。伸ばして補足縛つた後ろ髪が特徴的だった。

「ありがとうございます」

そう言うと火澄は女性の座る席に戻った。

「落ち着きました？」

火澄は席につきながら女性に聞く。女性は幾分か落ち着きが出てきて顔色も良くなっていった。

「ええ……ありがとうございます」

「どういたしまして。あ、俺は火澄。霜蔵会で住み込み下働きをし

てます」

「私は柳葉理子。一応少し前までホステスをしていたの。今は辞めたけど…」

言葉を濁した理子はグラスから滴る水を指で拭う。

……訳ありかな

「理子さんはなんであそこに？」

「……火澄くん。住み込みなんだよね？…銀一郎の事…知ってる？」

理子の口から聞き慣れない名前が出てきて火澄は一瞬考える。

…銀一郎？誰だ？

「……あつ！八木さん？」

そうだ。八木さんの名前は確か銀一郎だ。ってことは…

「八木さんの惚れてる女って…」

この人が…

「惚れてるって…あいつそんな事言ったの？」

恥ずかしそうに照れ隠しの笑いを見せ、理子は水を一口飲んだ。

「じゃあ、理子さんは八木さんに会いに来たんですか？」

「…会いに来たっていうか…最後に一目見たかっただけだったの」
そこで理子は言葉を区切った。作務衣姿の若い店員が湯気の立ち上る器を載せた盆を運んできたからだ。

「お待ちどーさん。あ、これ陸弥の奢りだったさ」

「ありがとうございます、鋼斗さん」

鋼斗くわうとと呼ばれた若い青年は熱いお汁粉の器を2人の前に置いていく。

「じゃ、ゆっくり」

そう言うと鋼斗は盆をさげて奥に戻っていった。

「いただきます」

ちょうど小腹の減っていた火澄はさつそく割り箸を割り、美味しそうな香りを放つお汁粉の器を自分の近くに引き寄せる。

「あゝ、あつたまる」

小粒のよく煮えて柔らかかな小豆とよく伸びる餅。甘さ控えめの温かい和やかな味だ。

「さすが陸弥さん。めっちゃ旨い」

「……………」

「どうしました？お汁粉は苦手ッスか？」

割り箸は取ったものの、一向に手をつけない理子。じっと甘いお汁粉を見つめているが口はキュッと閉じたままだ。

「…食欲が無くて…ゴメンナサイ」

ふう、と溜め息を1つ零し、理子は割り箸を置いた。

「……火澄くん。銀一郎は…どうしてる？」

「どうしてるって…最近、少し元気ないようですけど」

「そう…」

「…理子さん。まだ八木さんの事好きなんじゃないんですか？」

「……」

「八木さんは多分。理子さんのこと好きだと思います」

火澄は箸を置き、理子を見る。理子はずっと眼を伏せている。

「…もう…終わったの…」

ポツリ、理子は呟いた。悲しそうな、寂しさを含む小さな独白。それと同時に彼女は箸を掴むと一気にお汁粉をすすった。が…

「… っつ…火澄くん…トイレ…ど…」

口元を押さえて理子はよろよろ立ち上がる。今にも吐きそうだ。

「直ぐそこです！あのドア！」

流石に火澄も焦り、理子の背に手をあてて彼女をトイレへ連れて行った。

「ゲホ…うっ……………」

小さな共用トイレの一室で理子は苦しそうに戻している。が、火澄はそんな理子にどこか違和感のようなものを感じていた。

「……………ありがとう火澄くん…もう平気…」

ハンカチで口を拭いながら理子は弱々しく火澄に礼を言った。

「…とにかく席に戻りましょう」

席に戻ると火澄はまだ残っているお汁粉をテーブルの隅に寄せて理子と向き合った。

「理子さん。もしかして…妊娠…してる？」

核心をつく火澄の言葉に理子はゆっくり頷く。

「…相手は…八木さん…ですよね…」

「ええ…」

「八木さんはこの事を？」

「いいえ…知らないわ…教えるつもりもないの」

「なんで！？八木さんの子供なんでしょう？それなのに…」

「……私、実家に帰るつもりなの」

「え？」

「そこで子供を産んで育てるつもり。銀一郎には内緒で…」

「待ってください。それとこれとなんの…！」

「…銀一郎は私が妊娠していることを知ったら…私と結婚するわ。優しい人だから」

「……？」

「でも、それは嫌なの。『子供ができたから結婚しよう』なんて、まるで子供をダシにしてるみたいじゃない…」

私は、“女”としてあの人のことが好きなの…お腹の子の母としてではなく、私は女として銀一郎に振り向いてほしかったの。くだらない意地だけどね…」

「でも、それじゃあ…」

「…お腹の子を父親無しにしてしまうのは、本当に私の身勝手。ひどい母親だと思う。でも…ちゃんと育ててみせる。絶対に」

そう語った彼女の眼に、強い覚悟と決意が在ることを火澄は知る。

きつと、火澄が何を言ってもそれは揺るがないだろう。しかし

「理子さん。まだ、八木さんのこと好きなんですよね？」

「ええ」

「八木さんもきつと理子さんのこと好きです」

「……」

「だから…俺にチャンスをください！俺が2人をもう一度合わせます。だから…」

真剣な感情を真つ直ぐな視線にこめて叫ぶ火澄。ただ、強く

「…2人が好きなら、また、一緒になれます。絶対に…」

「…気持ちは嬉しいよ。火澄くん。でも、なんであつたばかりの私にそこまでしてくれるの？」

「……俺は、まだ八木さんや理子さんのことを全然知りません。でも…子供には…幸せになってほしいんです」

なにが幸せでなにが不幸せなのか、それを決めることは当人にしかできない。

火澄は自分の考えが正しいとは少しも思っていない。これは自分のエゴだ。そうとわかつていても火澄には我慢できなかった。

お互いが愛し合っているなら、共に生きてほしい。子供に幸せでいてほしい。

わがままで無い物ねだりな子供の青臭い理想。大人ならそう一蹴す

るような浅はかで唾棄され、笑われる考えだ。

「俺は……バカで……子供ですから……」

そうとわかっている。だが、火澄の考えは変わらない。ただ、幸せであってほしい。それだけを祈り、火澄は走ることを選んだ。

あわてんぼうの

さんたくろーす

くりすますまえ〜に

やってきた

街がクリスマスの雰囲気になり始めたこの頃、霜敵会時期10代めこと神無陽差はどんよりした灰色の空の下を歩いていた。

なぜか親友三人に呼び出されたため、陽差は馴染みの喫茶店、『天体観測』に向かって歩いていた。

車でくればよかったのだが、最近のガソリン高騰の煽りを受け、意外と庶民派な陽差は歩いていくことにしたのだ。

「そのカツコイいお兄さん。ちょっと待ってくんない？」

「は？」

突然呼び止められて陽差は思わず立ち止まった。振り返るとそこには“ここらでは珍しい職業の男”がいた。

簡易テーブルを立て、折り畳み椅子に座っているのは黒い革ジャケットにサングラスを身につけた若い男。テーブルにはトランプより一回り大きいカードの束が置いてある。

「占いでもやってるのか？」

「まあ、そんな所かな。どうだい占いでも？」

「……………」

「そんな『なんだコイツ胡散臭さ野郎だな』みたいな眼でみないでくれよ」

「みたいじゃなくて本当にそう思ってるんだが」

「あははは〜そう言わずによ〜。なあ、霜敵会時期10代目？」

一瞬男のふざけた笑い顔に違う表情が浮かぶ。なんとも形容しづらい、飄々とした笑み。

「……………誰だ、あんた……………」

「ただの占い師に過ぎないさ。占い師なら名前や職業くらい当てられて当然だろ？」

くくっ、と笑う男に陽差は警戒感を覚える。

「…面白い。やってもらおうかな」

だが、陽差は敢えてのる。今まで何度も危険な目には遭ってきたが、それを一人でどうにかする自信がある。

「さて、何を占う？」

タロットカードをきりながら占い師は言う。

「そうだな、なら、俺の今日の運勢でも占ってもらおうか」

「今日の運勢か。ちょっとまって」

そう言うと男はぱぱぱとカードをランダムに三枚束から抜き取り裏の状態で陽差の前に並べた。

「さて、あなたの運勢は…」

陽差から見て左端のカードを捲る。

現れたカードの絵柄にはなにやら儀式を行うなものかの姿。

「このカードは 魔術師 。物事の始まりを意味するカードだね」

「始まり？何が始まるんだ？」

陽差が続けると占い師は今度は中央のカードを開けた。

「今度は 節制 だね。逆位置だから意味は浪費や生活の乱れ」
リバース

そして…、と最後のカードを捲る。

「最後は 戦車 のカード。意味は闘争とかそういった意味合いもあるけど“援軍”という意味もある」

「……物事の始まりに浪費に援軍？意味わからん」

「ん〜、そうだなあ。これから君にとっていろいろ大変な事が始まる。そして君自身が援軍なんじゃないかな」

「俺が援軍？」

「例えば、恋愛事とか。キミモテそうだし」

「まあ、確かにモテるが」

「うわ否定しないよこの人。全国のモテない野郎どもに全力で謝らせたいねえ」

「そんな冗談はさておき、占いなんてどうでもいい。あんたは実際のとこ何者だ？初対面だし、なんで俺の事しってるんだ？」

「俺はただの占い師。凄腕のな」

「……そうか。ならいい」

陽差は立ち上がる。

「あ、お兄さん」

立ち去ろうとする陽差に占い師の男が呼び止める。しかたなく振り返ると男は手を突き出していた。

「一回2000円だよ」

にやつて笑う男に陽差は仕方なく財布を取り出して1000円札を二枚テーブルに軽く叩きつけた。

「さっそく“浪費”だ。あんたの占い当たってるかもな？」

嫌みで言った陽差だったが占い師はその態度を崩さない。

「くくつ…占い師『夜霧』を以後ご贖目に」

占い師は飄々とした笑みを浮かべてひらひらと手をふっていた

占い師と別れた陽差は暫く周囲を警戒しながら歩いていたが何も起こる気配がなく、やがて目的地が見えてきた。

喫茶店【天体観測】

クリスマスを意識した飾り付けのされた喫茶店。落ち着いた雰囲気

の洒落た店だ。

カラン

ドアを開けて店内に入ると暖房の効いた暖かな空気が寒さに凍えていた陽差を包んだ。

「あつたけー」

店内には陽差と同じ高さのクリスマスツリーがチカチカと色とりどりの電球で輝いていた。

天体観測の店内の様相は明る過ぎない落ち着いた薄暗さをもっており、木製の丸テーブルの席が4席。ソファアの席が2つにカウンタ―席があり、穏やかな雰囲気を満たしていた。

「陽差、こつち」

聞き慣れた声に陽差は振り向く。ひらひらと手を振っていたのは霧島鋼斗きりだった。

「ああ。……ん？」

テーブル席には見慣れた面子。陸弥と鋼斗。そして火澄がいた。

「火澄？なんで此処にいるんだ？」

「なんでって…今日のコレは俺が頼んだんですよ。陸弥さんと鋼斗さんをお願いして」

「こいつらに？」

「そっ！昨日火澄が美人な人と誇月に来てね。いろいろあつたんだ

よ、いろいろとな」

陽差の疑問に鋼斗が応えた。

「……とりあえず座れ。目立つぞ……」

成り行きに任せて一人のんびりコーヒーをすすっていた陸弥が陽差を促す。普段仏頂面で視線の鋭い彼は心なしか楽しげだ。

「……よくわからないが、まあいい。訊かせてもらおうか」

今一状況が掴めていない陽差だったが取りあえず席についた。物事には順序がある、という事を陽差は今までの経験でよく理解していたからだ。

「じゃあまず……俺が昨日遭った女の人の事から話します」

そして火澄は語り始めた

突発的に、というか本能的に、菱沼神楽は走り出した。手には先ほどまで階段の手すりを磨くのに使用していた雑巾が握られていたが彼女は気にはならないらしい。

なぜ彼女が突然走り出したかというと、玄関先に人の気配を感じたからだ。彼女　神楽には無駄に高い聴力が生まれつきあった。そ

れはとある有名忍者アニメの主要キャラの一人がどんなに遠くでも小銭の音を感知するのと同じ…いや、それ以上のものかもしれない。とにかく神楽は素早く玄関へ向かっていた。インターフォンが鳴らされてから5秒以内に出迎えるのが今の彼女のこだわりだからだ。

ピンポーンガラー！！

活字に直すと大変可笑しいが、実際こんな音がした。これはインターフォンが鳴ったのと同時に神楽が戸を開けたのだ。

「へっ…」

訪問者はさぞ驚いただろう。呼び鈴を鳴らした瞬間勢いよく扉が開いたのだから

「いらっしやいませ……って……あ！傷持ちセクシー刑事さん」

迎えた神楽も少し驚いた。なぜなら訪問者は先日話を訊かれた若い刑事だったからだ。

「セクシー？」

「あっ、こつちの話」

「そうですか」

あはは、と両者は愛想笑いをした、が直ぐに若い刑事は真摯な光を双眸に宿した。

「お忙しい所恐縮です。少しお話を宜しいでしょうか？」

「いいですけど、私はメイドに過ぎないですし、家の者を？」

「いえ、本当に少しですから。私の事はご存知ですよね？」
「もちろん、崩嶋さん、でしたよね？」
「はい。覚えていて貰えるとは思ってませんでした」

にこつと笑う刑事はとても幼く見え、神楽は思わずかわいいと叫んでいた。無論、心の中で、だが。

「（イケメンは）忘れませんよ。人の顔を覚えるのは得意なんです」
「そうですか。それはちようどよかった」
「ちようどよかった？」

「はい。自分、今ある人物を探しているんですが」
「あつ、それってあの殺人事件の？」
「いえ…それとは別件です。この少年です」

刑事はスーツのポケットから一枚の写真を取り出して神楽へ渡す。

「あつ！……！」

そこに写っていたものに思わず神楽は叫んでしまった。

「知ってるんですか!？」

神楽の反応を見て刑事は食いついてきた。

「……あの…崩嶋さん。彼は……」
「彼は崩嶋火澄。1ヶ月以上行方不明になっている俺の弟です」

写真に写っていた人物。それはまだ幼い、神楽の同僚の姿だった

番外編／紹介してみよう！（前書き）

神楽さんが暴走してますが気にせずに。コメディー直線です。

番外編 / 紹介してみよう！

突然ですが番外編！

今日は、もしくは今晚は、美人メイドの菱沼神楽です。

今回の突発的な番外編は作者が調子こいてキャラクター出しすぎてどこにどんな伏線はったか判らなくなってきたので整理するため、わたくし神楽の視点からキャラクターの考察をしたいと思います。

ではさっそく (こそこそ台所へ移動)

あっ！いました。台所で昼食を作っているのは霜蔵会の賄いコンビ、火澄さんと喜一です。

現在二人は昼食を雑談しながら作っているようですが、私には気づいていないようです。

では、まずはへたれ喜一から。

名前 佐島喜一

容姿 顔は割といい方。まあ、合格点かな

血液型 そんなの私が知ってるはずないじゃん

身長 180くらい？

性格 へたれ！

こんな感じですね。では続いて火澄くんを。

名前 火澄。名字はみんなには不明だけど私は知ってる、詳しくは前回は読んでね。

容姿 間違いなくモテると思う。まあ紗憐ちゃんがいるけど。

血液型 そんなの私を知っ（以下略）

身長 喜一よりちょっと低いけど十分長身。

性格 適応力が高い。基本温和だけどどっか暗い影があるタイプ。

こんなところかな？さて、次は

何してんだ？んなとこで？

あっ、くろやぎさん

八木だ。勝手に妙なあだ名を付けるな。

ええ。なんかメツチャ手紙食いたそうな顔してるのに

どんな顔だ。ヤギだって好きで紙を食う訳じゃないんだぞ。

そうなの？まあいいや、続いては八木さんについていってみよう

名前 八木銀一郎

容姿 ヤクザ。うん、ヤクザ。

血液型 確かC型。

身長 おっきい

性格 面倒見がいい。礼儀に厳しくてたまに喧嘩っ早い。

ちよつとまって！なんだ今の意味不明な紹介は？血液型がC型ってなんだ？俺は！

あつ、霜敵会で一番暇な若頭だ

あえて無視か！？

八木さん、あんまりがなつちやだめですよ。普段はクールで渋いつて設定なんですから。

……はあ

なんか落ち込んだ八木さんはスルーして進みますか。若く

ん？どした神楽？

黙れ！

いきなり！？

いえ、本編がシリアスなんで発散しとこうと思って

なるほど

ではさっそく。

名前 神無陽差

容姿 男前

血液型 H2O

身長 喜一よりちょっと高い

性格 飄々としてるけどたまにボケる。

なんだコレ？

紹介です。

そうか。俺はあえて突っ込まないぞ

チッ！

舌打ちするなっつての。

まあいいです。じゃあ最後に私こと神楽を紹介します。

自己紹介か？

名前 菱沼神楽

容姿 言葉にできない

血液型 トップシークレット

身長 162センチ

性格 ド・S

ちょっとまって！

まちません！では、しーゆー

episode / 13 作戦会議（前書き）

グダグダレベルが高すぎです。

喫茶店【天体観測】

「えーっと…抹茶ロールが陸弥で苺のタルトとモンブランが鋼斗。火澄くんがエクレアだったね」

喫茶店【天体観測】にて、男たちの注文したケーキを運んできたのは栗山秋月^{くりやま あきつき}。天体観測でパティシエ兼ウェイターをしている男だ。カッターシャツをまくり黒いエプロンをつけている。見た目は色素の薄いブラウンの髪に穏やかそうな柔らかい顔立ちをした青年だ。

陽差たちとは古くからの親友であり、この店が度々たまり場になるのは彼がここで働いているからだ。

今現在、火澄の前には三人の男たちがいる。

一人は比夏陸弥^{ひがしつぐや}。銀灰色の髪を短めに揃え、後ろ髪を少し伸ばして細く縛っている。誇月という料理屋で調理師として働いている青年で非常に目つきが悪いのが特徴。

もう一人は霧島鋼斗^{きりしま こうと}。黒髪短髪の頭に藍色のキャップを被っていて両耳に幾つかピアスが光っている。

もう一人は神無陽差。中途半端な黒髪を整髪料で整えている。いわゆるとしたれた霜敵会若頭だ。

「陽差の注文は？」

「俺は コーヒーシフォン」

「コーヒーシフォンね。わかった」

注文を取ると秋月は厨房へ引っ込んでいった。

「なるほど…。八木の女が妊娠しててお前はそれをなんとかしたいと」

火澄から詳しい話を聞いた陽差は暫し間を開けてから切り出した。

「いつちやなんだが、それはお節介じゃないか？」

「……わかってます」

「それでもなんとかしようとするのか？」

「………はい」

陽差と言葉に火澄はただそう答えた。伏せられたその双眸にはなにかの決意が見えた。

「………わかった。どうせ俺が何かしなくてもお前一人でなんとかしようとするつもりなんだろ？だったら手伝ってやる」

「ホントツスカ！？」

「ああ、どうせこいつらもそのつもりだろ？」

そう言つて陽差は黙つて話を聴いていた陸弥とがつつとモンブランにかぶりついていた鋼斗に視線をあてた。

「………乗りかかった船は乗る主義だ」

「ほおれも（俺も）」

陸弥と鋼斗がそう返す。

「それで、具体的にはどうするんだ？というかその理子って女はこの事わかってるのか？」

「具体的にはまだ決まってるじゃないです。あと理子さんはホントはここに来る予定だったんですけど体調が悪くて…休んでもらいました」「そうか。んで？どうするんだ？」

「それを現在考えてるんですよ。なんかありませんか？」

火澄の言葉にそれぞれ思案顔をつくる。と同時に秋月が陽差の注文したものを運んできた。

「どうしたんだい？みんな黙って」

「いやー…さつき話してたヤクザさんの話なんだけとさ」

「ああ、その話か。どうするか決まったのかい？」

「まだ」

鋼斗と秋月の会話がテーブルを行き交うなか、火澄は黙ってコーヒを睨んでいた。少し冷めた甘いミルク入りのコーヒはゆらゆら水面に波紋を渡すだけで何も映すことはない。

「二人を二人つきりにすればいいんじゃないですか」

「二人つきりって…絶対不自然になるぜ」

「そりゃあそうです。けど、多少不自然になりますけど二人が逢えばなんとかなると思います」

「……………なるのか？」

「たぶん……」

「でもよ、どうやって二人つきりにするんだ？場所とか、八木の都

合とか」

陽差のもっともな質問に火澄はにやっと笑った。

「そこは陽差。まかせます」

「はあ？」

「なんでもいいからそれっぽい理由をでっち上げてください。その流れはなんとか作るんで」

「理由って…」

「そうツスね…。じゃあ飲み会！誇月で飲み会することになって八木さんだけ往かせて俺たちはドタキャンするとか」

「…そんな簡単に出来るか？あいつけっこう勘がいいぞ」

「なんとかします。俺が絶対に」

その漆黒の双眸に決意とも覚悟とも形容しづらい、あえてするからば“やる気”を満たして火澄は言葉を紡いだ。

「　　そうか」

ソレを視た陽差は柔らかく微笑み、コーヒーを一口飲んだ。

「さて、肝心の方法はどうする？」

こうして天体観測での時間は過ぎていった。

「知ってるんですか？俺の弟を！？」

「知ってるっていつか……」

神楽は自身のあからさまな反応を後悔していた。状況がわからない現在、ヘタなことを言うわけにはいかない。だが、今更知らないと白を切ってもあからさまな嘘にしかみえない。

「どうしたもんかね」

小声でしんみりと呟き、神楽は頭の情報総動員させ、どう答えれば最良なのかを考える。

「……彼は……」

そうして導き出した答えを、神楽はゆっくりと紡ぎ出した。この返答が吉とでるか凶とでるのか、それは神楽にもわからなかった。

「おかえりー」

パタパタといつものメイドルックで出迎えたのはやはり神楽だ。

時刻は5時を回ったところか、外はすでに闇が空からおりてきている。

火澄と陽差が喫茶店での作戦会議を終え、途中火澄のケータイにきた喜一からのお使いをすましていたらすっかり遅くなってしまった。

「遅くなりました」

「うん、ホントにね」

火澄が謝ると神楽はにっこり笑ってからかうように冷たい言葉を口にした。無論それには怒りなどはなく、ただの冗談だ。

「さて、こんなところで突っ立ってないで、火澄くんは仕事。若頭はだらけてください。いつものように」

「おー。今日はマジで疲れたからちよっと寝るわ。飯なったら起こしてくれ」

神楽の毒舌をスルーして陽差はサッサと自室へ向かって歩いていった。

「さて、俺も手伝うか」

陽差の後ろ姿を暫く目線で送っていた火澄も、

キッチンからする食卓の香りで1人料理する喜一のことを思い廊下を渡ろうと一步を踏み出した。が、神楽に突然腕をとられて動けなくなった。

「ちよつと待つて」

そう告げた神楽の瞳は真剣そのもので、普段の彼女のモノとは違う重みを醸し出していた。

「はい？」

「あのね…驚いてもいいんだけど…」

「？ なんスか？」

「……あつ…ううん…。やっぱりいいよ。ごめんね」

「？」疑問を浮かべている火澄を置いて神楽は廊下を走っていった。

「どつたんだ？」

神楽の消えていった廊下を疑問顔でぼんやり見つめていた火澄に誰かが声をかけた。

金メツシユの大柄な男。麻橋だった。

「浮かない面してんなあ？」

「いえ…。なんでもないです？」

「いやいや疑問系じゃん」

「……………」

「悩み事なら話してみろよ。俺じゃ話しづらいなら若にでも」

「いえ…。たださっきの神楽さんが気になって」

「神楽が？」

うーん…。と麻橋は暫し考えていたが頭を傾げて諦めた。

「別になんもないと思うぜ？今日だっていつも通りだったしな。」

「ああ、ただそっぴいあ昼間に誰か来てたな」

「誰か？」

「ああ。玄関で話してたから俺は見てねえかな」

「そっぴいあ…」

「どっぴいあしたか？」

「いえ。俺、飯作りにいきますね」

そっぴいあ言っつと火澄は軽く早足で屋敷の台所へ向かっつていっつた。今度は残された麻橋が首を傾げていた。

夕食の後片付けも終わり、本日の仕事が終わった頃。火澄はリビングで普段はあまり使わない携帯電話を片手に甘いココアを飲んでいた。

「はいはい…。わかってるよ紗憐」

「本当ですか？」

「ホントだっつて。飯も食っつてるしちゃんと寝てるよ」

火澄は電話の向こうにいる紗憐の様子を思い浮かべながら苦笑をこぼしていた。

「働かせて貰っつてる所の人もみんないい人だし、大丈夫だよ」

「…それはわかりました。でも…」

口ごもる紗憐の言いたい言葉を察し、火澄は先手を打つように言った。

「大丈夫。たぶん高校にはいけないだろうけど、なんとか生きてけるから……。一年後はどうなってるかはわからないけど、今はなんとかなってるよ」

言葉を紡ぎながら火澄は自嘲する。やはり自分はバカだ、と。こんな言葉では紗憐をますます心配させてしまう。それを解っているが、火澄はウソをつかずにただ事実を告げた。

『火澄くん……。やっぱり……』

「……悪い。もう遅いから切るな？お休み」

紗憐の返事を待たずに火澄は通話を切る。通話画面から某有名猫型ロボットの待ち受け画像へと切り替わったケータイを閉じ、ソファに置いた。

「いいのか？紗憐ちゃんに怒られるぞ？」

ふと声がしてリビングの入口を見ると喜一がいた。手には湯気の昇るコーヒーマグカップを持っていた。

「いつから居たんすか」

「ついさっきだよ」

「……………」

「怒るなって。ごめん」

気さくな笑いを作る喜一は火澄の隣りに座ってコーヒーマグをすすった。

「なあ。答えたくないなら答えなくていいんだけどさ」
「…………？」

「お前の家出って…理由はどうでもいいんだけどさ。ずっとこのままって訳にはいかないだろ？」

バツが悪そうに頭を掻きながら喜一は言葉を選びながら話す。

「どうするんだ？」

喜一の言葉に火澄は沈黙する。

「…わかりません」

やっと絞り出した言葉はどんな響きを持っていたのか…。火澄にはわからなかった。

「そっか…。あつ、悪いな、暗くさせて」

「いえ。…喜一さんに聞いていいツスか？」

「ん？」

「なんで喜一さんはここで働いてるんですか？」

「ガラじゃないって？」

「ん…。まあ…そうツスね」

「はは、そうだなあ…。俺とさ、八木さんって親戚なんだよ」

「親戚？」

そう、と言って言葉を区切り、コーヒーを一口飲んで続けた。

「俺の両親は俺が中学生の時に事故死してな。その葬式で八木さんに会ったんだ。」

俺の母親が八木さんの姉で。八木さん親と不仲で、殆ど勘当されて

たらしいんだけど、俺の親とは仲が良くて、たまに俺んちに遊びに来たりしてたんだ。ただ、八木さんはヤクザの自分が入りするのはあまりよくないと思ってたらしくて俺が中学上がる頃には殆ど来なくなってたんだ。

葬式で再会して、八木さんはいろいろ面倒見てくれてね。俺の父親も親戚がいなくて、母親も八木さんのこともあって親とは疎遠だったらしい。つまり、頼りになる親戚が全然いなかったんだ。

八木さんは俺の学費とか全部出してくれて。あの時はさすがにビビったけどな。普通簡単に出せるモンじゃないぜ？とにかく物凄く世話になってな。

せめて恩返しがしたいって八木さんところに行ったら若頭が此処で働かないかって言ってくれたんだ。」

話が終わる頃には火澄のココアも喜一のコーヒーもすっかり熱が逃げていて、語り終えた喜一は懐かしむように憂いのある笑みを浮かべていた。

「長くなったな。寝るか」

「…はい」

そして眠りにつくころ、火澄はベッドのなかで明日の予定を考えていた。

「まず理子さんに連絡とって…、それから…」

一人考えている内に睡魔がゆっくり手を伸ばし、微睡みの淵へと飲

み込もうとする。そして

「…辰…兄…」

ゆっくりと、深い眠りへ落ちていった。

e p i s o d e / 1 4 過去語り（後書き）

やっと書けました。八木さんと喜一の話。当初からあった設定で、二人の名前が似ているのもこのためです。裏設定だったんで書けないかも、とってたんです、ネタ切れ気味だったんでムリヤリ入れました。計画性皆無ですね、自分！

「八木さん」

某日、八木銀一郎は最近えらく馴染んできた火澄に呼び止められた。

「なんだ」

「今日誇月で飯食いにいくんすけど、先言っってくださいよ」

「自分が？それはなんでまた…」

疑問符を浮かべる八木に火澄はポケットから一枚の紙切れを取り出した。

「これは…」

「限定品の“ふぐ”料理の予約券。ふぐ好きなんでしょ？」

「そうだが…」

「はい。この前陸弥さんから貰ったんですけど一人分しかないから。たまにはどうすか？」

「…いいのか？」

「はい。俺らは後から行くんでゆっくり呑んでください」

「そうか。すまん」

せっかくだし断るのも気が引けるので八木は有り難く券をいただくことにした。

「さて…。どう転ぶかな」

難しい表情を浮かべて火澄は出掛けようとしている八木を見送った。

その日の誇月はそこそこ賑わっていた。

「いらつしゃいませ…おつ、八木さんだ」

誇月についた八木を霧島鋼斗が出迎えた。

「あれ？呑み会はまだじゃないんか？」

「いや。火澄にこれ渡されてな」

「あ、ふぐ券だ。なるほど、じゃ、適当に座つてて」

八木の取り出した券を受け取り、鋼斗は引つ込んでいった。

誇月には座敷席とテーブル席があり、一人で座敷というのもなんだ
と思ひ八木は窓際の二人席に腰掛けた。

その後、女性店員が水とお絞りを持つてきて、料理が来るまでする
こともなく八木は何となく周囲のざわめきや会話を聞いていた。

「スイマセン。相席よろしいでしょうか？」

ぼーっとしていた八木は不意に店員に話し掛けられ我に帰った。

「あ？…ああ、平気だ。(…相手が平気かは知らんがな)」

「ありがとうございます」

一つ礼をして女性店員が下がると暫くしてある女性が八木の座る席
に向かってきた。見覚えのある姿に八木は目を細める。

「……おまえか」

「驚かないんだね」

「驚いている、充分。久しぶりだな理子」

八木は驚いている、と言った。人というのは不思議な生き物だ。感情と表情が一致しない時が多々ある。

彼が再開したのは少し前に別れた昔の女、柳葉理子。なぜ彼女が此処にいるのか、気にはなつたがそれは二の次だ、と思い八木は煙草に火をつける。

「……座れ」

複雑そうな表情を浮かべながらも八木は理子に座るように促した。ふわりと紫煙が僅かに八木の表情を隠す。

「ええ」

ゆっくりと理子は座る。サアツと気流が生まれ紫煙がたなびく。

「久しぶりだな」

「そうね」

そこで先ほどの女性店員が水を運んできて直ぐに消えた。

「…飯食いにきたのか？」

「待ち合わせしてるように見える？」

「いや、だったら相席なんかしねえだろ」

カランと氷が清涼な音をたてる。

「銀一郎は？」

「ちよつとな…。おまえ店辞めたんだってな」

「…ええ。あつ、店に来てくれたんだ」

「まあ…な…」

決まり悪そうに視線を泳がせてキャビンを吹かす八木を見て理子は笑った。八木にとっては久しぶりに見る笑顔は見慣れたあの時の笑顔だった。

「…おまえ…このあとなんかあるか？」

不意に八木が口を開き、理子は首を横にふる。

「そうか。…ちよつとまっつけてくれないか？」

「？」

そうして八木は携帯を取り出した。

「そろそろだな。火澄、電話」

霜敵会にて、男たちは集まっていた。今回の作戦において重要な“呑み会”は2日程前に決まっていた。霜敵会で呑み会をするときは基本全員でバカ騒ぎなため、八木を騙す為には全員が口裏を合わせる必要がある。つまり、霜敵会全員がある意味仕掛け人だ。

今現在、火澄は携帯を持って電話をかけようとしていた。つまりはキャンセルだ。

「おっと…電話だ」

火澄が電話をかけようとした瞬間、陽差のケータイが着信した。

「…！八木からだ」

ディスプレイには【八木銀一郎】と表示されている。

「バレたとか」

神楽が呑気に言う。神楽は1人わさび茶漬をサラサラと食べていた。

「とりあえず出てくださいよ」

「おう…もしもし」

喜一にせつつかれ恐々陽差は電話に出た。

『若頭、すいませんが呑み会欠席しても構いませんか？』

第一声は意外なモノだった。

「えっ？いや、別にいいが…」

バレてない？

『すみません。では…』

簡潔な返答で切れた通話に陽差は目を丸める。

「どうしたんスか？」

若衆の誰かが心配そうに言った。

「いや…。結果オーライ…：…か？」

かくて物語は彼らの予想外に動き始めた。

キーン

シャープな機械音が滑走路に響く。

「あー飛行機は疲れるな」

ガラガラとキャリアバックを引く“ヤのつく職業の男たち”を引き連れてダークグレーの髪の男が疲れたように言った。

「九代目、早く行きましょう」

側近と思しきダークスーツの男が両手に紙袋を大量に抱えながら焦

ったように言った。

「まあまあ、そう焦るな限」

九代目と呼ばれた男はスーツの男の肩をポンと叩き、悪戯な笑顔を見せた。

「呑むぞ!」

『『『やっぱり…』』』

その場にいた男たちは諦めと嘆きを叫んだ。もちろん心の中で、だが

episode / 15 ふぐ、食べたいな… (後書き)

さあ、やっと八木さんが動き始めました。どう転ぶかな？

「それでね……暮らさなかつて……」

昼下がりの誇月にて、理子は頬を朱に染めながら照れ笑いながら昨日の出来事を語る。その表情は幸せに満ちていた。

「マジツスカ！」

「ええ……」

火澄は昨日の報告を聞いて素直に驚いていた。

そんな火澄と隣りには陽差と陸弥。そして理子の隣には八木がいた。

「……………」

八木は面白くなさそうに終始無言かつ仏頂面で、キャビンを黙って吸っていた。

陽差はニヤニヤ笑っているし、陸弥は普段より険が少ないように見える。

昨日、陽差に電話した後、八木は理子をつれて店を出た。2人が向かったのは適当なバーだ。どこでもよかった、というのが理由だった。

八木はカウンター席についてソルティドッグを頼み、おまえは何に

する？と視線で訪ねると理子はアップルティーを頼んだ。

「呑まねえのか？」

「ちよつとね……」

「そうか。　少し変わったな」

「そうかな？銀一郎は？彼女できた？」

「いや……俺みたいなの男には女は寄り付かねえよ」

「そんなことないよ。ヤクザさんってモテるんでしょ」

「さあな。若頭はモテそうだが。俺に寄り付く女は相当悪趣味だな」

口にキャビンをくわえ、そこそこ高そうなジッポで火をつける。

「じゃあ私は悪趣味？」

理子はゆっくりアップルティーを口にして微かに笑う。紫煙がゆっくりと立ち上り、ゆらゆら留まる。

「ああ、かなり重度だ」

男は笑った。自嘲でもなく、楽しそうな、からかったような言葉。

「そう。でも、元気そうで安心したわ」

「当たり前だ。丈夫さが取り柄だからな」

カラン、とグラスの氷を傾けて八木は一口酒をのんだ。

「……おまえは？店を辞めたってことは男でも出来たか？」

知らずに八木の口から言葉がこぼれる。なぜこんな言葉が出て来たのか、自分が不思議だった。

「いないよ。…少しトラブルがあっただけ…」

目を伏せ理子が答える。その言葉に抑揚はない。そして八木は自分がそのことに喜んでいることを自覚していた。我ながら未練がましいと、自嘲を零して

「理子、俺の性格しってるな？」

「もちろん。頑固で嘘がつけない、たまに喧嘩っ早い。でも、他の人の事をちゃんと理解してくれる」

「……………」

「あのね…銀一郎…。ホントは…」

理子が何か言おうとした時、八木が口を開いた。

「俺はおまえに惚れてる。下んねえ別れ方しちまったが、まだ忘れられねえ。女々しいがな…」

真摯な視線が理子を貫く。自嘲混じりの真っ直ぐな言葉

「返事は今じゃなくていい。

だが、俺みたいなお男でよかつたら一緒に暮らさないか」

「やるじゃん八木。おっところ前！」

「……………」

カラカラ笑いながら陽差がバンバンと八木の肩を叩く。

八木は眉間にシワを寄せて無言だ。すでに灰皿には大量の吸い殻があり、たった数十分でコレほど吸えるのかと思えるほどだった。

「でも、ホントよかった」

感慨深げに火澄は言った。煙草の紫煙が鼻につく。

あのプロポーズの後、理子は結局全て打ち明けた。火澄や霜蔵会の暗躍（？）やあのふぐ券の事なども。それでも八木の気持ちは変わらなかった。ただ、この状況はあまり良くはないようだ。

「これで八木さんもパパさんツスね！」

「あゝ？」

火澄が何気なく言った祝福の言葉だったが、それによって状況が一変した。

「何言つてんだ？」

「えっ？だって子供」

「子供！？おい理子！！」

酷く驚いたように八木が行きよい良く隣りに座る理子に向き肩を掴む。

「あっ…言つてなかった…」

そんな言葉が理子の口から零れ落ちた。瞬間、八木の表情が変わる。

「ちよっ……!!八木さ……」

慌てて止めに入ろうとした火澄の腕を陽差が掴む。

「落ち着け。大丈夫、アイツは器のデカイ男だ」

余裕のある笑みを浮かべて陽差は言った。

「おまつ……子供居るのか……!? 俺の」

「う……うん……」

「おまえなあ。んな大事な言い忘れんなよ!? ああ、クソ。煙草は吸い納めだな。とにかく!」

ジユツと煙草を灰皿に押し付けてもみ消し、八木は理子の手を引いて立ち上がる。

「若頭!」

「どした?」

鬼か阿修羅か、とにかく凄い形相の八木の問いを、まっていたように陽差が笑って返す。

「今から抜けます!」

「ああ、じゃ、後でな」

「ハイ!行くぞ理子」

「いつ、行くぞってドコに?」

「決まってんだろ?病院と役所だ!」

その後、辺りをさまよっていた紫煙が渦を巻いて吹き飛ばすほどの速さで八木は理子を連れて誇月を出ていくのを火澄たちは見送った。

「言つたる？アイツはああいう漢だ」

さすがに度肝を抜かれた火澄に、満足げな表情で笑う陽差が語った。もう、アイツらは心配ない。そう、その笑顔は告げていた。

episode / 16 笑顔の結末（後書き）

はい、八木さんと理子さんのお話はやっと終わりました。ホントはもっと細かく書くつもりでしたが自分の文才と話の展開と相談して、読者さまに余韻を感じてもらえるような感じになりました。

「おっ？」

八木たちが旋風のように消えた後、火澄は夕飯の支度のため陽差たちと別れて1人霜蔵会に帰った。

見えてきた広く大きい門は開け放たれ、ちょうど黒塗りの車が入っていくところだった。

「客かな？」

冬の寒空の下、突っ立っているのも辛いので火澄は門が閉まる前に早足で霜蔵会の屋敷へ入った。

玄関には幾人か黒服の男たちがいたがどれも知らない顔で火澄は狼狽した。

「なんだあ坊主。誰だ？」

男のひとりが火澄に向かって言った。

「えっと、此处で住み込みで働かせてもらっている火澄と言う者です」

「住み込み？俺らが居ない間に雇ったのか」

「居ない間？」

「俺たちも霜蔵会の人間だ。九代目の旅行に同行していた」

そう言われて火澄は朧気な記憶を探す。

たしか…香港マフィア…

「お前、此処でゆっくりしてていいのか？」

眉間にシワを寄せて記憶を弄る火澄に別の男が言った。瞬間、火澄は夕飯の献立からレシピ、冷蔵庫の中身まで思い起こし、慌てる。

「麻婆豆腐に水餃子！忘れてた！！すみません、失礼します」

ドタドタドタドタ…

「こんばんは中華か。…香港帰りなのに…」

男たちの虚しい声は駆けていく少年には届いていなかった。

火澄がキッチンに息を切らして入るとそこには喜一と見慣れない男がいた。

「おゝ火澄」

「喜一さん…、と…」

見慣れない男はえらく特徴的だった。髪の毛は剃っており、形のいい頭皮が露わになっている。サングラスで隠れた双眸は伺い知れないが、鼻やほおの配置から整っていることがよく判った。

「ああ、限さん。コイツは火澄。さっき話してた俺らの後輩。んで火澄、この人は限さん」

簡単に紹介されて火澄が軽く会釈すると男も会釈を返した。

「八月一日限ほずみ賀げんがだ。限で構わない」

「火澄です。ほずみつけてけっこう珍しい苗字ツスね」

「よく言われる。漢字で八月一日と書いても誰も読めないからな。皆からは限と呼ばれる」

そう言うってから限賀はお土産らしき紙袋の中身（要冷）を冷蔵庫へ入れ始めた。

「ああ、そういえば火澄。九代目には会ったか？」

夕飯に使うであろう蕪を刻みながら喜一が言った。ざくざくとリスミカルな音が響く。

「まだです。てかどんな人ツスか？前に陽差さんに聞いたらとりあえず凄い人だつて……」

「あつてみるのが一番早い。コーヒー煎れてくように頼まれたから、お前頼むな」

ガバツと挽き肉をボウルにあけながら喜一が言った。

「わかりました。コーヒーはどれにするんスか？」

「インスタントでかなり薄いアメリカン。あの人苦いのダメなんだ」
「だったらコーヒーをブラックにしなければいいのに、と思った火澄だったが口には出さなかった。」

棚を開けてインスタントのビンを取り出し、蓋をあける。しかし既にそれは空だった。

「あ…喜一さん。コーヒー切れてます」

「マジか。じゃあお茶かな」

「……………ココア」

「へ？」

ボソツと呟いた火澄の言葉は喜一には聞こえていなかったらしく、間の抜けた聞き返しが帰ってきた。

「限さん。九代目は甘いもの大丈夫ですか？」

なおもガサガサお土産を冷蔵庫にいれている限賀に火澄は聞いた。すでに火澄の手にはココアの袋が握られている。

「大丈夫だ。むしろ甘党だな」

「甘党か…」

コンコン。ドアを鳴らす音が響く。

数秒後、『お〜』と気の抜けた声がして盆で塞がっている火澄の変わりに限賀がドアを開けた。

「失礼します」

火澄は初めて入る部屋だった。火澄の想像では和室で日本刀や掛け軸の掛かっているイメージだったがそこは全くイメージと真逆だった。木製の家具で統一された落ち着きのある部屋だ。

「お？はじめまして…かな？」

柔らかそうなソファーに腰掛けている部屋の主が気さくに言った。適当に着崩したスーツ姿の男で見た目は三十代後半ほどにみえる。深みのある灰の髪を短めに切りちらしている。なかなか渋めの男だった。

「火澄と言います。あの、コーヒー切れてたんでココアにしたんですけど」

「構わないよ」

そう言った男はバサツと読んでいた新聞をテーブルに置いて差し出されたカップを受け取る。

「ありがとうございます。私は神無愁夜だ。陽差の親父」

「はい。確かに陽差さんに似てますね。（陽差さんがにてるのか）

…じゃあ九代目、失礼します」

気さくな人だな。火澄はそう思った。

礼をして再び九代目を見るとなぜか彼は子供のように口をとがらせて少し怒っていた。

「あの…九代目？なんか俺失礼なこと言いましたか」

自分が失礼なことを言ったのかと冷や汗をかいた火澄に限賀が耳元で小さく囁やく。

「九代目は名前で呼ばれたいんだ」

「へ？」

「十代目を名前で呼んでいるだろ？だからだ」

んな事か…。一気に脱力する火澄の肩をポンと限賀がたたいた。

「えーっと…愁夜さん？」

「おう！」

あれ、なんか前にもこんな感じのがあったような…

火澄が名前で呼んだ途端九代目は表情を一変してにこやかになった。

なるほど…。確かに子供みたいだな…。

陽差の言葉はこういうことだったのかと思い、火澄は凄く納得した。

「おっ、このコリア旨いな」

「ありがとうございます」

「どうだった？九代目は？」

キッチンへ戻った火澄にはほぼ夕食の準備をおえたと思われる喜一がのんびりお茶をすすりながら言った。

「なんていうか…、人は見かけによらないんですね。あつ…でも、もの凄くきさくな人でした」「あはは。確かにな、黙ってれば渋い人なんだけど…」

ずずつと茶をすする。

「そういえば神楽さんは？」

「出掛けたぜ。珍しく私服で。いや、いつものメイド服も自前だったな……」

喜一はコポコポと熱い茶を湯呑みに注いで火澄の前のテーブルに置いた。芳香が火澄の鼻孔を満たしていった。

episode / 17 九代目帰還（後書き）

八月一日。ホズミです。愁夜さんがやっと登場しました。

強い北風の寒さを身に感じ、菱沼神楽は空を見上げた。
その日の空灰色に濁った雲に覆われ、ちらちら雪が舞っている。

「神楽さん」

ふと、声をかけられて神楽は振り向くとそこには月岡紗憐が立っていた。長い黒髪を今日は後ろに流して括っていた。

「すみません、待ちましたか？」

駆け寄ってくる彼女は少し息切れをしていて急いで来たというのがすぐにわかり、神楽は笑顔で返す。

「ううん、今日はごめんね。いきなり呼び出して」

「いえ、じゃあどこか入りましょうか？」

紗憐に言われて2人は雪の街を歩く。クリスマスが過ぎ去り、もう数日で年が明けようとしている。

「此処でいい？」

神楽が指した喫茶店に紗憐も頷き、2人は茶店へ入った。軽く髪や服についた雪をはらい、適当な席に座ると店員がグラスを持ってきて、直ぐに消える。

「紗憐ちゃんは何にする？」

「そうですね…、じゃあ」

数分後、神楽の頼んだミルクティーと紅茶のシフォンケーキ、紗憐の頼んだレモンティーとフルーツトライフルが並べられる。

「神楽さん。お話つて？」

紅茶にレモンスライスを入れながら紗憐が切り出した。

今回の発端は神楽からのメールだ。最初にあつた時にアドレスを交換し、時折連絡をしていた。そして先日、紗憐のケータイに神楽からのメールが届いた。内容は少し聞きたいことがある、というものであった。

「ええ…。火澄くんの事なんだけどね」

神楽の口から火澄の名前が出ると紗憐の表情が僅かに動いたことを、神楽は見逃さなかった。

「彼の…兄弟のこと知ってる？」

おそらく予想していなかった言葉に、紗憐は驚いた。

「お兄さんがいるのは知ってます」

「…そう…。彼の名前は？」

「えーっと…、確か“辰巳”さんだったと思います」

紗憐の口からその名をきいた神楽は深くため息をついていた。

これで確定か…。

「あの…神楽さん？」

何やら思案し始めた神楽に紗憐が不思議そうな表情をつくる。すると神楽はその瞳に凜とした光を宿し、その視線を紗憐に向けた。

「ねえ、紗憐ちゃん」

「……はい」

「これから言うことは誰にも言わないでもらえる？…多分、とても大事なことだと思う」

神楽の射抜くような視線にわずかに視線を逸らすも、直ぐに双眸に強い思いを宿して紗憐は淀みなく言った。

「それは約束できません」

「…なぜ？」

「その話が私の大切な人に関係あるなら…、私はたぶん、自分の判断で行動すると思います。ですから、約束出来ません」

その言葉はあまりに真つ直ぐで、そんな少女に神楽は微笑んだ

男がいたのはほの暗い所だった。安っぽいホテルの一室。カーテンは締め切られており、照明も一つとして灯されていない。唯一光を放っているのは男が操作しているノートパソコンだけだった。

「はいはい、りょーかいッスよ」。相手がヤクザさんなんでちょっと手間取ってるだけッスよ」

ケータイを耳に当てて男が話す。

「わーってるツスよ。息子さんをちゃんと“保護”できるように情報集めてますから。へいへい。では」

通話を切ると男は大きなため息をついて電話をベッドへ放った。

「ふー、過保護つつうか、仕事とはいえエグいなあ」

そう言うと男はパソコンの隣りに束ねてあった、トランプより少し大きいカードの束を手を取った。それはタロットカードと呼ばれる、一般的に占い道具として知られているモノだ。

シャツシャツと手早く束を切ると一枚飛び出していった。男がおりや、とカードを拾い上げる。

「“塔”のカードか…。正位置では悲劇。逆位置では突然のアクシデント…。さて…。それは誰に対してなのかな…」

含みある笑いを浮かべて男は独白した。手にするカードに描かれているのは、落雷を受け、砕け散る高い塔だった

「…崩嶋火澄か。可哀想だけど…ま、仕方ないな。仕事だし」

パチンとキーボードを叩くと画面が切り替わり、どこかの住所や電話番号、はては間取りまで現れた。

「あんま気い進まないけど、サボると剣怒るしなあ」

ポソツとパソコンを閉じて男は立ち上がった。男は黒髪をボリボリとぞんざいに掻いてベッドに投げたケータイを拾い上げると暗い部屋を後にした。男がさった部屋は静寂と闇が佇んでいた

「おし、これで伊達巻き完成だ」

大晦日、霜蔵会の台所では喜一と火澄が調理している。火澄はテーブルに広げられた重箱の数に圧倒されていた。

「にしても、喜一さん何でも作れますね。おせち料理まで手作りとは」

焼き上がった伊達巻きを簾でまき、冷蔵庫へ入れながら火澄が言った。重箱には既に栗金時や黒豆、こぶ巻きや海老などが並べられている。これら全ては喜一の手作りだ。

「まあな。一応以前、陸弥さんから手ほどき受けたことがあるし」
続いて人参を花の形に切りながら喜一が言う。あまりの手際良い包丁さばきに思わず火澄は釘付けになった。

「ま、今はだいたいデパートとかで買うのが多いけどな。もともとおせちつてのは正月に主婦を休ませる為に保存がきく料理をつくったところから始まってから、別に手製じゃなくてもいいんだがな。でも、ヤッパリ手作りに勝るものは無いな、うん」

シヤリシヤリと山芋をすり下ろしながら火澄は喜一のトリビアを聞いていたが、ドタバタと騒がしい屋敷の音であまり聞き取れなかった。

「それでな？今は殆ど年が開けてから食べるが昔は年迎えとして大晦日に…」

「なに無駄知識ベラベラ言ってるのよ」

喜一の饒舌を聞きつけた神楽が無駄知識を遮った。手には掃除道具の代表格である雑巾がくたびれた様子でいた。

「ああ、疲れた」

トス、と疲れたらしい神楽は椅子に腰掛けた。

暮れの大掃除というものを、霜蔵会では2日に渡って行う。というか絶対1日では終わらない。強面の男たちが箒やはたき、雑巾やクイックル イパーをもっていそいそと掃除する姿に火澄はちよつと笑ってしまった。もちろんその後物凄い形相で睨まれたが…

「ああ、そういうえば、火澄くんはどうするの？初詣」

「俺は紗憐、伊織と約束してて、一時前に行く予定です」

「まあ、神社はここら辺は1つしかないからな。俺たちも行くからもしかしたら向こうで会うかもな」

「そうツスね」

「……………」

笑顔で話す火澄を見て、なぜか神楽は複雑な表情を浮かべていた。

「…神楽さん？」

「……………ふう、さてと、仕事仕事」

火澄がその表情に気づくと神楽はすくつと立ち上がり、再び職場へと戻っていった。

「……………」

「なんか、変だな、アイツ」

「喜一さんもそう思いますか？」

「ああ。ちよつと前からな」

「……………」

「愁夜さん、コーヒー持ってきました」

準備も一段落した所で火澄は九代目へコーヒーを淹れてきた。九代目は眼鏡をかけ、パソコンを叩いていた。

「おう、ありがとう」

火澄が来たので愁夜はパソコンを消して眼鏡を外した。

「そつえば、銀一郎の奴が籍をいれたらしいな」

薄いコーヒーを飲みながらノンビリとした調子で愁夜は言った。

「ハイ。よかったです」

その話を聴くと、火澄の胸に暖かい気持ちが行き渡る。自然と笑みを零した火澄を見て愁夜はニヤリと笑った。

「お前がくつつけたんだって？やるじゃないか」

「俺だけじゃないツスよ。陽差さんや陸弥さん、霜蔵会のみんなが協力してくれたんです」

「謙遜するなよ。お前が行動を起こしたからこそその結果だ。ま、陽差は世話好きだし、銀一郎も下の者に慕われているからな。人徳つてやつだな」

満足そうに言うてからコーヒーをすする愁夜は貫禄を感じさせた。

「はあ、問題は陽差だかなあ。彼女が出来ても直ぐ別れるし…顔は俺に似ていいんだが」

「（ツツコムべきか…？）」

「冗談だよ。だが、孫はやはり陽乃に任せたほうがよさそうだ」
「ヒノ？」

「陽差から言われてなかったのか。俺の娘でアイツの姉。俺とは似てもつかぬ美人だぞー」

フフッと笑って言った愁夜。

「今は結婚して出ているがな。正月に帰ると言っていたから時期あえる。楽しみだ」

「限」

「ん？ああ、若頭。どうしました？」

「正月に姉が帰ってくるってのは本当か！？」

「はい。確かに」

「とうことは…あの悪魔も…」

「悪魔って…可愛らしいじゃないですか」

「お前は知らないんだ。あれの恐怖を！」

「……いや、今年は火澄がいる。あの面食いも……」

「……？あの、若頭？」

「イケる！よし、来年こそ！」

「ああ。若頭が珍しくテンパってる」

鐘が鳴る。年の終わりと新年を告げる除夜の鐘が。

霜蔵会にて、バカ騒ぎをする男たちの酒の席をヒョイとくぐり抜けて火澄は屋敷を出た。待ち合わせの寺は徒歩で二十分程。雪も降っていない、夜空に響く鐘の音が蔵かな雰囲気を秘めていた。

寺にたどり着き、火澄は電話をかけた。

寺の長い階段には大勢の列が出来ており、文明の利器である携帯電話というものがなければ合流することは恐らく不可能であろう。平たくいえば物凄く混んでいたという訳だ。

「こつちだ」

電話口の伊織の声に案内され、ようやく火澄は二人と合流できた。二人は小腹が空いたのか、お汁粉（粒あん、白玉）を食べていた。

「ずりいお汁粉」

甘党の火澄が羨まないわけもなく、羨望の視線を向けると伊織が口をひらいた。

「うつせ。お前が待たせるからだろうか」

「スイマセーン伊織さん」

久しく感じる懐かしい雰囲気に火澄はつい顔が緩むのを止められな

かった。

「さあ、行きましようよ二人とも」

ゴーン

ゴーン

多くの人が参拝するなか、彼らもまた賽銭を投げ入れ、今年の願いを思う。

「っし」

参拝を終えた伊織が首を捻る。こきつと軽く骨が鳴った。

「さて、どうする？」

「おみくじでも引く？」

「お汁粉食べたかった……」

紗憐と伊織に引つ張られながら甘い匂いをはなつ鍋をかき回すおばちゃんを見ると、いやでも目立つ男がいた。長身に屈強な体躯、さらには強面のヤクザのような男。八木銀一郎だった。

「八木さん……。来てたんだ」

そのまま視ていると八木の買ったお汁粉を受け取った人たちがいた。

彼らもよく見慣れた人たちだったりしたが遠ざかるにつれ見えなくなっていた。

「いまのは陽差さんたちかな」

「何か言ったか？」

「ああ、何でもないよ。つかいい加減離してくれ」

そんなこんなで列を作っているおみくじ屋に到着し、ジャカジャカとみくじを引く。27番だった。

「どうぞ」

差し出されたおみくじを受け取り混み合う屋台を離れて紙を開く。

「伊織くん、何でしたか？私は中吉です」

「俺は末吉だ。待ち人こないだよ。火澄は？」

「……………大凶」

新年一発目のおみくじで大凶を引き当てるとなかなかへこむ。

「あーへこむー。こんな気分はお汁粉を食べないと晴れねー」

「結局汁粉が食いたいだけじゃねえか！」

「いいじゃん。おまえら食ってたろ！奢れー」

「自分で買え」

そんなやり取りをする二人を紗憐は優しい表情で見ている。

「私が」

それはただの独白に過ぎなく、雑踏と喧騒にかき消される小さな言葉。

「変えてみせる」

それは自分への言葉。揺るがない決意。
ギヤーギヤーじゃれあう二人の少年はそんな少女の思いには気づいていなかった。

「そういやさ」

紗憐が迎いの車を頼む為に電話をかけた後、人混みに疲れ小腹のすいた三人は直ぐ近くのファミレスにきていた。

「おまえ、どこで働いてんだ？」

「は？」

「住み込みつてのは聞いたが、どんな仕事してるか聞いてねえ」

年越しそばならぬ年越えそばをすすりながら伊織が何気なく言った。

「あれ？そういえば私もきてません。神楽さんがメイドの服装ですけど、以前お会いしたお二人は全然違う感じでしたし」

お汁粉で満腹ぎみの紗憐はコーヒーだけを飲んでいる。

「んー……………」
「タメがなげえよ！」

伊織の鋭いツッコミを受ける。

さて、どうするかな。

正直に言うのも考えものだ。ヤクザでバイトしてるなんていったら紗憐に強制的に月岡の屋敷に連行されそうで恐ろしい。だが、これ以上ウソをつきたくないとの心のどこかが訴えてもいる。

「……………秘密」

「却下だ（です）」

「同時に言わなくても……………」

「うるせえ、ちやつちやと吐け」

「そうですよ。カツ井頼みますよ？」

「取り調べかよーんー、家事手伝いみたいなもんかな」

「家事？」

「おう。炊事洗濯買い出しなど」

「ドコで？」

「（やつぱそこに戻るか……………）それは……………」

「あつ、神楽さん」

「えっ？」

紗憐の不意打ちに慌てて振り向くとそこには馴染みの顔が。
。

「神楽さーん」

「あつ、紗憐ちゃん。っと火澄くん」

紗憐に呼ばれて神楽は火澄に気付いた。後ろには喜一がいる。

「おっ、奇遇だな」

へラツと締まりない笑顔で勝手に喜一は火澄の隣に座っていた。

「喜一さん…酔ってますね?」

「ぜんぜんまだまだへいき」

「……………」

絶句とはまさにこのことだ。何時もの喜一とは極端に陽気で妙な笑っている。

「あははははは、金髪だー」

グイッと乗り出して正面の伊織の頭をさしてへらへら喜一は笑う。指さされた伊織は露骨に嫌そうな表情をした。

「ごめんね、コイツ寺で配ってた御神酒で酔っちゃって」

「酔ってません」

「はいはい」

「……………おい。俺だけ展開がわかんねえんだが」

喜一と神楽と面識の無い伊織が不機嫌そうに言った。目の前でへらへらしている酔っ払いにムカついているのだろう。

「えと、この人たちは俺のバイトの先輩。神楽さんと喜一さん」

「よろしくね」

「九条伊織……………です。」

「タンポポー」

「おい火澄。この酔っ払い殴っていいか?」

「あはははー、ひよこクラブ」
「えっと、勘弁して。いつもはいい人だから」
「金髪」
「……………あなたは茶髪じゃねえか」
「おれのは地毛だよ〜、天然〜。あんた人工金髪」
「ああ腹立つ！」
「落ち着けー！！」
「あはははー」

「まったく、なにじゃれてんだか」
「ふふ」
「紗憐ちゃん。この間ありがとう」
「いいえ」
「ねえ？」
「はい？」
「火澄くんのドコに惚れたの？」
「なっ？……………」
「（あらあら、顔真っ赤）クスクス」
「神楽さん！」
「ごめんごめん」

「ぐっ」
「寝るな！」
「伊織落ち着けて、とりあえず静かになっただし」
「あー腹立つな」
「寝ちやったの？」
「神楽さん」
「まったく。埋めちゃう？」

「いいなソレ」

「乗るな伊織！とにかく、帰りますか」

「そうですね、迎えも来ましたし、送ってきます」

「えっ？（それは困る）」

「ホント〜。助かるわ」

「ちよつ、神楽さん！」

「大丈夫ですよ。霜蔵会まで送ってきますから」

「いやそうじゃなくて……………
つて？」

「知ってるつての、おまえがヤクザの屋敷で働いてるってこと」

「はあああ？なんで！」

「あれ、私が言ったんだよ、紗憐ちゃんとメル友だし」

「メル友！？てかそれならなんで」

「嫌がらせ。お前自分から言わなかったし」

「……………」

「さて、この酔っ払い運ばないと」

「まかせた火澄」

「（こいつら…）」

こうして年は明け、親友に担がれた火澄は酔っ払いをかついでファミレスを出た。自然と溜め息が零れたことに、本人は気づいていなかった。

episode / 20 大凶つてへこむ（後書き）

やたら会話ばかりになりました。喜一さんは酒にむちゃくちゃ弱い
です。誇月で宴会すると最初に潰れます。でも二日酔いはしない不
思議な人です。因みに陽差は親友らと、八木さんは奥様（新妻）と
来てました。

番外編その2 除夜の鐘が響く頃

「さむっ」

八木理子（旧姓柳葉）は体を寒さで震わせる。現在時刻は午後11：52分。後数分で今年が終わる。

「サム？誰だそりゃあ」

隣りで旦那さんこと八木銀一郎が素でボケる。理子は思わず吹き出してしまった。

「なんだよ」

「ううん、なんでもない……プッ」

「笑ってんじゃねえか！」

ゴーン

ゴーン

空高く響く除夜の鐘。

「もう年明けるな……」

人の列を眺めながら銀一郎がポツリと言った。今二人は拝殿から少し離れたベンチに座っている。理子の体調を考えてのことだろう。

あまり混雑の中に置きたくないと、男は思っていた。

「ええ…。今年はいろいろあったね…」

「……………ああ」

「来年もよろしくお願いします。お父さん」

「…俺が親父か……。考えても見なかった。これも……。あいつのおかげか…」

そうやって男は缶コーヒーを一口飲んだ。

「あいつって…火澄くん？」

「ああ。……あいつが居なかったら…俺はお前とこうやって一緒にいることもできなかった。感謝している」

「そうだね…。私も、この子も…火澄くんが救ってくれた」

「変わった奴だ。最初会ったときは馬鹿みたいに暗い眼してて、自分のことに無頓着だったくせに。」

「火澄くんってまだ学生でしょ？なんで霜敵会に居るの？どうみても筋者には見えないけど」

「アイツは家出てきたんだ。理由は言わねえし、若頭も聞かねえから知らねえがな。だが…もしその理由が…」

「銀一郎？」

「……………なんでもねえ」

「……………あつ！」

思いだしたように腕時計を確認する理子。

「どうした？」

「年明けまでもう30秒」

「そうか。……………理子」

「なに？」

「……俺で……いいんだな？」

深く真剣な眼差しで男は己の妻を見つめる。鋭い目つきからは想像も出来ない優しい視線。それを見つめ返して女は答えた。

「……ええ」

ただそれだけを返し、女は微笑む。そんな彼女を男は抱き寄せ、新たな年を迎えた

「来年はこの子も一緒ね」

「ああ」

「銀一郎」

「なんだ？」

「幸せにしてね」

「当たり前だ」

番外編その2 除夜の鐘が響く頃（後書き）

彼らはいい夫婦になりそうです。てか見てて腹立つ。いちやつくな
コラ！！

「あけましておめでとございます」

正月。新年の挨拶を交わす日。

「おう。あけましておめでと」

のんびりとお茶を啜りながら陽差が答えた。正月らしく紋付き袴を着ている。

「あゝ、めんどくせえ」

「何がですか？」

「あー、挨拶かな。一応ここが元締めっぽいもんだから、傘下の組長が挨拶にくんだよ」

「へー。あ、そういうえば陽差さんのお姉さんが来るんスよね？どんな人なんスか？」

「姉貴は普通の人だよ。ちょっとぼんやりしてて天然入ってるけどな。……問題は……」

何かイヤなことを思い出したのか、陽差は言葉を濁し遠い目をしていた。

「？」

「……とにかく、アイツには気をつける」

「アイツ？」

「……譲原千尋だ」

思い表情で言った名前。大の男が頭を抱えるほどの出来事とは果たしてなんなのか、できれば火澄は知りたくなかった。巻き込まれそうで…。

「ただいまー」

玄関に女性の声が響き渡る。それを聞きつけた八月一日が迎えにくくと着物姿の女性と少女が立っていた。

「あけましておめでとございます。限賀さん」

八月一日の姿を見ると女性はゆっくり微笑んだ。艶やかな朱色の着物で黒髪を結い上げている。

「あけましておめでとございます、お嬢」

「あ、いーなーひのさん。お嬢だって。カツコイい！」

ピツと居直り礼をする八月一日を見て少女が無邪気に言った。こちらら薄桃色の振袖で彼女と同じく髪を結い上げている。パツチリとした瞳が印象的な美少女だ。化粧もしているのか、唇は艶のある薄紅、頬もシミ一つない白。

「ではどうぞ、九代目もお待ちです」

「来たか、待ってたぞ」

陽差と同じく袴姿の愁夜が満面の笑顔をみせる。笑えば笑うほど若く見えるから不思議だ。

「千尋も来たか」

「うん！愁夜くんも元気だった？」

「もちろんだ。ほら、お年玉」

「ありがとう」

ほのぼのとした微笑ましいやり取りをつかず離れずの距離で見ているのは霜蔵会若頭。上手く八月一日の影に隠れて存在感を抹消していた。

「ひの、倭はこなかったのか？」

「ええ、本当は来る予定だったんだけど、ついさっき病院に呼び出されて」

「そうか、残念だな」

その会話を聞いて火澄は疑問を陽差に聞いた。陽差はなるべく目立ちたくないようで小声にしろ、と焦っている。

「倭さんって？」

「姉貴の旦那だ。医者やってる」

「あの女の子は？」

「譲原千尋、倭さんの歳の離れた妹で姉貴たちと暮らしてる」

ひそひそ囁いていると不意に愁夜が声をあげた。

「ああ、そうだ。火澄ー、ちよいと来い」

ちよいちよいと愁夜に手招きされて火澄は向かう。

「お年玉、去年はお疲れさん」

「えっ？いいんスか？」

差し出された某猫型ロボットのイラストが描かれたお年玉袋をしげしげと眺める。

「……………！！」

偉く厚みがあるな、とチラッと中を覗いた火澄は絶句した。中には諭吉さんがじゅう…

「こんなに貰えないです！」

「却下。子供は遠慮しちゃだめだぞ、うん」

「そついう問題じゃ…」

「まあまあ、火澄受け取っとけよ」

耳元で喜一が囁いた。

「……………わかりました。あの…ありがとうございます！」
「おう！」

機嫌良さそうにクシャツと笑い、愁夜は火澄と千尋の頭をがしがし撫でた。千尋が、せっかく結つたのに、と抗議したのですぐ止めた

が

「さ、新年恒例の餅つきだ。野郎ども、準備しろ！」

愁夜の号令に男たちは低く返した。

「ねえねえ」

ふと、少女が火澄に話しかけてきた。リン、とカンザシの鈴が響く。

「ん？なんだい」

「お兄さん名前はなんていうの？」

「俺は火澄。ここで働かせて貰ってるんだ」

「でも火澄くんまだがくせいでしょう？」

思いついた疑問を素直に聴く少女に火澄は複雑な念が胸中に広がるのを感じたが笑顔をみせる。言葉はなかった。ただ、笑った。

「さて、じゃあ千尋ちゃん。君は何をするの？」

「あのね、陽差さんと喜一と神楽ちゃんと遊ぶの。去年はカルタだったから、今年は羽子板するの」

そう言つて千尋は今まさに抜け出そうとしていた陽差ににっこりと笑顔を向ける。見つかった陽差は露骨に顔を青ざめていた。

「そっか」

（喜一さんは呼び捨てなんだ…）

優しく笑つた火澄を見て、千尋は少し迷つたようにキョロキョロ目線を泳がせてから言った。

「火澄くんもやるつよ」

「俺は」

やんわり断ろうとした火澄は肩にのし掛かる重みに言葉を逃がした。その正体はどこか黒い笑みを浮かべた陽差だった。

「やるよな？」

「（怖っ！目がヤクザだ！）…いや、でも餅つきするなら黄粉とか納豆とか小豆とか醤油とか用意しないと」

「おまえ段々主婦みたいになっくな…。大丈夫、姉貴がやるだろ。さ、いくぞ」

「ちよっ……あああ…」

結局火澄はズルズルと首もとを掴まれて陽差に強制的に運ばれていた。

「はあ、今年もこの時期が来てしまった…」

そう嘆くのは佐島喜一。その手には羽子板。場所は屋敷の縁側。ここから見える庭では男たちが臼やら杵やらを持って餅つきの準備を行っていた。

「きいち、早く早く」

庭から羽子板と羽を手にした千尋が言った。

「へいへい、あー」

じゃり、と靴底がこすれた音を立てる。

「チームはどうする？」

「んーと、じゃああたしと火澄くんて組むー！」

そう言つて千尋は火澄にくつついた。

「落としたら罰として墨ね 神楽ちゃん宜しく〜」

千尋が元気よく、ハイテンションで言つとシヤリシヤリと墨をすつていた神楽が筆を高々と掲げた。

「くっ！ 毎度毎度楽な役とりやがって…！」

「言つな言ー。勝てばいいんだ、勝てば！」

男たちの嘆きはまだまだ続く。

「じゃあいくよ〜」

千尋が構える。瞬間、その可愛らしい顔に真剣さを宿らせ、双眸に鋭い光を輝かせる。

カアアアン！

放たれた羽は鋭く空気を裂いて弾丸のように飛び出した。羽は喜一の右頬を掠め、すぐ後ろにあった松ノ木に突き刺さった。

「なっ……」

は、反応すら出来なかった…。今のが小学4年生の放った羽の威力か!?

呆然とした喜一の表情がそう語っている。

「きいちのミス、神楽ちゃん宜しく!」

「はいはい」

たっぷりと墨を含んだ筆が喜一の頬をなぞる。

「きゃはははは!」

無邪気に喜ぶ千尋を尻目に喜一は木から羽を引き抜いた。

「くっ、ならば…」

カアアン

喜一の放った羽は弧を描いて火澄の頭上へ。

「狙いを俺に絞る気が…ならば」

カアアアン

火澄の打ち返した羽は陽差の所へ。

「甘い!」

カアアアン

野球の振り子打法を彷彿とさせるフォームで陽差はそれを返す。羽は再び火澄へ向かって飛んでいく。火澄がそれを返そうと構えたがその火澄の視界を着物が遮る。

「いつけえ！ひぐま返し！」

カアアアン

割り込んできた千尋の打ち返した羽は陽差の直ぐそばの地面にめり込んだ。

「まだまだだね」

「くっ、技名がなんか混ざってるし決め台詞も違うキャラじゃねえか。テニリに怒られる」

そうこうする内に神楽により陽差の顔に墨がぬられる。

「さ、まだまだ始まったばかりだよ」

そう微笑む少女は清々しい黒い気配を纏っていた。そして

カアアアン

死合は開始された。

episode / 21 お年玉に諭吉が (後書き)

千尋ちゃん。属性は神楽さんと似てますが、この子はかなりのドメスティックでバイオレンスな性格をしています。でも優しい子ですよ。うん。ちなみに面食い。

霜敵会若頭は小料理屋誇月に来た。手土産に酒を抱えて。

「おまえか」

誇月に入るなり、掃除をしていた料理人、比夏陸弥に難しい顔を言われた。

「今日休みなのか？」

表には臨時休業とかかれた貼り紙があり、店員が一人もいないとなるとそうなのだろう。

「ああ。店長が熱だした。」

「あらら…。せっかく颯時さんが好きな霜月持ってきたのに」

タプンと水音のする一升瓶を掲げる陽差に陸弥が顎で椅子を差した。座れという合図だ。

「そっぴや鋼斗辞めたんだろ？」

カウンターに座り、調理場でアテを用意する陸弥に言った。

「ああ…。もともと冬休みの間だけだったからな」

「保育園ね。俺らの出身のトコだろ？」

「…ああ。こっちは人手が足りなくて困ってるんだがな…」

ゴトツと音をたてて数々のじゃがいも料理が置かれる。

「肉じゃがにジャーマンポテトにコロッケ？ジャガイモばっかじゃん」

「姉から送られてきた。食いきれん量だ」

「なるほど…おっつめ」

「……陽差」

「ん？」

「顔になにつけてる」

「なっ！？」

慌てて鏡を借りて自分の顔を見ると、左頬にうつすらと『マーカーが残っていた。

「まだ残ってやがった」

「なんだ…それ」

「昨日来た小学四年生の悪魔に負けた代償だ」

「……？」

溢れかえる墨の惨劇。あの後、顔だけでは飽きたらず腕や腹にまで（無理やり）描かれてしまった。その時のサディスティックでバイオレンスな行為を恍惚な表情で行う千尋と神楽は並みのホラー映画より恐ろしかった。

「思い出したくもない…」

「食い過ぎた……」

誇月からの帰り道。もともと飲む気で来たので徒歩だった陽差はゆつくり歩いていた。

「そこのお兄さん」

ふと、聞いたことのある声で呼び止められた。

「あんたは……」

振り返ると奴がいた。サングラスを付け、黒いダウンジャケットをきている。見るからに怪しい男だ。

「お久しぶりッスねー」

「……確か夜霧だったか？」

「覚えててくれたんだー。霜敵会若頭さん」

口元を笑わせ男は手にしたタロットカードをシャッフルする。机や椅子はなく、壁にもたれていた。

「とりあえず、八木銀一郎さん結婚おめでとつ。奥さん美人だねえ」

「……」

「あれ、驚かない？」

「驚いていても表情に出さないことくらいできる」

「なるほど。さすが十代目」

関心したようにわざとらしく頷く占い師に陽差はますます敵しい表情をつくる。

「……おまえ何者だ。前は見逃したが、おまえが俺達をかぎまわっているなら……」

その双眸に鋭く冷たい光を滲ませ陽差が凄む。普段からは想像もつかなあ底冷えする声。だが、占い師の態度は変わらない。

「そんな怖い顔しないでくれよ。おっかないな。せつかく面白い事教えてやろうと思ったのに」

「……………」

「崩嶋って名前知ってる？ヤクザのキミならよく知ってるんじゃない？」

「……聞いたことがある。確か弁護士。やり手らしいってのは聞いたことあるが」

陽差は話聞いたことがあった。裏で手を回して刑を軽くしたり、逆に陥れたりする最悪の弁護士。もちろん、それは裏からの情報で一般からはやり手の弁護士だとしか知られていない。これは陽差だからこそ解る情報だ。

「そうそう」

「それが何だ？」

「崩嶋火澄」

「！」

「君の所で働いている彼の本名だよ」

相変わらずパラパラとカードを弄びながら占い師は続ける。

「崩嶋火澄。数ヶ月まえに家出してこの街でキミに拾われバイトとして雇われた。間違いないっしょ？」

「……………」

「さて、疑わしい感バツチリの俺が言っても信用なさそうだから、帰って本人に聞いてみなよ？」

嘲るでも見下すでもなく、ただ飄々と笑う男に陽差は鋭い眼光を向ける。

「おまえ…何だ…」

「……………さあな」

そして占い師は歩き出した。振り向かず、急がず、ただテクテクと陽差とは逆の道を。

「……………ん？」

黙って占い師を見送った陽差は地面に落ちているソレに気づき、拾い上げた。使い込まれて少しかすれたカード。鎌を構えた黒衣を纏う者。

「……………死神……………」

同時刻、馴染みのスーパ―。

「あー、焼き鳥かな、今日」

火澄は今晚の夕食のおかずを吟味しつつ買い物をしていた。

「それがおでんとか…。大根はあったな」

買い物しながら冷蔵庫の中身を瞬時に思い出せるほど、少年は今の生活に慣れていた。そのことにふと気づき、少年は笑いが零れることを自覚していた。

「朝飯用に卵も買わねえと。1日で二パックだからなあ」

よく食べる男たちを想像し、少年は笑った。

『7759円になります』

最近顔なじみになりつつあるレジ打ちのパートのオバチャンの所で会計してスーパーを出る。外は僅かに雪がちらついていた。

「そついや、少し前のパラパラ殺人事件って解決したのかな」

いつか神楽の言っていた聞き込みの刑事。結局火澄は遭うことはなかった。

「…ん？」

何時もの帰り道を急いでいると目の前に見慣れた人物が通りかかった。

「陽差さん」

火澄が声をかけると陽差はどこか浮かない表情で振り返った。

「火澄か…。買い出しか？」

「はい。……？どうしました？なんかありました？」

自分を見て妙に曖昧な笑顔をする陽差。

「いや、何でもない。今日の晩飯は？コロッケ以外なら大歓迎だ」
「コロッケ？」

他愛ない話をしているうちに陽差の表情は和らいでいった。やがて霜敵会の屋敷が見えてきた。

「火澄ー」

ふと、自分と呼ぶ声がして火澄は隣りをみる。

「俺じゃないぞ」

「え……………」

陽差さんじゃない？

「火澄ー」

更に近付いてくる声。どうやら背後からのようだ。

「火澄、後ろからもの凄い速さで走ってくる男がいたが…」
「見ちゃだめです。陽差さん、コレ」

全身から緊張感を発し、陽差に買い物袋を押し付ける。

「え？買い物袋？」

「すみません！逃げます！！！」

そう言う前に火澄は走り出していた。

「ちよっ…火澄！？」

全速力で吹っ飛んでいった火澄に呆気にとられた陽差だったが、そこに更に理解不能な光景が

「火澄ー！待てー！！！」

逃げる火澄を追うように陽差の直ぐ脇を粉塵を巻き上げて走る抜ける背広の男。

「なんだ？」

呆然と見ていると100メートル地点で捕まった火澄と捕まえた男がいた。暴れている火澄だったが男は頑として放さない。

「放せつてんだろ！」

「放すか！放したら絶対逃げるだろ？」

「五月蠅いハゲ！」

「ハゲてないっ！！まだ27だし！！！」

ズルズル引きずられるように運ばれる火澄と満面の笑顔の男。

「あー…火澄…展開について行けないんだが…誰だ？その人？」

拉致があかないと思い、激しく取っ組み合いをしている火澄と背広の男の所呆然とした表情で陽差は歩いていった。

「……………えーっと……………知りません」

「なにいつてるんだよ。兄貴に向かつて」

目を泳がせて言った火澄の言葉をすかさず背広の男が打ち消した。背広の男は火澄の肩に手を回し、火澄が逃げられないように押さえつけていた

episode / 22 再会×2 (後書き)

ここからだんだんシリアスになっていきます。

あらずじ。謎の男が火澄少年を捕獲！

「心配したぞ火澄！家出するなんて」

「兄貴：とりあえず放してくれ。逃げないから」

「とかいってこの前放してたら後頭部に回し蹴りいれてきたじゃないか。死にかけたぞ」

「小学生の頃の話じゃねえか！」

以後このやり取りが数分続いたが、やがて男は妥協したのか、しぶしぶ放した。その間、陽差は啞然としてそのやり取りを見ていた。

「……火澄：この人は？」

「……俺の兄です」

「火澄の兄の崩嶋辰巳です。火澄がお世話に……なってるのか火澄？」

「なってるよ！ってか服掴むな」

「いや〜心配で〜」

「二秒以内に放さないと酒につけてから屋根に吊して干し柿にするやる」

そつすごまれ慌てて男は火澄の服から手を放した。

「怖いな」。あ、すみませんなんか放置しちゃって」

「……いや……」

「陽差さん引いてるし……えっと、この人は神無陽差さん」

げんなりした顔で一応といわんばかりに紹介する火澄だった。

「弟がお世話になって。ありがとうございます神無さん」

「あ…ああ、こちらこそ？」

「ご迷惑をお掛けしましたでしょう。じゃ、帰るぞ火澄」

「はっ？」

さも当然のように火澄の肩を掴み、にこやかに言った兄に弟は思わず口をあける。

「いや、帰るぞって」

「なっっ！帰んねえよ」

「駄々こねるな、兄貴心配で心配で、仕事時間使って捜してたんだぞ」

「いや仕事しろよ税金泥棒！」

「はいはい、あ、後日礼に伺いますんで」

「え？あ…ああ」

「陽差さん！何流されてるんスか！」

「愚痴は後で兄貴が聞くから、ほら、帰ろっ？」

「引っ張るな！！」

いい加減にしろってんだ……ろ！」

肩を掴む兄の腹に、火澄は手加減無しで渾身の肘打ちを叩き込む。ドンツと鈍い音がして兄の体が吹っ飛んだ。

「うわ…痛そう」

その痛みを想像し陽差は顔をしかめる。が、火澄はギリギリと兄から離れるように後退していた。

「甘いな火澄…刑事がこんなんでも？」

ゆらりと、少し不気味な動作で立ち上がり、不適に笑う兄。

「陽差さん」

「ん？」

「ドスとか持ってません？息の根止めます」

「いやいやいや、その顔で言うの止めてくれ恐いから！」

陽差が思わず青くなるほど、少年の眼は真剣だった。

「火澄ー、帰ろうよー」

「……………」

「帰りずらいなら俺も一緒に謝るから、な？親父と母さんだって心配し……………」

「帰らないよ！！　　帰れないよ……………」

不意に声の質が暗く、悲しくなったのに気づき、ハッと兄は弟の表情を見る。悲しいようで、何かに畏れているような、曇った表情。

「……………帰れないんだ……………」

「……………火澄？…おまえ……………家で何かあったのか？」

これほど真剣で、悲しい表情をした弟を、兄は見たことがなかった。だから、急に怖くなった。なぜ彼がこんな表情をしているのか

「……………」

「ひず……………」

「立ち話もなんだ」

不意に、陽差が辰巳を制止した。

「中に入ろう。風邪引いちまう」

グイツと親指で門を差し、陽差は言った。辰巳が目を丸くしたのは言うまでもなかった

客室に通され、辰巳は流石に緊張した。この部屋へ来るまでの廊下でスキンヘッドのサングラスをかけた男といかにもという感じの大柄な男とすれ違ったからだ。

「火澄…おまえ此処で働いてるのか…」

「……………ああ」

「マジかよ……………兄貴ビツクリだ」

「……………」

「火澄？」

「……………」

火澄はここへ入ってからずっとだんまりしている。眼を伏せて、ジツとテーブルを見つめていた。実際は何も見えていないのだろう。

「茶入ったぞ」

暫くして、陽差が熱いお茶を乗せた盆を持ってきた。

「さて、火澄。聴かせてくれ、お前の家出の理由」

茶を配りおえ、向かいの席にボスンと座ると陽差は有無を言わせない口調で言った。

「………言わないとダメですか」

「言わなくてもいい。但し、ただのガキの下らない家出だと判断し、おまえの家まで配達する。クロネコ マトで。」

けど、そうじゃないだろ？おまえはそんなバカじゃない」

暖かさと鋭さを兼ね備えた光を両の眼に宿らせ陽差は言う。

「…俺は………」

膝の上で握り締めた拳を爪が食い込むほどさらに強く握り、決意をたぎらせるように膝を殴ってから伏せていた双眸を上げた。

「俺は…殺され…かけました………」

引き絞るように弱々しい少年の言葉に二人はまるきり別の反応をとっていた。

「火澄…冗談…だろ？」

兄は信じられないとばかりに首を振る。弟は何も答えなかった。それは無言の肯定。

「…おまえの体の傷は………」

「はい………」

冷静に言った陽差に火澄も重く返した。響きには何の力も無い。

「体の傷？」

「……………これだよ」

そう言い捨てて少年は服を脱ぎだした。借り物のパーカーを脱ぎ、ロングTシャツを乱暴に取り払う。露わになった少年の躰。

「……………」

それを見て辰巳は口を押さえて絶句した。

赤い、焼け爛れた醜い点が少年の上半身に幾つも打たれ、腹部には切れ味の悪い刃物で切られたような、ギザギザで歪な傷の後。完治していてもうつすらと見える黒ずんだ青あざは腹から胸、背中まで際限なく遺っている。

「……………今は…大体治ったから痛みはないよ……………」

そう呟く少年はあまりに悲しい色で世界を染め上げていた。

「これ…親父たちが……………」

「……………そう…だよ」

「……………火澄……………」

呆然と傷だらけの躰を見る兄に弟は事実だけを伝えた。抑揚も感情も一切含まれない、ある種の吹っ切れたような声だった。

「もう服着ろ。…それからその三人…入れ」

「えっ……………!!」

火澄は目を見開いた。決まり悪そうな苦笑を浮かべて、喜一、神樂、八木が客室へ入ってきたからだった

episode / 24 走り出す(前書き)

ちょっと短めです。鋼斗が活躍していきます。

episode / 24 走り出す

「……………訊いてたんすか……………」

火澄が怒りを抑えた言葉を三人に向ける。その顔を、苦痛と嫌悪に歪ませ、それでも必死で感情を抑えている。

「火澄……………」

誰かが少年の名前を、ポツリと呼んだ。直後、火澄は出口へ向かって走りだす。出口にたつ三人を押しつけて…。

刹那、少年の横顔を見た八木は走り去る少年の背に向かって叫んだ。

「……………」

その言葉は、走り去る少年には届くことはなかった。

無我夢中で部屋を飛び出した火澄は何も持たずに外へ出た。感情が優先し、思考が追いつかない。寒空の下、薄いロングTシャツ一枚ではあまりに寒いのだが、構わず少年は走った。

訊かれた事は、少年にとって苦しくて痛くて恥ずかしくて怖くて…。

とにかく走りつづけた。霜敵会から離れるように、止まらず、嘔き

出す汗も苦しくなる息も、何もかも無視して走った。

知られたくなかった。本当なら絶対に言いたくなかった。知られてしまったら、絶対に変わってしまう。同情、哀れみ、侮蔑。それが火澄が最も怖れる事だから。もし知られるなら、陽差と兄のように、自分から話したかった。あんな形ではなく…。

「ッハ……」

息が保たなくなり、そこでようやく火澄は止まる。来たことのない、あまり人気の無い場所だ。火澄は扉に背を預け、アスファルトに座りこんだ。

座ったことで流れた汗が冷え、一気に熱が消えていく。ロングTシャツではとても寒く、体を抱えて震えた。

泣きたくなる気分だ。火澄は笑った。浅はかな自分の行動に…。

「……ばーか……」

それは誰に向かったの言葉なのか……。

「なにしてるの？お兄ちゃん」

幼い声が自分に向かったの言葉だと気づき、火澄は顔を上げる。

まだまだ幼い、男の子がそこに居た。だいぶくたびれたサッカーボールを抱えて、黒の双眸を火澄に向けている。

「……………」

火澄は何も答えなかった。ただ、弱々しく笑っただけだ。

「げんきないの？……そだ！こーと兄ちゃん呼んでくるね」

そう言うと男の子は駆けていった。タツタツタ…、男の子の足音が遠くなり、火澄は再び頭を垂れた。

どれくらい、そうして居ただろう。ほんの十分程度かもしれないが、火澄には何時間にも感じられた。やがて、足音が近付いてきた。

「おーい、生きてっかー？」

「……………」

「返事なし…か。……ん？」

男の声が頭上で響く。どこかで聴いたことあるな、とぼんやり考えていた。

「……………おまえ」

男の声が不意にとまり、火澄は頭を軽く叩かれた。ポンポンと、優しく。

「火澄だな？」

「……………」

自分の名前を呼ばれ、火澄は無言で顔をほんのすこしだけ上げた。頭には白地に黒のロゴが入ったバンダナを巻き、両耳には幾つかのピアス。不思議そうに黒の双眸で自身を見つめる男に、火澄は面識があった。

「……………鋼斗さん」

「ほら、着替え。んな薄着だと風邪ひくぜ？おまえ背え高いからちつちやいかもしれんけど」

ぼふつと火澄の頭にシャツとトレーナーを降らせた鋼斗が言う。手にはスプーンとインスタントコーヒーがあり、並べたカップの前に立っていた。

「すみません…」

鋼斗が向こうを向いている隙に素早く着替えた火澄が申し訳なさそうに子供を濁した。

今火澄がいるのは、あの近くにある、児童施設の職員室だ。さして大きい訳ではないが、暖房はよく利いているので震えは収まった。

「鋼斗さん…、ここは？」

「風の家っていう…孤児院だ」

「孤児院…」

そうだと言ってから火澄にカップを渡す鋼斗の表情はどことなく憂いを帯びていた。

「じゃああの男の子も」

「真直か…」

そこで会話は途切れた。職員室に女性が入ってきたからだった。

「あら？鋼斗くん、この子は？」

バンドナを巻いた長身の女性だ。化粧はしていないようだが垢抜けた顔で愛嬌のある表情をしている。

「俺の知り合い。火澄っていうんだ」

「そう、私は唐沢燈^{あかり}。ここの職員です」

にこつと彼女は笑う。とても好感が持てる笑顔だった。

「…火澄です。お邪魔してます」

火澄は頭を下げる。

「ところで火澄、なんであんなところに居たんだ？仕事は？」

「……………」

鋼斗は当たり前の疑問を口にしたが、火澄の表情が一瞬で曇ったのを見て目を丸くした。

（あれもしかしなくても俺地雷踏んだ？）

「……………」

ああ、まただ……。俺…、迷惑かけてる…。本当に…馬鹿だな。そう心で思い、火澄は自嘲をこぼしていた。

「火澄にいちゃーん」

真直が火澄に抱きつく。

まだまだ小さい真直は、それなりに長身の火澄の腰にも満たない身長だ。

「サッカーしようサッカー！」

わんぱくで活発な真直はサッカーが好きだ。

「えー、心臓爆発かくれんぼがいいー」

そこにすかさず女の子が反論する。

歳は真直より少し上くらいか、大きめのセーターとジーンズの女の子だ。

(……どんなかくれんぼなんだ)

豪快な名前のかくれんぼを一瞬想像した火澄だった。

孤児院“風の家”。

職員は三人しかいない、小さな施設だ。

火澄は昨日から此処で働かせてもらっている。

それは昨日、火澄の様子が変だと察した鋼斗の申し出だった。条件は炊事と子供たちの遊び相手。報酬は空き部屋と食事だ。

「買い出しってきます」

院長から渡された財布を手に火澄は買い出しのため、よく往くス

ーパーに向かう。

院長は五十代半ばの優しそうな白髪の女性で火澄が臨時バイトに入るのを快く許可した、懐の広い人物だ。

「きょうのめしはなに？」

火澄の後を真直がついていく。

この子はすぐに火澄に懐いた。明るく人懐っこい男の子だ。

「んー…、肉の値段しだいだなあ」

孤児院といえど小さな施設、食費はなるべく減らしたい。

「真直はなにが好き？」

冬の晴れ空を見上げながら火澄が訊く。

「まーぼー豆腐！」

にははは、と真直は笑顔で答える。

「……………」

「？ どしたの火澄にいちゃん」

「いや…、こういう弟がいたらなーって…」

くしゃくしゃっと真直の髪を撫でて火澄が笑った。

さあ、スーパーも見えてきた。

「おっ、挽き肉安い」

精肉コーナーにて、様々な肉を物色する火澄。もはやその眼は主婦のものだ。

「ハンバーグなんかどうかな？」

合い挽きニパックをカゴに放り込み、頭の中で金額を計算しながら

ら真直を連れて野菜コーナーに向かう。

そこで玉ねぎを入手して火澄はレジに向かった。いつもの買い物よりずっと軽い買い物かごに、複雑な思いを浮かべる。

レジで金を払いながらふと火澄は思う。

「……どうしてっかなあ」

自分が抜けて、喜一さん大丈夫かな？

神楽さん洗濯大変だろうな……。

八木さん怒ってるかなあ？

……陽差さんはどうだろう？

胸中によぎる沢山の思いに、火澄は閉口する。ツライのか、怒ってるのか、自分にもわからなかい。

ただ、少し寂しかったのかもしれない……。

「火澄にいちゃん！かね払わないと」

「へっ？あつ、ああ……ごめん」

ぼおっとしていた火澄は真直の言葉に我に返った。

二人がかい出しを終えてスーパーを出ると、晴れ渡っていた空がどんよりと灰色に染まっていた。

「一雨きそうだな……。少し急ごうか」

曇天を見上げて火澄は言った。

二人が早歩きで急いでいると、ポツンと頬に冷たいものがあたったのが判った。

「げっ……、降ってきた」

最初の呼び水から一気に本降りへと変わり始める。

火澄はその前に真直を抱えて走った。

立春の雨は氷のように冷たく、刺すように痛い。

(やばいなあ…どっか入らないと)

真直を抱えているのでそう走れないし、なにより風邪を引かせてしまう。

そう考えながら辺りを見渡す火澄の眼には、ある一軒の料理屋が映った。

「誇月……」

それは誇月。霜敵会なじみの小料理屋。

ほんの一瞬躊躇った火澄だったが、寒そうにしている真直をみて直ぐに誇月に向かって走った。

ガラリと戸を開ける。

店内は暖かった。

「いらつしゃい……火澄か」

誇月に入ると直ぐに目つきの悪い男が出迎えた。

ヤクザもびつくりなご面相な青年の名は比夏陸弥。霜敵会若頭の親友の一人だ。

「陸弥さん……、タオル……貸してください」

息切れを抑えながら火澄がなんとか言った。ついでに真直を下ろしながら……。

episode / 25 風(後書き)

久しぶりの更新のくせに短くてすいません。2月はテストなんで多分更新できません。

episode / 26 難しいよ… (前書き)

テスト終わりました

「おい、タオル…」

陸弥はやわらかなタオルを二人にかける。

外は激しく雨が降り、晴れていた空は鉛色に変わっていた。

「ありがとうございます…」

「ありがとう」

火澄が抱えていたので真直はあまり濡れていなかったが、火澄は髪と上着がじつとりと湿っていた。

「……そっちの子は？」

温かいお茶を淹れながら、ちらつと真直を一瞥して陸弥が言った。

「……俺の働いている“幼稚園”の子です」

暫しの沈黙の後、火澄はゆっくり口を開いた。

「幼稚園？」

「まあ……いろいろあります」

がしがしと頭を拭きながら火澄が答える。

「……霜蔵会のみんなには、言わないでください」

床に視線をあわせたまま火澄が言う。

表情は見えないが、声色はかなり暗い。そして寂しさを滲ませていた。

その姿に陸弥は言葉を失う。

「………わかった」

陸弥は低い声で答えた。

「…ありがとうございます」

「……いまは客もない。雨がやむまで休んでろ」

ぶっきらぼうにそう言うのと陸弥は厨房に姿を消す。

ゆっくり遠ざかる作務衣姿を火澄はぼんやりと見つめていた。

火澄は濡れたタオルをたたんで隣に座る真直を見る。

真直は誇月の内装に興味があるようで忙しそうに首を動かしていた。

「……………」

誇月の暖かな空気に眠気が沸き起こる。火澄はぼんやりとしてきた意識のなかで、うつすら考えごとをしていた。

鋼斗が火澄を雇うように計らったとき、条件として孤児院のことを話さないようにと言っていた。

鋼斗には鋼斗の事情があるのだろう。火澄はなにも口出ししなかった。

自分も同じだ。

知られたくないことはたくさんある。

その一番知られたくないことを、知られたくない人たちに知られてしまった。

本当は自分で言うつもりだった。

喜一と陽差には体の傷を見られていたし、神楽は兄と接点があった。銀一郎は自分が働かせてもらえるきっかけだった。

いや、本当に言うつもりだったのか？

あのまま、あの優しく騒がしく楽しい彼らに甘えるつもりだったんじゃないのか？

恥ずかしい、虚しい、恐怖、痛み。そんなものは要らない。

ただ、少しでも変わりたいだけだった……。

だから自分は、家を出た。

だから俺は、あそこで働いた。

なのに、かってにキレて飛び出して……

迷惑かけて、結局俺はどうすらやあいんだ？

自問自答に答えはでない。

あたりまえだ。

答えがでたら人は苦勞なんてしないのだから。

「……おい」

不意に、陸弥の低い声がして火澄は視線を戻す。

陸弥が真直に抹茶ぜんざいをだしていたところだった。

どうやら火澄はほっつとしていたらしい。

真直と陸弥が心配そうに火澄を見つめていた。

「……どうしたんだ」

もともと悪い目つきをさらに険しくさせた陸弥。彼は心配すると眉間に皺を寄せるらしい。

「……いえ」

火澄は首を横に振った。

それでも陸弥の表情は相変わらず鋭いままだ。

「……食べ。甘いもん……好きだろ」

それだけ言つとぜんざいの椀を火澄の前に押し出して陸弥は再び奥へと姿を消した。

陸弥なりに気を使ったのだろうか。

「……ありがとうございます」

あれから三十分ほどで雨はあがり、ひんやりとした空気を漂わせて空は青さを取り戻した。

青い空を窓からみて火澄は立ち上がった。

「陸弥さん、ありがとうございます」

冷蔵庫にいれさせてもらっていた食材を受け取る。

「ああ……」

「じゃあ、真直帰るぞ」

「うん。ありがと陸弥くん」

バイバイと手を降る真直を連れて、火澄は誇月を出た。

「おかえり、雨大丈夫だったか？」

風の家に戻ってきた二人を鋼斗が迎えた。

時刻もそこそこに暮れはじめ、もうじき夕食時だった。

「はい。めしいまから作りますね」

言葉少なく火澄はキッチンへ急ぐ。

さて、晩御飯にしよう。

「……鋼斗さん」

野菜を刻む。夕食づくりを手伝う（味見専門）鋼斗に火澄は聞いてみた。

「もし、知られたくないことを故意で親しい人に知られたら、鋼斗さんはどうしますか？」

あまりに唐突な質問に面を食らった鋼斗はしばし考える。

「……俺だったらとりあえずぶん殴る。んで隠してたことを謝る」

「俺もよ、いろいろ隠してんだよ、あいつらに。だからさ、おまえの気持ち少しわかってるつもりなんだ」

ぽすつと火澄の腹をかるく叩いて鋼斗は笑う。

「遠慮すんな。まず言いたいこと言っちゃまえ、んで謝れ」

につ、と笑って鋼斗は再度腹を叩き、キツチンを後にした。

その背を見送る火澄はポツンと呟いた。

「……難しいよ」

続

鯛焼きは粒餡にかぎる。

火澄は湯気の昇る鯛焼きを頬張りしみじみそう思う。

場所はスーパールの直ぐ近く。買い物帰りの恰幅のいい主婦たちからなかなかの評判がある鯛焼き屋だ。

屋台の前に設置されたベンチに座り、ペットボトルのミルクティーをすすりながら鯛焼きを咀嚼する。

春先の柔らかい日差しの中、彼はのんびりとしていた。

火澄が霜敵会を飛び出し、風の家で働き初めてから一週間。

『少しくらい休めよ』と鋼斗に言われ、なんとなくここに来ていた。

時折制服姿の学生を見かけるため、冬休みは既に終わっているようだ。

ふう、とため息をついてボトルのキャップを閉める。

雲の泳ぐ青い春空とは打って変わり、火澄の心は沈んでいた。

(謝るつてもなあ……いまさら行きづらいし……)

くしゃくしゃと鯛焼きを包んでいた紙を丸めて屑籠に放り込み、重い腰を上げる。

はああ……。

ため息を再びもらし、どこへともなく歩き出した。

鯛焼き屋から歩いて15分程、なんとなく歩を進めていた火澄の脳内は悶々と1つのことを考えていた。

(素直にすいません、かなあ……。いやでも悪いの俺だけ？ てかだ

いたいなんてこんな事になったんだっけ……。ああ、そうだ、あのバカ兄貴のせいだ今度あつたら顎の間接ハズしてやる)

此処にはいない兄の顔を浮かべ、腕をパキパキと鳴らす。

はあああ…、と再び長い溜め息をつくとき、ジーンズの狭いポケットから100円ショップで買った腕時計を引っ張り出し時刻を確認した。

「…時間ばっかあってもなあ」

少なくともあと三時間は暇だ。

暇といっても金はない。霜敵会の自室に財布を置いてきたため、貰ったバイト代はない。

風の家では火澄は給料を貰っていない。それは火澄が頼んだことであり、そこに不満は存在しない。

『まっ、小遣いくらいはな』と鋼斗が寄越した金は先ほどの鯛焼きで消えた。

文無しの少年は腕時計をしまい再び適当に歩きだしていた…。

大きな塀に囲まれた屋敷が在った。

和風の、仰々しいたずまいのソレは『霜敵会』という比較的穏やかで比較的大きい方の指定暴力団の本家だ。

近所からは恐れられているが基本的には問題はおこさない庶民派な極道の家を前に、火澄の足はとまっていた。

無意識といっても差し支えないほどに、気がついたら火澄は此処に来ていた。

「……改めて見ると、やっぱりデカいな」

閉じたままの門を見上げながら火澄は呟いていた。ここに入りに来ていた時はあまり考えてはいなかったが、改めて自分は凄いとこ

口に居たことを思い知らされた。

「……………戻る」

どんな顔で、言葉を出せばいいのかわからない。火澄がもつとも畏れていることは、”哀れみ”。あの気がいい彼らも、自分にそんな視線を向けるのではないか、とずっと不安だった。

霜敵会からも、現実からもそっぽを向いて火澄は来た道を引き返し始めた。

「ん？」

歩いて数歩もない内に火澄は足をとめた。

ドルウウンツ

背後から響いた何かのモーター音に火澄は振り向いた。

大型二輪だ。黒い。

ががががつ、と、舗装された道路に転がる小石を弾き飛ばしながらバイクは走る。運転はかなり荒く、しかも速かった。

それほど狭くないはずの道だったが、バイクはなぜか一直線に火澄に向かって飛んでくる。

「うそおういあつ?!」

奇声とも悲鳴ともつかない叫び声をあげた火澄の体はかなりの反射神経をみせていた。

衝突四秒前というギリギリな瞬間に、火澄は歩道側に飛んでいたのだ。

がす、と頬に摩擦が生じる。一瞬熱く焼け、次にじんじんと熱くなってきた。

「あたたた……………」

砂利まみれの顔を払いながら火澄はのろると立ち上がった。

「う、口にはいった…」

がりつ、と嫌な音をあげた口内から唾を吐き出しながら、火澄は通り過ぎていったバイクを見ようと顔をあげた。

「わりい、にいちゃんケガしてねえか？」

その火澄に声をかけたのは革パンツにライダーズジャケットの若い男だった。

金に近い茶髪。ややつり目の男だ。背はそれほど高くない。年も火澄とさほど変わらないようにみえた。

「……………」

「ああ、血いでとるな。ホンマに堪忍してえな。俺バイク運転すんのヘタでなあ」

手を合わせて詫げる男はどこか軽妙で、はあ、と溜め息をついてから火澄は頷いていた…。

続

e p i s o d e / 2 8 気付いたから、また、走り出す。(前書き)

ながらくお待たせしました。詳しくは後書きで。

関西のアクセントが強い言葉を操る男は名を譲原弥彦と言った。

なかなか盛大なアクションを披露した火澄は、ずきりと痛む頬を押さえた。擦り傷は何気に厄介だ。切り傷と違って範囲が広く、しかも細菌が入りやすい。火澄は痛みには“慣れていた”のだが、不快なことに変わりはない。

「あゝ、こらあかなあ。男前な顔にんな目立つ傷つけて……手当するさかいちよつとよっててくれな」

と弥彦が指さした先は 霜敵会 の屋敷。

火澄は瞬時に記憶を探った。

譲原弥彦。引き出しをひっくり返してみても、彼の名は出てこない。

「あの……この屋敷のひとと知り合いなんですか？」

「や、知り合いつつより身内つつたほうが正しいわな。ここ、

俺の義理の家族」

「義理？」

「あー、そやなあ。俺の兄貴がこの娘と結婚したんや。んで、俺は頻繁に出入りしとるから、家族みたいなもんなんや」

ここの娘、という言葉で合点がいった。陽差の姉だ。正月に帰ってきたのはみたが、直接会話したことはなかった。というより、彼女とともに来訪した譲原千尋のほうが鮮明に思い出せる。

ということは…

「千尋ちゃんの……兄弟？」

「なんや千尋のことしつとんの？」

やっぱり。「千尋ちゃんの……兄弟？」

「なんや千尋のことしつとんの？」

やっぱり。

「まあええか。千尋知つとるってことは霜蔵会の関係者なんやろ？
ほな、さっさといこうや、寒いしな」

「え、あ」

問答無用。狼狽する火澄の首根っこを掴むと、弥彦は有無を言わず連行させていった。

(……あれ、なんかデジャビュ)

そんなことを思いつつ、諦め混じりで火澄は連行されていった。

久しぶりに入った霜蔵会の屋敷は大きかった。

思いがけない帰還となった。しかし、それは拍子抜けしてしまうほど呆気なかった。

何故か、理由は屋敷に居たのが静流だけだったからだ。不機嫌な顔で通りかかった静流は火澄の顔を見て一瞬目を見開いた。苦笑を火澄が返すと彼は無言で去っていった。

「なんや、誰もおらんのやなあ」

リビングにも姿はない。神楽や喜一もいなかった。

「しゃあないな。ほなちょっとまっててえな、絆創膏探してくっから」

弥彦の姿がリビングから消えると火澄は脱力感とともにソファに腰掛けた。懐かしい柔らかさに自然と顔が綻んだ。

どう謝るか、まだ決めていない。

正直な所、火澄はホツとしていた。

今会ったら、きつと逃げ出してしまうから。

それにしても。

「なんでいないんだ？」

何かあったのだろうか。

「おまちどーさん」

それから数分、救急箱を抱えて弥彦が戻ってきた。

「しみるけど我慢なあ」

消毒スプレーを構え、イヤに真剣な表情で弥彦が言う。その表情から次に起こることが想像できた。

「あ、あの自分でやるんで」

「まかせろや、死にはしない」

「いやマジで　ぎゃー！！！」

顔面に吹き付けられた消毒アルコールが目突き刺さり、火澄は久しぶりに絶叫をあげていた。

痛い……

「にしても、なんでみんないないんやろ？」

荒っぽい手当を終えた弥彦がつぶやく。気になっているのは弥彦だけではなく火澄もだったが都合はいいので黙っていた。

「あ、静流ー。なしてみんなおらんの？」

通り掛かりの唯一屋敷にいた静流に弥彦が聴いた。

静流は無言のまま、一枚の紙を取り出した。

『この顔を探せ』

火澄は吹き出した。そこには正月に陽差たちと撮った写真があった。火澄の部分を丸く囲ってある。

「なんだこれ？　火澄、って君やろ？　なんかしたんか？」

「……………」

「お、ここ見てみ。『生死は問わず。見つけ次第連行しろ』だって「いやいや生死は問おうよ！　死にたくないっすよ！」

ツツコミをいれてから火澄はハツとした。

死にたくない、か……昔の俺だったら、多分どうでもよかったんだろうな……

気づいた。

「俺……変わったのかな……」

公園で寝泊まりした時、生も死も、なんの感慨もわかかった。どうでもいいと、投げ出していた。

けど……

「此処で生きてみたい。多分、そう思ったんだ」

だから、逃げ出した。

悲しかった。知られたことが。

嫌だった。遠慮され、軽蔑され、畏怖されるのが。

「一緒に……居たかったんだ」

俺

気付けば立ち上がっていた。弥彦を押しつけ屋敷を飛び出す。

「逢いたいっスよ。みんなに」

くよくよするのは、やめた。

続

episode / 28 気付いたから、また、走り出す。(後書き)

ながらくお待たせしました。ご無沙汰してます、星見です。長期に渡る停止の間、たくさん感想ありがとうございました。本当にありがとうございます。メッセージをいただき、嬉しかったです。携帯で小説を打つのは大変で文字数もつらいです。諦めかけました。けれど、応援してくれるたくさんの方々に後押しされ、頑張ることに決めました。ヤクザでバイトはかならず完結させます。ラストまで後少し。火澄の物語を楽しんで頂けたら幸いです。

電話が鳴った。緩慢な仕草で神無陽差はそれを取る。

「陽差さん？ 弥彦や」

「どうした弥彦？」

「さっき火澄くんと会った」

「……なに」

「バイクで跳ねかけて、手当したんや。でもなんやよつわからんが、飛び出してった」

「バイク？ 屋敷からか？」

「うん。あのけっりたいなビール見たからかも。生死を問わずっておかしいやろ」

ああ、それが。

あのビラは陽差が喜一と神楽に作らせたものだった。

「……不味いな」

「？」

「弥彦、お前はまだ屋敷にいるのか？」

「いる」「今すぐ八木に連絡いれてあいつを探せ。いいな、今すぐだ」

珍しくドスのきいた陽差の聲に弥彦は緊張した声で

「り、了解」と返した。

それからサツサと通話をきり、自身も歩き出す。

彼は今、コンビニを回っていた。火澄のいそうな場所を虱潰しに探している途中なのだ。

「……火澄」

つぶやきはかすれてきえた。

あまり知っている人間は居ないが、神無陽差には弟がいた。
ずっと昔の事だ。

そのころは霜敵会も今とは比べものにならないほど荒々しく、まさに暴力団だった。

いずれ霜敵会を継ぐ者として、陽差は気を張っていた。他者を寄せ付けない威圧的な雰囲気纏い、友人三人としかめつたに会話をしなかった。

弟は 神無陽次は、明るい少年だった。

場を和ますムードメーカー。クルクル回る表情。

『兄さんは気を張りすぎだ。もっと力抜いて』
飄々とした口調が印象的だった。

彼自身は別段弟を大切にしていたわけではない。嫌いではなかったが、興味も薄かった。

けれど弟は陽差に絡んだ。他愛のない話をわざわざしてくる。鬱陶しいと思ったことも多い。

『なんでおまえは俺に構う』

ある日聞いたことがあった。

その答えを、陽差はいまでも覚えている。

『理由はないよ。ただ、なんとなく。強いて言うなら、兄さんがいつも不機嫌だから』

ちよっとは楽しようよ。俺も手伝うからさ。な？

薄く笑った彼に陽差は呆れた。

なんだその理由は、と言ってやった。

じゃあ手伝えと意地悪く言った。

弟は飄々とした口調とクルクル回る表情で、陽差の後について回るようになった。

ある日、小さな抗争が起きた。敵対する組から鉄砲玉が屋敷を襲撃したのだ。

すぐさま捉えられ、九代目の前に突き出される。その場に陽差と陽次もいた。

尋問めいたやりとりが交わされ、実害が少なかったこともあり、さほど警戒もしていなかった。

だが、それは間違いだった。

一瞬の隙をつき、鉄砲玉は下着の中に隠していた小さなナイフを取り出して陽差を襲ったのだ。とっさに避けることも出来ず、腕を盾にすることが精一杯だった。

ざくり。

痛みはなかった。目にしたのは、弟の喉に突き刺さった小さなナイフ。

陽次は兄を庇ったのだ。

そして死んだ。

霜敵会はその組を全力を上げて潰し、それから今のようによろしく落着いていった。

陽差も変わった。弟の使っていた飄々とした口調を使うようになっていたのだ。

変わった組、変わった自分、死んだ弟、庇われた自分、死ぬまで飄々としていた弟、変わったつもりの中の自分、思い出、今。

火澄を拾ったのは『なんとなく』だった。弟のように。

変わったつもりを、変わった、にしたい。

弟のようにすれば、少しはマシになれるのではないか。

結局変われないくせに。

「火澄……」

結果として、あの少年を巻き込んでしまった。くだらない自分の為。

けれど、少年は変えた。八木と理子を、引いては赤ん坊を救い、日常を騒がしくした。

隠したい自分を隠して。

火澄と陽差は似ているのかもしれない。隠すことが巧いか下手かの違いだけだ。

陽差は車に乗り込み、キーを回した。エンジンがかかり暖房が入る。

発進しようとギアに手を伸ばしたところで、窓ガラスをたたく音

がした。

「おまえは……」

そこにはあの占い師が立っていた。今日はニット帽を目深にかぶり、黒のダウンを着込んでいる。占い師はすうっと一枚のタロットカードを差し出した。

『死神』

まがまがしいドクロが黒衣を纏い、錆び付いた大鎌を振るっている。不吉なカードだ。

「彼 崩島火澄くんはもう見つからないよ」

「なに？」

「連れてかれたよ。ついさっき。君らを探していたところを無理やりね」

「……なんでおまえが知っている。なんで俺に知らせるんだ」

窓を開きカードを弾きながら陽差は吐き捨てた。占い師は笑みを崩さない。

「俺は占い師のほかに探し屋も兼業しててね。仕事で彼……火澄くんを探したんだ」

「……おまえ」

「怒るなよ。だからこうして君に教えてあげたんだ……このままだと寝覚め悪いしね」

「火澄は……」

「彼の両親が雇った無駄に屈強な奴らに拉致られたよ。場所は彼の家」

にいい。嫌らしく口端を吊り上げ、占い師は落ちたカードを拾い

あげた。

「俺は消えるよ、このお話はキミらのだからね。けれど急いだほうがいい。彼が壊れないうちに」

「……………」

無言で陽差は車を出した。

手には携帯。

「八木か？ 俺だ。崩島の住所を調べろ。10分でやれ、いいな
何時もと違う陽差の口調に電話口の八木が驚いたのがわかった。
だが、それに構っている時間はない。

「いいな？」

再度そう確認し、陽差は携帯を閉じた。

続

episode / 29 若頭の裏話（後書き）

若頭の物語。陽差さんに弟がいるという設定は決まっていたんですがなかなか書けずにいました。いま書けてよかったです。ちなみにお正月の話ではっちゃけていた若頭、あっちが地です。本来の陽差さんは意外と真面目で乱暴でしたが弟の影響がいろいろあり、二面性をもった人物になりました。

30話直前突発企画！！

火澄

「えー、ヤクザでバイトをご覧の皆様。主人公の火澄です」

陽差

「なんだ、随分テンション低いな」

火澄

「低くもなりますよ。本編がシリアス過ぎて限界です死にますよそのうちほんと」

神楽

「あれ、作者からカンペ出てるよ。なになに……主人公は最後死にます」

火澄

「うそおおをつ?!」

陽差

「火澄……短いあいだったな」

火澄

「いやいや待て待てごめんなさい調子のりましたスイマセンやっぱ死にたくないです！ てか前回の話で

「俺、生きたかったんだ」とかシリアスな言ってたじゃん！」

神楽

「死亡フラグじゃない？」

火澄

「ああああああ」

喜一

「いつまでやってんだよ。話進まないじゃねえか」

神楽

「あれ喜一いたの？」

喜一

「いたよ！」

火澄

「いいさどうせ俺は」

喜一

「おーい火澄ー」

火澄

「だいたいなんだよこの展開どんだけ不幸なんだよ俺いつも思ってたけどさそれにしたって」

陽差

「カンペキ殻に閉じこもったな」

喜一

「あーあ、主人公があんなんじゃないだろー」

神楽

「だいたいなんの企画なの、これ？」

喜一

「お、またカンペだ。えーと、次回から鬱ストーリーぶつ通しのエ
ンディングまつしぐら！ 主人公は果たして生き残れるのか！（笑）
最後の息抜き突発企画キャラクター座談会ポロリは無いの？ だ
つて」

陽差

「鬱か……」

神楽

「鬱ね……」

喜一

「俺、出番あるかな……」

陽差

「座談会って何やるんだ？」

神楽

「適当に裏話でもサラッと暴露しちゃえばいいんじゃないですか？
例えば喜一は実は一話限定の端役だったとか」

喜一

「なに?!」

神楽

「八木さんと理子さんを主人公にした短編を書いたはいいが作者があまりに恥ずかしかつたためお蔵入りになったとか」

八木

「……聞いてねえな、んな話」

喜一

「八木さん?! いつから其処に!!?」

八木

「作者の都合だ」

理子

「それにしても、私たちの話なんてあったのね」

神楽

「あら理子さんまで」

陽差

「調子はどうだ?」

理子

「本編に出たいので頑張ってます」

喜一（まだ出るのか……俺の出番が……）

陽差

「またカンペか……。移動しろ?」

八木

「若頭、場所は？」

陽差

「誇月だと」

神楽

「火澄くん、移動するわよー」

火澄

「作者も作者だ一年近く連載中断しやがっておかげでこっちは鯛焼き食ったままリリースだぞ」

八木

「なにやってんだ？」

陽差

「トラウマに悶えてるんだ。八木、運んでやれ」

陸弥

「……なんだ昼間から」

陽差

「座談会だそうだ」

陸弥

「座談会……?」

喜一

「裏話をするらしいです。ちなみに火澄は気にしなくていいですよ」

火澄

「トラウマトラウマってみんな言うけど本気でヤバいんだからな作者は分かっているのかそこるところみんなして俺のことボコス力殴るし俺はサンドバッグじゃねえってんだよ」

陸弥

「……そうだな」

神楽

「じゃあだれか話ない?」

理子

「あ、一つあるわ」

八木

「なんだ?」

理子

「お腹の子はお」

喜一

「ストオオップ! それ裏話じゃなくて現在進行形の未来だから!」

理子

「ダメなの？」

喜一

「ダメです。そこは最終話のお楽しみです」

紗憐

「ふっふっふ、私の出番ですね」

神楽

「あ、紗憐ちゃん。はやかったね」

紗憐

「ウチの運転手は優秀ですから。それより裏話が必要だとか」

陽差

「なにかあるのか？」

紗憐

「はい。実はこの話、最初は

「ヤクザでバイト」ではなく

「屋敷でバイト」だったんです！」

喜・陽・八

「なにiiiiiiiiiiii!」

紗憐

「ストーリーも私と火澄くんのラブラブストーリーだったのです！」

喜一

「作者っ！」

カンペ

「事実」

喜一

「ウソだろお!? ってことはもしかして俺や若頭や神楽は今頃…」

神楽

「私は最初から出演予定よ。メイドだもの、紗憐ちゃんの屋敷で働いてても変じゃないでしょ?」

喜一

「作者っ！」

カンペ

「事実」

喜一

「ちくしょーーーーー!!!」

カンペ

「ちなみに若頭と八木は最初から構想はあった。なかったのは喜一と伊織だけ」

伊織

「んだと……」

紗憐

「伊織くん」

伊織

「聞き捨てならねえな。最初、どういことだ！」

カンペ

「だって別に君いらないじゃ」

びり、びりびり、

陽差

「カンペが……」

理子

「とにかく、話をかえましょ！」

喜一

「そ、そうですね！」

八木

「俺も一つあるぞ。火澄には妹がいる」

喜一

「意外なところから衝撃的新事実！」

八木

「という設定だったが作者が妹キャラを書きたくなかったから五行書いて消したらしい」

神楽

「適當ね」

伊織

「適當だな。おい作者っ！せめてこの話くらい完結させろよー！」

カンペ

「だりい」

びり、びり、びり、

陽差

「正しい反応だな。それにしても本編は随分シリアスだな」

喜一

「俺なんかまったく出てない」

神楽

「私もよ。というか、最終的にどうなるの？」

カンペ

「主人公が死」

びりびりびりびり、

火澄

「誰が死ぬか！」

八木

「やっと立ち直ったか」

火澄

「ほっといたら本編で本当に殺されそうなんで」

紗憐

「火澄くんが死んだら作者をいかなる手を用いても謀殺しますので安心してください」

喜一（…怖い…）

伊織

「おい、カンペ出たぞ」

陸弥

「……………最後に一言だそうだ」

火澄

「えっ、もう終わり？ 俺あんまり喋ってない！」

伊織

「無駄口叩いてっからだ」

陽差

「まあまあ。ほら火澄、最後の一言。主人公だろ？」

火澄

「あ、はい。では…………ヤクザでバイト、次回からシリアス鬱モード突入ですが最後までよろしくお願いいたします！ それでは、また！」

鋼斗

「やっとついたぜー」

陸弥

「鋼斗……もう終わったぞ」

鋼斗

「ええっ！ そんなバカな！ 前回あたりまで大活躍だった俺を差し置いて終わりなんてありえねーだろ！」

陸弥

「……事実だ」

鋼斗

「ち、ちくしょー……………！ 飲んでやる！ 陸弥、酒！」

陸弥

「……はあ」

作者

次回からシリアス鬱モード突入です！
火澄くんの物語を、どうぞ最後までご覧ください。

30話直前突発企画！！（後書き）

かいさん、鯨亜さん。メッセージ有難うございます。完結目指して頑張ります。

episode / 30 火澄と歪み（前書き）

痛いシーンがちらほら。

「お帰り、火澄」

なつかしい声を聞いた。

恐れていた声だった。

不安と焦燥を掻き立て、内臓の奥から恐怖を引き吊り出す。

そういう声だった。

屋敷から飛び出し、がむしゃらに走っていた火澄は背後から近づいてきた彼らに気づけなかった。

後頭部に鈍痛を感じると景色は暗転し、冷たいアスファルトに倒れ込む。

目を覚ませば、懐かしき我が家だった。

目の前にいるスーツ姿の壮年の男 崩島勝重^{かつしげ}。

凄腕と賞される、業界では多大な影響力を持った弁護士である。

「何処へ行ったかと思っていたら、まさかあんな連中の何処とはな。やはりお前は出来損ないだ」

吐き捨てられた辛辣な言葉に火澄は体を震わせた。

怖い。

怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

怖い。

怖い。

「外でなにか悪さをしなかったか？」

カツンと革靴の音が響く。

アスファルトが剥き出しのままの薄暗く窓のない部屋。火澄の為だけに用意された地下室。

崩島勝重の節くれだった指が火澄の顎を捉え、持ち上げた。

じゅらりと硬質的な音。鎖が火澄の腕を後ろで纏め繋ぎ留めていた。

「心配したぞ。私の玩具」

「……………」

「なんだ。随分反抗的な目をしているな。少し　躡てやらねばな

あ

崩島勝重はそう言って口角を吊り上げて嗜虐的な笑みを見せた。

絶望の淵とはどんな光景なのだろうか。

「どうした火澄。ん？」

顔に熱湯を浴びせられ、火澄は悲鳴と同時に覚醒した。どうやら気を失っていたらしい。

全裸に剥かれ、常軌を逸脱した折檻を受ける。

小手調べに上半身を鋭い鞭で幾度となく打ち据えられ、悲鳴を上げ抵抗すれば鼻が蹴られて血を噴き出す。

腕にはドライヤーの熱風が当てられ火傷していき、適量を明らかに超えた灸が胸に三つ、火を付けられた。

熱い。焼けていく己の体。

「……」

口に詰められた拘束具らしき球体が呂律を妨げ言葉すら奪う。

「ほら、どうした？ 私の歪み」

歪み。

「お前が居なければ、何もか楽だった、お前は生まれてはいけない歪み（ひずみ）だ。せめて私を楽しませろ」

火澄とは歪み。

忌み名。誕生を喜ばれなかった存在。

「……………」

崩島勝重の手が次に取ったのは、火澄の携帯電話だった。

ぱちんと開けて勝重は電話帳を呼び出して嘲笑した。

「またあの子か。全く、これのどこがいいのだから」

「……………」

「まあ、いい」

バキン。無情な響きで手折られる携帯電話。ぷつりと液晶は光を失い、火澄は全ての繋がりが断たれたように感じた。

「さて。これでいい。お前に友人など必要ない。次は何をしようか」

「あなた。これなんかどうかしら？」

重い戸が開き、姿を現したのは崩島雪子。勝重の妻だ。

彼女の手には《爪きり》が握られていた。

夫婦が笑う。それはそれは楽しそうに。

「それはいい。さて、始めよう……………」

ど、うん！

地下室に届く荒々しい爆音。

軋む軋む、世界が軋む。

勝重と雪子が顔を合わせる。

ど、ど、ど。

音が近づいてくる。

火澄は目を見開いた。微かに聴こえたのだ。よく見知った彼らの喧騒が。

「火澄ー！ どこだーっ！」

「無駄に広いなあおい！」

「若頭、地下に行けるみたいですよ」

「地下室か……行くぞ」

騒々しい男たちが、地下への階段をどやどやと降りる。

そして

「火澄ッ！」

現れたヤクザたちが、饗宴の終わりを告げた。

先陣を切ったのは霜蔵会若頭、神無陽差だった。

火澄の知っている飄々とした笑みは無い。眉間に皺を刻み、明らかに怒りを露わにしている。

「……胸糞わりいな、この部屋」

アスファルトに転がる禍々しい道具の数々。鎖。蝋燭。血と水。

「なんだお前たがあっ！……」
言葉を発する前に勝重は陽差に殴られアスファルトに虚しく転がった。

雪子が耳に痛い悲鳴をあげる。

今の陽差は《霜蔵会十代目》の顔だ。冷たく、情け容赦ない。

「お前ら、この夫人を丁重にもてなしてやれ。丁重にな」

鋭い命令に従い二人の男が前へ出て、叫ぶ雪子を連れて上階へ消えていく。遠退く悲鳴が不気味な余韻を残した。

「お、まえたぢ……こんなごじで……」

鼻を抑えてふらつきながら立ち上がる勝重は殺意を目に光らせていた。余程強かに殴られたらしい。骨がいかれたのだろう。

「黙れ」

そんな抗議を一言で切り捨て、目で傍らの八木に合図を出した。

頷いた八木は火澄のところへ向かい、拘束を解いていく。ジャラジャラと唸る鎖を外し、口の拘束具を取り払うと、火澄は八木にもたれ掛かるように気を失った。

疲れ果てて気を失った傷だらけの少年を抱え、八木は立ち上がる。陽差の方ももうじき片が付くだろう。何年ぶりかに見た彼は、やはり十代目に相応しい迫力を持っていた。心配は必要無さそうだ。

「十代目、自分は先に」

「ああ。あいつらも心配しているから早く行け」

「はい」

陽差は勝重の胸ぐらを掴み、ドスをきかせていた。交渉はじきに優勢で終わるはずだ。

八木は火澄を担ぎ、そのまま地下室を後にした。

火澄は気を失ったまま、ピクリともしなかった。

続

episode / 30 火澄と歪み（後書き）

次回予告、火澄と兄の殴り合い（一方的）が勃発！？

e p i s o d e / 3 1 手負いの獣 兄と弟 (前書き)

猟奇的な表現あり、鬱というよりは不気味。

「火澄ツツ！」

叫び声と共に崩島辰巳は霜蔵会の門に飛び込んだ。見咎める者はなく、すんなり屋敷へ入れる。

屋敷の中は不気味な程静かで、だがどこから妙な音が響いている。

「来たのか」

出迎えたのは霜蔵会若頭にして次期十代目、神無陽差だった。

「火澄はツ！ あいつは何処ですか?!」

「……会いたいのか」

陽差は一言呟いて踵を返し、廊下へ消えていく。陽差を追って辰巳は屋敷へ入った。

「なんですか……この部屋……」

案内された辰巳が目にしたのは、開かれたままのドアに堆く詰まれたタンスやダンボールのバリケードだった。周囲の壁や床には微細ながら傷がつき、何かが暴れたことを示している。

「このバリケードは火澄が作ったもんだ。正直な話、今のあいつに会うのは危ない……注意するんだな」

「……………はい」

ダンボールの山は触れただけで崩れて道を開ける。横倒しのタンスを跨ぐと随分荒れた室内が明らかになった。

引き裂かれたカーテンと破られた布団の綿が空に舞い、着古された服が点々と床に散らばっている。この部屋の主はじつと膝を抱えて隅に座り込んでいた。

辰巳が入って来たことに対し、火澄は何の反応も示さない。

「火澄……………」

フロアリングを隠す布きれを足で払いながら火澄の下へ向かう。辰巳の声は火澄に届いているのだろうか。

「……………火澄、聞こえてるんだろ？　なあ火澄、ひず」

「出ていけ」

「……………ッ」

火澄は動かない。膝を抱きかかえたまま、ハッキリと拒絶した。冷たい声に、辰巳は息を呑んだ。

だが、そう簡単に引く訳にはいかない。

辰巳は食いしばるように拳を握り、年の離れた弟に歩み寄った。

「いろいろ在ったんだってな、聞いたよ、神無さんから」

「
」

「歪みで、歪みで、だって俺は、は、は、辰巳がつ、兄じゃなくて、
だって、ずるずるきずるういあい」

辰巳の意識は殆ど消えかけていた。薄れる意識の向こうで、泣き声
が聞こえる。

「
み……」

火澄、ごめんな。

もうだめだ。息が持たない。

「其処までだ火澄、手を離せ」

首を圧迫していた力が離れ、突然意識が浮上した。がは、と大きく
咳き込んでほうほうの体で這い出ると、火澄を拘束する陽差の姿が
あった。

続

episode / 32 手負いの獣 呪いの言葉 (前書き)

まだまだ続く猟奇モード。

唸り声が部屋に響き渡る。

己を押さえつける陽差の腕に火澄は有らん限りの力を込めて噛みついた。

「……落ち着け火澄、落ち着くんだ」

カッターシャツから僅かに覗く陽差の手首には無数の歯形が残っていた。幾度となく噛みつかれたのだろう。血が零れだし、床と火澄の顔を赤く濡らした。

激痛が伴う筈だというのに陽差は眉一つ動かさない。

火澄は獣のようだった。何日も満足に寝ていないらしく、双眸は血走っている。口からは陽差の赤い血を滴らせ、うめき、暴れていた。

怖い。辰巳は素直にそう思った。目の前にいる手負いの獣は、辰巳めがけてしきりに手をのばしていた。触れたら八つ裂きにされそうで、辰巳は息を呑んで眼前の光景を見つめることしか出来なかった。

獣が吼える。

「あんだは、あんだはう、おれの兄なんかじゃないッ！」

吐き捨てたのは呪いの言葉。

「俺はあなたの母親と愛人の間にできだ歪みだ！ 世間的ばっか気にするあ、んたの親父がつ、俺を引きとっだ！」

「あゝんたは、好きな大学行って、頭だってよくで期待されててな
んでもあゝっだ！ どうして俺はこんなだろっでずっどずっど
思っていた、いたんだ！ 気紛れに兄貴風吹かせるあんたが嫌いだ
！ 嫌いだ！ 嫌いだ！ 母親がご機嫌で俺を虐待させはじめたの
だって、そうだった！ あんたがどんな失敗をしてもあんだのぼやじ
は取り繕ったつ、その不機嫌は血の繋がらない邪魔で醜い俺に向か
ってだんだ、母親は今の金を失いたくないから一緒にあって俺をな
ぶった！」

「……………」
「わが、わがなんだろうが！ げほっ、俺が！ あんたを！ こう
いう目で見ていたのを！ ぐ、げほっ、げ、え、う、ええええええ
え！」

言葉の途中で激しくえずいた火澄は胃の内容物を吐き出し、フロア
リングにのたうたわまった。

陽差は慌てず、声を上げて若衆を呼び、跪いて処置を施す。

火澄な言葉に辰巳は目頭が熱く潤むのを感じ、膝が震えた。
知らなかった、火澄が母の不倫による子供だということ。
辰巳はこの年の離れた弟が好きだった。何だかんだ言っても素直だ
つたし、甘えてもくれた。

だが、こんな闇を抱え悩んでいたとは、知らなかった。
大学に入り、寮暮らしになってから、実家にはあまり行かなかった。
それがこの悲劇を見抜けなかった要因だった。

「……………火澄」

若衆と陽差によって運ばれていく弟に、意味も理由もなく、ただ呟

リビングから出た喜一はキッチンへ向かうつもりだった。軽食くらいなら食べてくれるかもしれない。というよりは食べなければ保たないはずだ。まる一日監禁状態で精神はボロボロ、先ほど嘔吐した後を始末したとき、胃の内容物は全て吐き出していた。つまり、カラッポなのだ。

「……はあ」

喜一は後悔していた。火澄が屋敷を飛び出すきっかけを作ったのは喜一たちなのだ。

三人が何か話していたのが聞こえ、ほんの好奇心から会話を盗み聞きした。これが遠縁となったのは明らかだ。きつと神楽や八木も後悔しているのだろう。二人の顔も陰っていた。

「……やっぱり、ちゃんと謝りたいなあ」

そんなことを呟いた時だった。

「ごめんください。どなたか居ませんか？」

彼女の声が響いたのは。

続

episode / 32 手負いの獣 呪いの言葉 (後書き)

次回、彼女と彼が参戦。この物語で作者が一番書きたい場面なので
気合いをいれて書きます！

episode / 33 怒りの恫喝（前書き）

お久しぶりです。高校最後のテストが終わり、四月の生活に向けて細々と準備してます。

彼が彼女から電話を貰った時、電話口の彼女は泣いていた。

彼女が彼に電話をかけた時、電話の向こうで彼は動揺していた。

彼と彼女は、親友に会う為に動き出した。

「紗憐ちゃん……」

喜一の前に現れたのは、崩島火澄の親友にして某製薬会社令嬢・月岡紗憐だった。

彼女は喜一にふわりと微笑む。

「火澄くんに会いに来ました」

「火澄に……や、でも、今は……」

「いるんですね、火澄くん」

「……紗憐ちゃん。会わない方がいいよ、今の火澄は……たぶん、君でも」

紗憐は微笑んだまま、ゆっくり首を振った。

「構いません。それに、優秀な護衛さんもいますから」

「護衛？」

喜一の疑問符とほぼ同時に紗憐の背後から怒声が響いた。

「いつまで話してんだっ、さみいんだよ！」

荒々しく逆立てた金髪の少年。

「護衛の伊織くんです」

「……紗憐ちゃん、伊織くん。ホントに二人で大丈夫か？」

「あ？ 大丈夫に決まってるだろうが」

火澄の部屋の前だ。仕切りに心配する喜一に向かって伊織が苛々と吐き捨てる。

「伊織くん、失礼ですよ」苦笑混じりで諫めた紗憐だったが、彼女もまた、喜一の心配とは裏腹に自信をみなぎらせていた。

「さて、では喜一さんは待っていてくださいな。伊織くん、準備いいですか？」

「おう」

「あっ、ちよっ」

紗憐と伊織は喜一の声を見殺してドアの向こうへ入っていった。

紗憐と伊織の視界に映っているのは嵐の後のように乱雑な世界。

「

火澄を探し視線を走らせる。口を開こうとして、紗憐は口を噤んだ。カーテンの向こうだ。いや、カーテンだった布の向こうというのが正確かもしれない。カーテンレールから剥がれかけ、穴だらけになったソレにくるまる影に紗憐は近づいた。

「……お久しぶりです……火澄くん」

そう呟いた途端、紗憐の頬に風が掠めた。

それは 半分におられた携帯電話だった。

「……」

無言で拾い上げる。それは紗憐が火澄に贈ったもの。

二人を繋いだたった一つの絆。

「かえれ」

怒声が全てを吹き飛ばす。怒鳴りながら伊織はカーテンを剥ぎ取ったのだ。蜘蛛の巣が如く破れ火澄の姿が露わになる。その姿に伊織は眉間の皺をさらに深め、紗憐は一瞬目を閉じた。

「……………なんつう面してんだよ」

舌打ちが一つ、伊織の口から勝手に零れた。

あまりに、あまりに火澄がやつれていたから、そう言わざるをえなかった。

ぎろり、血色の双眸が伊織を舐めつける。感情はない。ただ、痛々しく眼差しだった。

「かえれ」

からくり人形のように再度繰り返す。

「……………かえれだと？ バカかてめえは」

誰が手ぶらで帰るかよ。

伊織の腕が火澄の腕を掴み、無理やり引っ張り上げる。火澄の抵抗する力は伊織からすれば大したことはないものだった。

「は、はなせっ！ はなせええええっ！」

「うるせえってんだろーが！ 黙れボケが！」

一括！

「俺らがわざわざ来てやったのかえれだど？ 何様だてめえはよを？ ああ？！」
「っ?!」

至近距離からの恫喝は火澄の鼓膜と脳を揺さぶり、叩きつける。

伊織の目は恐ろしいほど鋭く、怒りが満ちている。

火澄は思わずその腕を振り払い、後退りした。壁に背がつき、逃げ場が消える。

そして

「
」

伊織は再び口を開いた。

続

episode / 33 怒りの恫喝（後書き）

今回は状況作り。次で伊織くんと紗憐ちゃんがリミット解除です。今まで出番が少なかった伊織くんを書くのはかなり楽しいので頑張ります。

episode / 34 告白(前書き)

お久しぶりです。車校が大変しんどいです。わたし車が苦手です。

「俺は、今のお前がムカつく。死ぬほどイラつく。殴り飛ばしたくなるくれえ腹立つ」

伊川の声は先ほどの恫喝とは打って変わって静かで、淡々としたものだった。

「そりゃあ、お前にだっているいろいろあんだろーよ。正直、お前の痛みはお前にしかわかんねえ」

「……………」

「だがな、見てるしかできねえ痛みだつてあんだよ。お前がぼろ切れみてえになつても、黙って見てるしかできねえんだよ！なぜならお前は誰にも頼らなかつたからだ、声をあげなかつたからだ、諦めかけたからだ！」

「……………いおり」

「なんだこの部屋？んなにめちやくちやにしゃがって。結局八つ当たりじゃねえか！八つ当たりするくれえなら頼れよ愚痴れよ泣けよ慰められるよ黙るな叫べよ！ストレス溜め込んで狂っちゃうんだつたら、別の形で発散しろよ！」

「……………だつて……………仕方ねえじゃん」

「なにがだよ？！なにが仕方ねえんだよ！」

「わかんねえんだよ……………頼り方が……………頼ったら、重しになるだろ……………」

……………？ 邪魔になるだろ？」

怖いんだ。

邪魔だと思われるのが。

いつも、自由なんてなかった。

伊織や紗憐に会えるのは学校だけで、家は監獄だった。

でも、帰らないといけない。
そうでないと、そうしないと

「みんなに……危険が及びかねないから」

あの男なら、やる。確かな狂気が渦を巻くあの男は、自身の力を
つかうことを躊躇わない。

「紗憐の家はデカイ会社だし……伊織だって、道場やってるだろ？
もし、あることないことばらまかれたら大変じゃねえか……」
「だから頼らなかつた、てか？」

「……ああ」

消え入りそうな返事な伊織は大袈裟にため息をつき、紗憐はよっ
くり頭を抑えた。

「で？」

「え？」

「だからそれで？」

「それでって言われても……」

「理由はそれで終わりなのかよ？ 嘘ついてんじゃねえよ」

「嘘なんかついて……」

「壊れちまうのが嫌だったんだろ?!」

必死で取り繕っていた自分の形を、他者に干渉されて壊され
ちまうのが。

「十年間」

「？」

突然指を立てた伊織に疑問符を浮かべた火澄に、紗憐が口を開い
た。

「私たちと火澄くんの付き合いの長さです。十年間、小学校一年生
から、今まで、ずっと一緒でした。遠足、運動会、文化祭、臨海学

校、球技大会。たくさん行事があつて、毎日一緒に勉強したり話したり、お弁当食べたりました。火澄くんはいつともコンビニのオニギリでしたね」

「……なにが良かったんだよ」

「修学旅行ですっ!」

「は?」

「高校生最大イベント修学旅行、火澄くんが来なかったせいで私も伊織くんも往くの止めました。どうしてだかわかりますか?」

「……………」

「わからないなら教えてあげます。一緒に往きたかったからです、三人で」

だって、そうじゃないですか?

「高校卒業したら、もうみんなと一緒に遊べなくなる。火澄くんの笑っている顔も、消えてしまうかもしれない。ずっと、言おうとしていた言葉があるんです。でも、言えない、言ったら火澄くんは私から離れてしまうから……………」

「冗談めかしていたけれど、本気なんです。」

「紗憐……………」

「火澄くんがどこか一步遠退いていたのは気付いてました。家のこと、両親のこと、私たちのこと、みんな一人で考えて、背負って、黙っていることも。だから冗談にして、自分の思い殺して、火澄くんのそばにいたんです! 伊織くんはそれに気付いてました。気付いてなかったのは火澄くんです。いい加減気付いて下さいよ」

「……………」

「私、正直に言うところな事になって、少し嬉しく思ってます。自分の気持ち、ちゃんと伝えられるチャンスですから」

「ほん、と軽く席を一つ。そして紗憐はフワリと微笑む。

「好きです」

続

episode / 34 告白（後書き）

紗憐ちゃんのターン！ 次回ついに火澄復活。無駄に長いこのトラ
ウマシーンでしたが、やっと、終わりが見えてきました。

episode / 35 檻の外へ(前書き)

更新までだいぶかかってしまいました。すみません!!

その瞳は覚悟に輝いていた。

月岡紗憐。

崩島火澄は思い返す。彼女とは長い付き合いだ。大切な、友人だ。

好きか嫌いかと聞かれれば。

迷うことなく好きだと答える。

けれどそれはあくまで、友人、その一言に集約されてしまう部類に入る感情だ。少なくとも、半年前までは。

だが、今は違った。

戸惑った。

火澄は一瞬思考回路をオーバードライブさせ、明日の誰かのよう
に真っ白に燃えつき欠けた。

以前ならば。

瞬時にNOと言えたのに。

今は言えない。

彼女の決意が、ひしひしと伝わってくるから。

「……紗憐。あのな、なんて言えばいいか、その、いや……ちょっと
とまで、頭が混乱してて考えられん」

逃げていた。伊織と紗憐にずばり指摘され、そんな自分にも気付いていた。だから今まで紗憐は”冗談”だった。

今、この時。

冗談ではなく、本気が、火澄の前に佇んでいる。

逃げるな。紗憐の背後に立つ伊織が睨みつけながら訴えている。

なんでいきなりこんな展開なんだ……

頭をかきながら、火澄は自分が笑っていることに気づく。久しく忘れていた表情に、ハッと息をのみ、また笑った。

ああ、ちくしょう、ほんと、いい奴らだ

「……紗憐」

「はい」

「今、答えるのは無理だ」

「……そうでしょうね」

紗憐は微笑む。

何もかもお見通ししてやつか、かなわないな……

「まだ、ちゃんと俺は俺に決着をつけてないから」

「はい」

「だから、決着つけてから返事する」

「はい」

「………紗憐、ありがとう」

「はい」

有難う、紗憐。それに伊織。

「また、がんばれるよ。だから、がんばってみる」

決意表明の代わりに、火澄は立ち上がり、部屋を見渡した。

「あーあ、景気よく散らかしちまったな。片付け、大変そうだ」

さて、と腕まくり。

もう、うじうじしない。前を見る。逃げるな、自分。

檻から出るための鍵は、もう空いているのだから。

火澄はやっと、この部屋から、一歩前な踏み出した。

「火澄ッ！」

「火澄くん！」

「やっと出てきたか火澄」

リビングに現れた火澄の姿に、喜一は飛び上がり、紗憐は笑って、八木は低く呟いた。

照れくさい。自分に集まってきた視線で穴が空きそうだ。

「あと……ご心配おかけしました！」

ヒュッと頭に何かがかすめる。それは、腕。啞然としている火澄をよそに一瞬で首に絡みつく、ギリギリと圧迫していく。

チョークスリーパーだ。

「ぎゃあああああああああああああぎぎぎびゅぎぶぎびゅ」

足には強烈なローキック。さらに派生して足払いから四の字が極まる。腕は十の字で固められ、空いている片方の腕で必死に床を叩きまくった。

「どれだけ心配したと思っただよ!」

喜一が猛る。

「まったく、あんなに部屋壊して。後始末するのあたしたちなんだからね!」

脚を極める神楽は妙にいい笑みで。

「絞められる」

銀一郎はたばこをふかしながら、極悪な笑みで火澄を見下ろしていた。

「」「心配させんなこのくそガキ!」「」「」

続

episode / 35 おはよう(前書き)

ご無沙汰してます星見です生きてます。

「大丈夫か火澄？」

ひとしきり技をかけられぐったりと倒れ込んだ火澄の傍らにしゃがみこみ、陽差は言った。とはいえ彼の表情は心配する気遣わしげなものではなく、面白いものをみるときの好奇心な表情だ。

「う……俺、生きてますか……？」

痛い。全身が。

「ギリギリな。気分はどうだ？ 引きこもり君」

確かに火澄は不安定な精神状態のまま、食事も満足に取らず閉じこもっていたため顔色は良くなかった。肉体はボロボロだ。

けれど

「悪くないっス」

笑っていえるほど、彼は救われた。

そして思い知らされた。

ここにいる彼らこそが、火澄の居場所なのだ。

知らない内に浮かんでいた笑み。陽差はそれを見て、ほんの一瞬目を丸くしてから、にっと笑った。

一夜明けて、朝。

火澄は静かな屋敷の片隅で、踏ん切りがつかず悩んでいた。手にしているのは壊れた携帯電話。紗憐から貰ったものだ。殆ど原型を留めていないが、あの部屋から探し出してきた。

問題は携帯電話そのものではない。

問題は、電話するという行為だった。

「どうすっかなあ……辰兄、連絡したほうがいいよなあ」

あの時叫んだ言葉が悔やまれる。傷つけたのは他ならぬ自分だ。彼の携帯電話の番号は知っている。この屋敷に来たときに陽差に残っていたのだ。

「うー……」

合わせる顔が欲しい。だが、キツイ。

「あー……」

酷い事を言った。一方的になじった。

「いー……」

彼はどんな思いでこの電話番号を残していったのだろう。

「うー……」

彼はどんな心で此処を去ったのだろう。

「……………はあ」

結局踏ん切りがつかなくて火澄は携帯電話と電話番号の記されたメモをしまった。

立ち上がり、台所へ向かおうと朝餉の香りがした。もう喜一たちが準備を始めているらしい。

「さて、まずは朝飯作ってからだなあ」

ふと、火澄は足を止めた。いや、止めさせられた。

その人物は、火澄の姿を認めると、小さく笑った。

「……………やあ、おはよう」

その笑みは少しだけ気まずそうで、彼らしくないととっさに火澄は思う。

そんな笑みを作らせたのが自分だと分かる。だから、火澄も気まずく笑った。

「……………おはよう……………兄さん」

続

episode / 35 おはよう(後書き)

更新まで相当時間がかかってしまいました。現在作者は社会人一年生。ゴールデンなウィークも仕事漬けな職業です。でも頑張っています。そのうちパソコン買いたいです(サイト作りたい)。予定ではあと三話か四話くらいでヤクザでバイトは完結します。出来る限り頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0804d/>

ヤクザでバイト

2010年10月11日00時34分発行